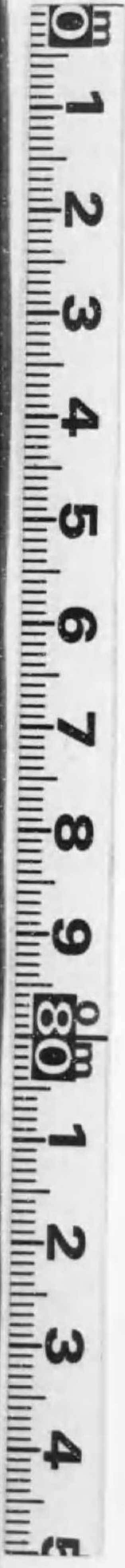


522
64



始



納本

史 祕 仁 應

轉 流

作 風 臨 川 笹

大 正
15. 1. 9
内 交

博
文
館

522-64

48-1

序

「花の御所」と題して、さる雑誌に連載したのを、大正十二年の夏、纏めて一冊子とし「京鹿子」と改題して出版すると、間もなくあの大地震で、殆んど其版本は烏有に歸した。さては闇から闇へ埋もつてしまはうとしたのを、さりとて惜しいものさ、書肆の好意で、再び出版することゝした。そこで「京鹿子」でもあるまいとて、「流轉」と改題する。人生の流轉、時代の流轉、さるにても書名までが流轉するのも、何となく可笑しい心地がせられる。

大正十四年の暮

笹川臨風識

目次

吹雪の巻……………一

清水参詣……南願の日……堤から

炎の巻……………一五

非人小屋……丹波と若狭……安本丹

前栽の巻……………三〇

駕籠の中……替玉……御堂の御灯

廊下の巻……………四五

五里霧中……壁に耳……劉輕者

目次

東風の巻……………六〇

雪解の水…管領の館…文の傾り

僧院の巻……………七五

義尋僧正…法師丸…直訴

文使の巻……………九〇

雨後の月…遊び買…土一揆

合戦の巻……………一〇五

東寺の塔…一千貫文の代…阿修羅王…人質

籠居の巻……………一三〇

塔上の一睡…忘れぬ夢…思案…降つて湧いた羅儀

鬼薊の巻……………一四〇

墓…宵蟲…思ひく…寄手の勢

山路の巻……………一六一

断末魔…長驅…女の聲…討手の大将

刺客の巻……………一七〇

男女の争…勇士來…虚々實々…闇の聲

競馬の巻……………一七五

雑兵…落馬…雑木林…一言の賞讃

山案の巻……………二二五

辻堂…楚囚…野武士…籠の鳥

邂逅の巻……………三二

血書…酒宴…烟をあとに…伏勢

小宴の巻……………二五

同盟と聯合…秘密…契約…微行

芽生の巻……………二七

懐胎…新造…出産…福根

小車の巻……………二六

引出物…曲者…破裂…無禮講

酔興の巻……………三六

洛中の警衛…風吹鳥…酩酊…逐電

野分の巻……………三三

天網恢々…密談…前管領…赤入道

風雨の巻……………三四

濡鼠…密計…小家の外…河原者

洪水の巻……………三一

愛手紙…急轉直下…鴨川堤…柳の木蔭

夜寒の巻……………三九

白眼坊…北山時雨…客間…酒賣る店

千鳥の巻……………三九

女乗物…質屋の男…牢舎へ…庫裡

發心の卷 目次

搜索……古狸……妙一尼……大夢

目次終

應仁流轉



吹雪の卷

清水參詣

朝からの雪催の空は、晝過から音もなく蕭やかに降つて來た。初めは粉のやうな雪であつたが、だん／＼と大きくなつて、白梅の花片のやうなのがぼたり／＼と降つて來る。東山は一面に烟の中に鎖され、鴨川の水の音ばかり咽ぶ如く聞える。夕方になると、雪は小休みなく、都の大路小路は一面に玉の臺を現はした。

其雪の中を乗物が一挺、雪を蹴立て、五條の方へと向ふ。昇夫のつく息も急しい。

吹雪の卷

「其乗物やらぬ。」

と、横合から大手を廣げて、行く手にすつくと立つた大男があつた。見れば黒装束つけて、腰には雙刀をたばさんだ曲者である。

昇夫は、ぎよつとしたが、弱味を見せまいと、

「急ぎの御用ぢや、邪魔するな。」

と、突き切らうとしたが、曲者はしつかと棒の先を押へて放さない。

「やらぬと云つたからにはやらぬ。それでも無理に行きたいとならば、此己の首切つてから参つたがよ
So」

相手の腰には双物がある。昇夫の二人や三人を切つて棄てるはわけのないこと。昇夫は命がもとより惜い、無理に相手を突き飛ばして行くだけの勇氣はない。其儘そこに乗物を下して、もう逃支度をしてゐる。

「これ下郎ども、逃げることはならぬぞ。逃げたら最後、追ひかけて首切つてくれるぞ。」
斯うおどされては、行くこともならず、逃げることもならず、其處に突つ立つてゐるより外はどうす

ることもならぬ。

乗物の中から聲かけたのは、女であつた。

「何ものなれば、我が行く手をさやぎりて、御用の邪魔致すぞ。」

と、聞いた大男はからくくと高笑ひして、

「こりやてつきり中つた。此乗物の主はまさしく花の御所から、御臺所の御使者として清水へ日参する

若菜女藤であらうがな。」

星を指されて、又吃驚したのは乗物の女。

「さう云やるからには、此私を存するものと見えるが、誰ぢや、名を名乗れ。」

と、顔は見せぬが、聲ばかり響いた。

「何、名を名乗れとお云やるか。改めて名乗るには及ばぬわい。これから善い所へ道しるべ致してくれ

よう。そこへ参れば、身共の誰であるかは善つく分るであらう。先づくそれまでは正體明かすには及

ばぬわい。あはゝゝゝ。」

と、又しても凄じい高笑ひ。

「此若菜は清水へ参詣致す御用がある。餘所などへ参つてゐる暇はない。さあ昇夫のものども、ちやつと早う昇いで参れ。そのやうな狼藉ものにかゝり合はせるには及ばぬ。棄て置け、早う行きや。」

と、可物の内では、氣も忙しく、聲も荒々しい。

「あゝ。」

と、云つて昇夫どもは擔ぎ上げようとする。

「どつこい、ならぬ。清水へ参るとならば、汝達は刃の鏑となして、亡骸は河原へ投げ込んでくれるぞ。身共と一緒に参れ、ぐづぐづ致すな。」

と、大男は破鐘のやうな聲でわめき立てる。

今は絶體絶命であるが、乗物の主は女であつて見ると、所詮此やうな大男に手向ふことは叶はぬ、まあまよと大男の云ふがまゝに、乗物を返さうとするに、愈々驚いたのは乗物の主、

「これ乗物をどこへ昇いで行きやる。私は清水へ参詣の御用があるに、引き返しては御用が済まぬ。

ことに今日は大切の日であるから、此雪を肩して、参籠致すのぢやない。今日参詣せぬとあらば、三七日の参詣が空になつてしまふぞや。五條坂も程近いと覺ゆれば、さあぐ早うぐ。」

と、せき立て、身を悶えてゐる様子。

大男は委細かまはず、

「其満願の日を妨げ致すのが、こちらの役目。此大雪にわざぐこんなとこまで出向うたのは、汝の御

用をさせない爲ぢや。さあぐ観念して、身共と一緒ににお出でなされ。いつまでもこんな寒い所へ置いては汝の身體にも毒、身共も亦きつい迷惑。それよりは早う暖い火にでもあつて、湯漬をお食べなされ。身共も褒美貰うて寝酒など飲んで寝たうござるわ。」

と、云ひながら、

「これ下郎ども急いだ、ちとばかりは酒手をくれるぞ。」

と、昇夫を勵ませば、酒手と聞いて昇夫どもも勇氣を出し、

「おつと来た。」

と、急ぎ足。大男も喘ぎぐ、鴨川堤をひた走りに北へ北へと向つた。

此時、比叡嵐は吹き荒んで、雪は巴と降り、鷲毛と飛び、飛花落葉と舞ひ、紛々として面を向くべきやうもない。日は暮れて四面は暗い。

大男も昇夫も大汗になつて、唯一散に降る雪、吹く風の中をゑいぐ聲出して駈ける。

昇夫はどこに行くのやら皆目分らぬ。大男を道しるべに唯無我夢中である。

乗物の中はひつそりとしてゐる。生きてゐるやら死んでゐるやら、それさへも分らぬ。

女の聲に依つて見ると、まだ年も若さうな。其若さうな女が清水参詣の途中から勾引されたのである。

生かすも殺すも此大男の手にある。思へば便ないことである。泣いてゐるのか、それにしてはそよとも聲がせぬ。さらば氣絶してゐるのか。乗物の中の、それと知る由もない。

満願の日

此乗物の中の主は、時の將軍、東山殿と諡はれた義政公の御臺所富子の方に仕へ申す若菜と云ふ侍女である。年若くはあるが、利發であり、主思ひである。尤もこれは御臺所が生の家日野亞相の許にゐた時から、お側に御用をつとめてゐた腰元であつた。其頃はほんの子供であつたが、御臺所は此女をこよなきものと思はれて、將軍家へ御縁づきなされた時にも特別におつれなされたのであつた。

將軍家と御臺所との御件は睦しくあつたが、どうしたものかお世嗣が生れぬ。御臺所は固より將軍家もこれを嘆いておいでなされた。尤も將軍家はまだ四十にはおなりなされず、御臺所は花ならば満開と云ふお年頃であるから、此後御子様が生れないとは限らない。然るに此に困つたことは、將軍家に御隠居の下心があるのである。

一體此將軍家は政治と云ふことに、餘り興味がおはさぬ。それよりも茶でも呑んで、花など見て、歌詠んで、能など舞はせて、お氣に入りの女だの、同朋などを周りに集めて、面白う浮世を暮らしたいと

云ふお方であつた。それも世の中が太平で金が有り餘つて、五日の風十日の雨、民豊に國榮えると云ふ時世ならば、將軍家となつて、世に時めいてゐるのも面白からうが、近來世間とはかく騒がしい。將軍家よりか、其下にゐる管領の方が勢力が強い。細川右京大夫勝元などと云ふ管領の威權は、朝日の上るやうである。おまけに天變地異が打つていて、諸國は飢饉の有様であつた。寛正元年二月は大地震があり、國々には戦争が起る。早魃に引きついで大風が吹く、洪水が出る。其歳の冬から春へかけて、人民の飢え死にするものが、日に三百人、五百人、六七百人とある。京都では六角堂の前で施行をしたが、中々以てそのくらいでは追つつかない。そこで死んだものを四條五條の橋下に埋めて、一穴に千人二千人と埋めるが、それでも足らないから、そこへ棄てしまふ。五山の寺々の坊主に沙汰あつて四條五條の橋の上で、大施餓鬼を行はさせる。飢饉につづいて疫病の流行、これで死ぬものも少くない。洛中洛外には盜賊が勝手次第に出没する。土一揆と云つて、あちこちに打ちこはしが始まる。今まで借りてゐた金子をもう返すに及ばないと云ふ徳政を出してくれと騒ぎ立てる。先づ天下は亂脈である。

ところが將軍家はもうこんな時代に七むつかしい政治をするのはいやだとの考へで、御臺所を始め綺羅錦繡を纏うた女どもを集へて日々夜々の御遊興

「月に花に眺めある殿を作りたものぢやのう。」との仰せ。

「上様の仰せとあらば、どのやうな石など、どのやうな樹など、御沙汰次第にお集めなされることが出來まする。」

と、上の意を承けて、お側のものどもが申せば、

「それも唯の石、唯の樹では面白うない。諸國の名木名石を集めて、ゐながらにして名所に遊ぶ心地致すやうにしたいものだ。」

それと諸方に沙汰あつて、費用を惜まずに、御殿お庭の御建築、斯くてしつくりつたのは、花の御所と云ふのであつた。

「花の御所の名に愧ぢぬやう、くさぐさの花植ゑよ。泉を流せ、築山つくれ。」と、日毎に何百人と云ふ人夫を使つての大工事、心あるものは眉を擧めず居られない。

此ことが天朝に聞えた。

「それは甚だ不埒千萬なことである。此やうに民百姓が困難致し居るに、天下の政治を掌る將軍ともあらうものが、民百姓をも顧みず、己が榮耀榮華に費を惜まぬとは何ごとぞ。」

と、いきまゝ公卿もあつたが、公卿の勢力などは少しもない時節であるから、なまじ其やうなこと云ひ出しては、どのやうなあとと祟があらうも知れずと、知つて知らぬ顔をしてゐる。

しかしいつしか此ことが時の天子後花園天皇の御耳に入る。龍顔麗しからず、お側に侍る近臣をお召しになり、

「將軍へ使に參れ。」

との御意である。

「はつ、何等の御用で。」

「これ遣はせ。」

と、懐紙へさらりと御宸筆遊ばされたのを御取らせになつた。

朝廷から勅使が室町御所に下向した。將軍家は恭々しく御下賜の懐紙を押戴き、推開いて拜誦し奉ると、詩が一首載つてゐる。御筆あとも見事に遊ばされてゐる。

「殘民争ひて採る首陽の薇

處々門を閉ぢ竹扉を鎖す、

詩興吟酸なり春二月

満城の紅線誰が爲に肥えたる。」

拜讀した將軍家は、はつとばかりに赤面して、思はずそこに額づいた。「恐り入りましてござります。」

とばかり、とかくの勅答に及ばぬ。此詩の意味は、世間では飢饉で人民が難澁し、どこもかしこも家々が閉ぢてゐて、春とは云へどまことに淋しく憐れであるのに、將軍お前だけは、どうしてそんなに贅澤をしてゐるのかと、御諷刺なされたのである。將軍家の恐縮せるは當然である。

流石の將軍家もいたく耻ぢ入つて、花の御所の工事を中止して、御意のあるところを奉戴した。固よりこのやうに政治がいやになつた將軍家であるから、どうか自分の職を誰かに譲りたいが、嗣ぐべき子がない。そこで今は出家してゐる義尋と云ふ弟を跡つぎにせうかと、内々細川勝元にも仰せられ、御臺所にもそれとなく速廻しに物語られた。

驚いたのは御臺所、どうか我身に世嗣の種あらせ給へと、煩悶の結果、お氣に入りの侍女若菜を清水觀世音へ三七日の代參。苦しい時の神佛頼み、今日は其満願の日であるから、降り来る雪を厭はずに、若菜は參詣しようと思ふ其途中に降つて湧いたる此危難である。

堤 か ら

乗物の中に居る若菜は死んでも氣絶もしてゐない。根が氣丈の女であるから、内からそつと乗物の戸を細目に開けて見たが、もとより相手の大男の誰であるかは皆目分らぬ。よし分つたところが詮ないこと。追つつけどこかへ伴つて行かれたなら、一切が明白になるであらう。

しかし御臺所のお使ともあらうものが、やみ／＼何ものとも知れぬものに勾引されたとあつては御臺所の御威光にもかゝはること、猶延いては將軍家の御威光にもかゝはる。尤も、近來は洛中すら盜賊が横行して、どこの公卿衆の娘を勾引したの、どこの奥方を引つさらつたのと云ふ忌はしい噂がないでもないから、此身も其やうなものゝ手にかゝつたのやらも知れぬ。

いや／＼さうではあるまい。先程も彼曲者が云ふ所を聞くと、確に此身を御臺所の代參と知つて、満願の日に其妨げをするものらしい。

盜賊としても其手より遁れることは難いが、満願を妨げるものとするに、到底、お使者の役目を果たすことはむづかしい。又盜賊とすれば、曲者一人は變である。五人十人二十人と黨を組んで横行致すであらうに、どうも相手の曲者は一人らしいところから見ても、これは誰かの指圖で、内密にしてあつた御

臺所の御祈願を、水の泡と消さうと云ふ魂膽であることはもう疑ひない。

折角の御祈願が其満願の日に妨げられるとなると、全く水の泡である。ちとばかりは剣法を知つてゐる。懐には短いながらも懐剣がある。相手の曲者が一人であることを幸ひ、躍りかゝつて一突きに突き殺してやらうかと、雄々しくも考へた。

けれども相手の曲者は大男である。又一人で此勾引の役目をするところを見ると、女とは侮つてはゐるものゝ、力飽くまで強く、剣法にも手練のものであらう。然らばなまじ手向うて縛められでもしたらば、どうすることもならぬ。乗物の中にあるとは云へ、幸ひ手も足も自由である。何とか計略を企らんで、此場を逃げる工夫をしよう。

逃げて落廻びて、清水に参詣して、満願の日を果さねば御臺所に申し譯がない。御臺所が此若菜を多数の中からお選びなされ、此内密の御役目を仰せつけなされたのは、若いながらも幼少の折から御率公申してゐる此若菜を二なきものに思召すからである。其若菜が此大事のお役目を果すこと叶はずとならば、御臺所の御苦心を反古にするもの、若菜の身の立つ瀬がない。

「南無大慈大悲の觀世音菩薩、どうか若菜を御救ひ下されませ、どうか満願を果たさせて下されませ。あゝ何とかして、此處から逃げる事が出来ませぬか。」

刻一刻に清水とは遠ざかつて行く。どこの果まで連れて行かれるのやら分らぬ。曲者が連れて行かうとする處まで行つたらば、もう往生である。逃げるなら其途中で、逃げるより外はない。

乗物の戸を少し開けた。吹雪がぱつと舞ひ込む、思はずひやりとした。四方はもう暗いが、ほんのり白く、左の下の方に見えるのは鴨川らしい。

「おう鴨川堤と見える。」

頭をつと差出して曲者はと見ると、吹雪の中を先へ立つて行く。

「おう河原へ轉げ落ちて、河原傳ひに清水まで、おうさうぢや。」

ひらりと被衣を脱いで、しつかと身支度する。

吹雪は亂れに亂れて、物の黑白さへ見えぬ。曲者も夢中、昇夫も夢中である。

「酒手をうんとくれよう、急いで参れ。もう遠うはないぞ。」

と、曲者は昇夫に勢をつけてゐる。

「いやに降る雪だ。どうも堤は一きは甚い。今日の昇夫は一生の難儀でござる。」

と、昇夫はへこたれ氣味。

「そのやうな弱い音吐くな。酒手が多いや。よい仕事だ。」

と、云ふ聲も吹雪に吹かれて、善くも聞えぬ。
 若菜はするりくと乗物の戸を開いて、四方を見廻した。能くは見えぬが、堤の上には行く養も見えず、来る笠もない。暫し水の音の遠いか、近いかを聞く耳立てる。水の中に落ちれば、此寒さに凍えるであらう。河原の雪の上に落ちれば、さしたる怪我もあるまい。御用のある身の怪我するは一大事と、しばし耳傾け、見つめてゐたが、折やよし所やよしと思ひ定めてか、頭を差し出すと同時に半身を乗り出し、河原を自覚けてひらりとばかりに身を轉ばした。
 物の事に堤の雪の上を滑つて、若菜の身は河原へ眞逆さま。落ち切つたところの杭で脾腹を打つて、其まゝそこに悶絶した。

炎の巻

非人小屋

降りしきる吹雪の、それも誰彼時であつたから、ありとは見えなかつたが、河原の中に一つのいぶせき小屋があつたのである。小屋と云つてもそれは名ばかりで、藁をぐるりと立て廻した掘つ立て小屋である。いづれ非人か乞丐かの住家であらう。

その小屋の中では煙が渦巻いて、積火が盛んに燃えてゐる。しかと其顔は見定められぬが、身には襦袢を纏うた、素性の善くなささうなのが二人、火にあたりながら打語らつてゐる。

「おい丹波、大降になつたのう。これちや明日の死人埋めも休みだらうなあ。」

丹波と呼んだのはいづれ丹波生れであるから、名などは通用せず、生國で呼ばれるのであらう、「もう佛の穴埋も飽きくしたのう。飢饉やら流行病やらで善うも斯う死人があつたものだ。埋める所がないから、河原に穴掘つて、一つに埋めてしまへとの御沙汰ぢや。これちや人間でも犬猫とかはりはない。それにしても、若狭、己達は善う生きてゐることぢやのう。」

若狹と呼ばれたのは、烟にむせ返りながら、

「いやに此槽は烟い、まだ善う乾いて居らぬと見えるのう。丹波、己達はびんく達者であるが、いつ何時河原の穴の仲間入をするやらも知れない。まあ生きてゐるうちに面白いことをしたいが、御同様に銭はなし、商賣が商賣だから、旨い汁はすゝれずかな。」

「おう、それにしてもあの安本丹はまだ歸りくさらぬか。」

「ほんにさうちや。根が安本丹だけに萬事がのろい。酒買ひにやつたのに、えらう暇取ることぢや。」

「かういふ寒い晩は、酒など飲んで、火に暖まつて寝るより外に楽しみはないて。」

「お互にいゝ年して獨身だ。」

「家も持てずに非人暮しか。」

「つまらないのう。」

と、兩人は感慨に堪へぬらしい。

「丹波、けれど考へて見りや、これも世話なしでいゝぜ。」

と、若狹はそれ相當の理窟をつけようとしてゐる。

「そりやどうして。」

「なまじ女房子があつて見ろ、己達のがたれ死したら、食ふに困るは知れたこと。己達にしても、女房子があつたら往生路が悪いや。獨身の方が結局氣樂と云ふもの。」

「はゝあ若狹、まあ安心しろや。己達の所へ来る女もあるまい。」

「それもさうだが、公方様だつて公家衆だつて、身分はよし位はあり、官は何とか彼とか云つて高うはあるが、かう世の中が騒々しくつては、氣樂には居られまい。旨い酒飲んで、美しい物食べて、いい衣着てゐるもの、おちく眠られぬやらも知れぬて。洛中にも押込強盗が目星い家邸と見れば、有無を云はせず入る世の中だ。ぶち破しの流行る世の中だ。己達のやうな商賣は澤山な錢にもならず、御殿と云へば此小屋、菰の上のころ寝で、面桶の飯食つてはゐるが、心配と云ふものは、まあ微塵もなし、氣樂と云へば、此上なしさ。非人が止められぬわけさ。」

「さう云やさうだが、己達だつて、生れ落ちての非人ぢやない。時世も悪し、自分も悪し、持つて生れた放埒三昧の擧句が、よくないことをする、病氣にはなる、誰もつき合つてくれず、食ふに困つて、それからたうとう非人になり下つたのだ。心配はあつてもえいから、一日でも公家衆や良い人の身分になつて見たいものだ。旨い酒も飲みたい、美しい物も食べたい、善い衣も着たい、美しい女も見たい。死人の穴埋なんて商賣はつくづくいやだ。」

「丹波、さう落膽するなよ、又どのやうに善い運が向いて来るやらも知れぬ、それより早う安本丹が歸りくさればいい。」

「ほんにさうぢや。安本丹のことだ、此大雪にまご／＼してゐくさるのであらう。」

「おや表に雪を拂ふ音がする。安本丹が歸つて来たのであらう。」

そつと薦あげて外を伺ふと、もうとつぷりと暗い。藁の雪を拂つてゐるらしいのは、確に安本丹と呼ばれた小男である。

「おい本衆か。」

「さうだよ。」

と、答ふる聲は震へてゐる。

「可哀相に本衆寒いので震へてゐるぜ。」

「いかい御苦勞だつた。さあ早う入つて火にあたれや。」

「大哥。」

と、小男は大きな聲を揚げる。

「何だよ。」

「ちよつくら手を貸してくんろ、大へんなお客さまだ。」
と、呼ぶ聲は尋常でなかつた。

丹波と若狭

雪の中を擔いで来たのは、美しい繕箔した衣裳を纏うた上臈である。

丹波も若狭も、これには少からず驚いたが、そこは商賣

「そんな死人を擔いで来てどうする。衣物だけ剥ぎ取つて河の中へ叩き込めや。」

本衆は首を掉つて、

「死人ぢやない、まだ温味がある。火にあてたら又生き返るよ。」

と云ふ。

「本衆にも似合はぬ。温味がありや助かる。まあ小屋の中へ引摺つて入れたがよい。」

「おつと来た。」

と、本衆は其上臈を火の側へ擔ぎ入れた。

「おう、これは美しい若い上臈だ。一體おぬしはどこから拾うて来た。」

丹波と若狭

「あの土手の下に轉がつてござつたから、擔いで來たよ。」

「こいつあ石ころ見たいな女だ。」

「そりやさうと酒はどうした。」

「おつと來た。此にあらあ。」

と、本衆は腰から酒筒をそこへ出す。

「御苦勞々々。其上藤の顔へ水を吹いてやれ、口から水注いでやれ。」

「おつと來た。」

と、本衆は甲斐々々しく。

「名を呼べや」

「なんて名か、分らない。」

「構ふこたない、上藤と呼ぶんだ。」

「おつと來た、上藤々々。」

と耳のそばで怒鳴り立てると、これが通じたか、うんと一聲、目を細く見開いたのは、若菜であつた。堤から落ちて杭で脾胃を打つたまゝ、夢のやうに絶え入つた若菜は、又介抱されて息を吹き返し、一

目此場の光景を見てあつとばかりに打驚いたのである。まさしく自分は非人の小屋にゐる。霧茫茫と生えた、しかも片目の男と、額に大疵のあるぶよぶよ太つた癩病やみとも思はるゝ男とが、楷火のあなたで、此方を見つめてゐる。側にゐるのは、反齒の小男、目は爛れて、赤んべいである。

ぎよつとして、思はず、懐の短剣をかい探つた。

「上藤、お氣がつかれたかのう。」

と、片目が聲をかける。

「丹波見や、美しいぜ。今に運が向いて來ると云うたのは、虚事ではござるまい。」

と、額の疵がにやり／＼と笑ふ。

「ほんにさうぢや。」

と、片目もまたにやり／＼。

「さあ上藤が息吹き返して目出たいや。本衆其酒を燗める。」

「おつと來た。」

と、本衆はお燗番をつとめる。

若菜は座り直して、

「どうもお蔭で助かりました、辱けなうござる。」
と、會釋すると、額の疵は、

「まあ、お前さんも命其加のお人さ。此大雪にあの土手の下で絶え入つたら一時もたぬうちに凍え死ぬのは定ぢや、それをこの小男が通りかゝつて此へかき入れたのは、神佛がお見棄なさらぬからぢや。まあゆつくり火にあたつておいでなされ。」

と、顔に似合はぬ深切らしい。

「辱けなうはござるが、妾は仔細あつて、他處へ使に參るもの、一時半時も心懸りな。もう元氣もつきました。追つて改めてお禮に參りますが、今日はこれでお暇致しまする。」
と、起ち上らうとする。

驚いたのは本業、

「お前さんは此大雪にどこへお出でなされるのう。」

「さる處まで。」

片目の丹波はからりと打笑ひ、

「此大雪に女の足でどこへ往かれませう。今夜はこゝにゆつくりお出でなされ。」

「さうとも、今夜も明日の晩も明後日の晩もいつまでもお出でなされませ。」

と、額の疵の若狭も相槌を打つ。

「幸ひ此やうな男世帯のところへ、天女のようなお前さんがお出でなされた。酒も今爛が出来る。一つ酌なとして下され。」

と、片目の丹波はそろ／＼にじり寄る。

「え、汚ばし。」

と、若菜はあと退さりしたが、根が利發の女、きつと心に思案した。相手は三人の男、遁れようとして通れることは出来ぬ。若し理不盡にも無禮致さば、其時は此懐劍にて切つて／＼切りまくり、是非に及ばぬ時は一命を棄てるばかり、先づそれまでは欺すに若くはないと、やう／＼に頭をあげ、

「妾のお酌にてよければ、命をお助け下されたお禮に致しますせう。」

「ほう善うお云やつた。」

と、片目の丹波はもう目も鼻もない。

「さあ出来た。」

と、丹波と若狭とは破土器をぐいと前に出す。いやな奴とは思つたが、こゝぞと若菜はそれへ浪々と注

「お前どうぢや。」

と、本衆を見返ると、本衆首を掉つて、

「已や酒は嫌ひぢや」

と、そこへごろりと轉がつて、唯にやりくと若菜の顔を眺めてゐる。

「もう一つお酌ぎやれ。」

と、丹波は土器を出す。

「あい。」と、若菜は又浪々と注ぐ。

安本丹

盃は重なる、小屋の中は暖い。丹波も若狭も大分酒が廻つて来た。廻るにつれて、遠慮のない高調子。

「今日は善い日ぢや。お前さんのやうな美しい女が此やうな小屋に天降つて、已達の酌してくれるとは、どうやら夢みたいな。」

「生れ落ちてから始めてぢや。本衆、おぬしは善い功德したのう。」

「已や酌してもらはいで、一つちつまらないや。」

と、本衆はつんとする。

「は、お酌はしてもらはずとも、そこに寝てゐて、此上藤を見てゐりやえいぢやないか。」

と、若狭は笑ふ。

「まあ己それで勘辨してゐるのさ。」

暖かなること春の如しで、片目の丹波も額の疵の若狭も、大分酔酩して来た。次第に呂律が廻り兼ねる。何やら云ひ罵つてゐるが、何が何やらさつぱり分らぬ。そのうち兩人とも目がとろんこになる。いゝ機嫌になつて、うつとりとなり、又折々に目を見開いて、何やらくどくど云ふかと思へば肝をかく。

よい頃合と、若菜は本衆の耳に口、

「本衆さんとやら、お前にお金を澤山上げよう、褒美も取らせうほどに、妾を此から逃がして、案内してはくれぬか。」

と云はれて、本衆急に起き上り、丹波と若狭との顔をしげしげと見てゐる。

「もう一杯注がぬか。」

と、丹波の云ふにぎよつとしたが、それも寢言と見えて、あとはぐうぐう大解おほいびき

「金くれる、褒美くれる。それでお前さんのやうな美しい人と道連れか。おつと来た、心得た。」

「上臈はどうした。」

と、若狭は大聲。若菜も本衆も愕然としたが、これも寢言と見えて、たわいもなく首を前に傾けてゐる。

「さあ早う〜。」

と若菜に急ぎ立てられて、本衆は起ち上る。

若菜は目敏く、小屋の釘に引かけある蓑と笠とを見て、

「これ借りよう。」

と、素早く我が上衣を脱いで、驚く本衆に被せ、蓑を取つてそれを我肩にかける。

「あゝ己やいゝ衣着た。それこゝに草鞋もある。穿いたことはござらつしやるまいが、それ穿かつしやSo。」

と、本衆が差出す草鞋を習はぬ足にしつかと結びつける。

「ちつとも早う。」

「おつと来た。」

と、本衆は嬉しまぎれに、引添うて、小屋の蓐を上げる。一陣の冷風は利きこと鎌の如く、さつと丹波と若狭との顔を撫でた。酔眼割と見開いた兩人は、酔ひながらも、蓑と笠との若菜と、美しい衣纏うた本衆とを見た。驚いて起ち上らうとして、

「これ女子どこへ行く、本衆どこへうせる。」

と、よろめく足を踏みしめながら、引つ捉へんとする。

「えゝ無禮者め。」

と、若菜は振り拂ひながら、雙の織手に力をこめて、片目の丹波を倒れよとばかりつきのければ、丹波よろ〜とよろめいて、若狭と鉢合せ、ばつたり倒れる。

「己れ上臈逃げうとて逃がすものか、手ごめにするぞ。」

と、若狭は大手を擴げて追ひすがらうとする。

本衆ははや身を通れて、小屋の外に出た。つゞいて薦引き上げて、若菜の半身は外へ出る。若狭はそれを捉へようと、倒れた丹波を乗り越えて、若菜の蓑に手をかける。

するりと身を引つ外すと、若狭は空を掴んで、ばつたり倒れる。途端に蓐が外れる。旋風のやうな風が

其薦を巻いて、ぱらりと中へ吹き入れると、樞火はぱつとそれに燃え移る。あなやと云ふ間もあらせず、炎が閃めく、火の手が揚がる。黒い煙、紅い火。あとには阿鼻叫喚の聲が聞える。小屋から火が起つたので、仰天したのは本衆。

「やあ火ぢや、小屋が焼ける。こりや大變、消さずばなるまい。」
と、あと戻りせうとする。

「あのやうな小屋が燃えたとして何の惜しかる。幸はひに暗路を照らす灯が出来た。此間にちやつと一走り。」

と、若菜は雪の河原を一目散。

「上藤待つた。丹波も若狭も焦げ死ぬであらうから、私あ火を消して案内せう。」

「何のそれどころであるか。お前が来ずば妾は一人で。」

「そりや危い。私が案内するよ。それでもあれあのやうに小屋が。」

「そのやうにぼんやり立つてゐては追手が来る。案内するなら早うぐ。お金もたんと上げるぞや、褒美もくれるぞや。」

と、云はれて、本衆

「おうさうちや、お金がもらへる、褒美がある。小屋が焼ければ丹波も若狭も死んでしまふばかりや。もう吹雪に酒買はせにやられることはない。上藤お待ちやれ、案内するよ。」

と、本衆も喘ぎぐ。

吹雪の中に炎は映えて、河原を照らした。雪の上を笠と蓑と上藤の上衣とが、五條の方へと急ぐ。此時、堤の上を雲突くやうな男が雪を蹴立て、眞つ先に駆けて行く。百歩二百歩と後れて、鴛籠身ま

と三四人のものが駆ける。

炎々と燃え上る河原の火に一同は足をとどめた。

「雪の中の火ぢや。河原の小屋の疎相火と見える。」

「うん、暖かさうな火ぢや。」

「よい灯ぢや。それにしても御臺所とやらの女の使はどこにて消え失せたことやら。」

「面妖至極ぢや。」

「奇怪千萬。」

「遠くも行くまい、急げぐ。」

河原の蓑と笠と上藤の上衣とは固より之を知らぬ。さして行くところは同じ清水觀音堂である。

前裁の巻

駕籠の中

30

空を焦した火の手で、堤上の黒い影を、ふりかへりさまに、若菜はちらりと見た。早速の思案で、追いついた上藤の上衣着けたる小男に、それと指さし、

「あれあの方から堤の上を駆け来る人影が見えるであらう。どうやら駕籠も来るらしい。ありや妾を迎へるものどもであるが、さる仔細あつて、妾は今あの人達に逢ふことはならぬ。幸ひ、汝は妾の上衣をつけてゐる。早う堤の上につて、逃げ行く風をしやれ。暗ではあるが顔を見られぬやうにしたが善い。すると、あの人達は汝を妾と思うて駕籠に乗せるである。汝は一言も云はずに、あの駕籠に乗つて行きや。きつと馳走もしてくれる、金もくれる、褒美もくれる、よい御殿で美しい女子どもにちやほやされる。妾の身代りぢや、さあ早う堤の上へ行きや。妾はあとから御殿に参るほどに、先づそれまでは顔隠して、物言はずに、妾のやうなふりしてゐや。」

と、安本丹と見て取つて、此本衆を替玉につかはうとする。本衆は驚いて、

「何、此己がお前さんの身代りするのによ。」

「汝は小男、女と見擬へられるは必定ぢや。其上衣を頭からすつぽり被つて、ちやツと早う行きや。」

「己が駕籠に乗れるかよ、それで御殿で馳走されるかよ、金がもらへるかよ、褒美をくれるかよ、美しい女子がちやほやするかよ。こりや面白い。おつと来た、己はお前さんの身代りするぞよ。」

と、そこは本衆、勇み喜んで、挨拶もせず、さつさと河原の水を躍り越して吹雪の中に黒い影ばかりを残した。

「あゝかうして置けば、あの愚かなものを妾と思ひ定めて、駕籠に乗せて、どこかへ連れて行くである。その間に清水様まで参れば大願成就。」

と、若菜は年に似合はず、大膽でもあり、智恵もあり、勇氣もある。

河原の小屋の火の手は鎮まつて、あとはもう暗い。ひつそりとした此堤の上を此暮夜に行く人はない筈であるのに、唯一人とぼく／＼と先に立つて駆けるものがある、どうやら其上に着けたのは上藤の上衣着たらしい。

喜んだのは、追手の眞先に立つた大男である。振り向いて、

「それあすこに女が行く。引つ捕へて駕籠に入れや。」

31

と、吹雪を衝いて、近づきさま、むすし其上衣を捉へた。

「逃げようとして逃がしはせぬぞ。此方は善う私に手をかけさせるお人ぢや。さあ駕籠のもの早う参れ。」
本衆は心に可笑しかつたが、一言も云はぬ、素直に駕籠の中に入れられる。

「先づ安堵した。又逃げられては一大事ぢやほどに、此細で駕籠をぐる／＼巻いて置けや。」
と、大男は沙汰する。

駕籠を一つとんと叩いて、

「此方も物好きぢや。此吹雪の中をどこへお出でなされうとはなされたぞ。早う館へお出でなされ。火もたんとある、馳走もたんとある、暖かい臥床もこしらへてある、引出物もあらうも知れぬ。今度は大人しう館へお越しなされ。」

と、一人の男が、中へ聞えよと云ふ。

喜んだのは本衆である。危く「おつと来た」と言はうとしたが、我と我口を押へて、

「小屋に寝て、丹波や若狭にこきつかはれるとは遠うて、こりやえゝ目に出逢うた。どうだい此駕籠の乗心地の善いこと。己あ生れて始めてぢや。丹波も若狭も乗たつことはあるまい。いや片目と額の疵と

はどうしたか知ら、こんがり黒焼きになつたであらう、己を酷く使ひくさつた罰ぢや。それに引替へ、此己はこれから御殿へ行く、さま／＼の馳走が食べられる、暖かい火にあたつて、暖かい蒲團に寝る、金ももらへる、褒美もくれる、美しい女に侍かれる。こりや善い運が向いて来た。」
と、獨語ちしながら揺られ／＼て行く。

駕籠の外では、

「今夜はひどい目に逢うた。」

「此寒いのに堤の行きつ戻りつを、かう度々させられてはかなはぬ。」

「それでもあすこで逢うたから善いやうなもの、終には逢ふことがかなはなかつたかも知れぬ。」

と、愚痴やら氣休めやらの言葉が聞えた。

駕籠で揺られてゐるうちに、本衆いゝ氣持になつて、うとうと眠り出す。たうとうさる館について駕籠の中からつき起されるまでは一切夢中であつた。

替 玉

「唯今戻りました。」

と、大男は静に縁に頼づいた。

前裁には面白う雪が積つて、ばつとさす灯の影には松の枝もたわゝに、河に鶯の夢は冷かであらう。

一室の戸は半ば開いて、室内には爛々と銀燭が眩しい。奥まりたる處に、火桶を傍に脇息にもたれてゐるのは、四十路餘りの女であつた。自然と威嚴が備はつて、春風が吹くといふよりは寧ろ霜の氣が冴えてゐる。左右に居流れたるは老女一人と、侍女三人とであつた。

「おう喜内が戻りよつたか。大儀であるのう。」

と、奥方は重々しい聲で勞らはれる。

老女は縁の方へ膝行出て、

「喜内殿、今度は空駕籠ではござるまいのう。」

大男の喜内は頭を掻き、

「先ほどは、いたう失敗しました。あの女子が、あのやうな藝當やらかさうとは存じも寄らず、汗かきながら歸つて参りますと、中は蕨抜きのから。さんさんに冷かされるやら、嘲られるやら、叱られるやらで、又びつしより冷汗かきました。今度は大丈夫、途中で難なく引捕へ駕籠に纏打つて、あちらま

で連れて参りました。」

と、したり顔である。

「女子も大それた女子だが、喜内殿も手ぬかりでござつた。それを今度は苦もなう引捕へてござつたは、お手柄でござつたのう。高が知れたる女子が御佛への願掛、どうでもよいことではあれど、あの女子をすかして糺さば、御臺様の御計略も分るといふもの。又願の妨げ致すは、御臺様の御本懐を妨げて、其御非望をお止め申さうとの爲ぢや。しかし奥様があの女子にお逢ひなされては事面倒。と云うて先は御臺所の御使者ぢや。其お使者を我等が取糺したとあらば、どのやうな難儀が降つて来ようも知れず、先づあちらの居間で、心盡しの馳走をして、さま／＼の引出物取らせ、すかして追々に問ひ試むるが上分別。其接待役は我等が致さうほどに、駕籠をばあちらの縁先へ廻しやれ。あちらには火も善う起つてゐる、馳走の用意もしてある。さあ梅ヶ枝殿も千草殿もござらつしやれ。お前方も接待役やら、又すかして問ひ糺す目附の役ぢや。奥様には次の間へお出で遊ばして、襖の間から様子をお垣間見遊ばしませ。」

と、老女は辯じ立てる。

「喜内殿、此大雪にいかい難儀であつたのう。追つてはお前にも御褒美がある、又駕籠の者どもにも取

らすものがある。ともかくも其駕籠をあちらへ、御内人の手をかりてな。」

「長まつてござりまする。」

と、喜内は縁先を離れる。一同も設けの居間の方へと連れだつて行く。奥方も其座を離れられた。設けの居間には火桶の炭が赤く炎を吐いてゐる。それと云はゞ馳走は持ち運ばれるやうに用意がしてある。老女と二人の侍女とは、縁先に寒さうな顔して座りながら駕籠の來るのを待つ。隣りの居間には奥方始め二三の侍女が隙見してゐるのである。

やゝあつて一挺の駕籠は靜にそこへ据ゑられた。開かば御臺所の御秘藏の艶女が現はれるであらう、と、一同は前に乗り出して、目を離さず見つめてゐる。

喜内は繩を解いて、駕籠の戸を開いた。

「これ女子の衆、若菜女臈、もう善い、お出なされ。」

と云つたが、中はそよともせず、出さうな氣配もない。

「えゝ上臈は死んで居る。こりや一大事ぢや。」

と、喜内は思はず頓狂の聲を揚げた。これは必ずしもないことではない。其やうに使命を大事に思ふものならば、劍に伏して其節義を全うせうと云ふ覺悟を起すも當然である。

「何其女子が自害したとや。」

と、老女も思はず驚きの聲を放つた。一同は愕然とした。

喜内は駕籠の中をのぞき込むやうにしたが、纏絡した上衣がふわりと其身を包むばかり、正しく魂は此世にとゞまらぬと見えた。

老女の叫びで、奥方もそこへ思はず姿を現はした。さあ斯うなると一大事である。御臺所の御使者を途中から奪つて此館に勾引した、その爲に御使者が自害したとならば、其死骸をどこへどうすべきであらうか。鴨川の河原へでも棄て置かば、わけのないやうではあるが、又どうして事の漏れようやらも知れぬ。一同は途方に暮れた。

「ともかくも引き出して見や。」

と、奥方は聲をかける。つゞいて、

「決死の覺悟致したとあらば、不便なものよ。お主の爲に命を惜しからず思つたは、まこと世にも珍らかな女子。これ汝達も見做へや。」

と仰せられる。

喜内は手を駕籠の中へつき込んで、引き出さうとして、はつと後退さる。

「これは異ぢや、鼾の聲が聞えます。こりや自害でなうて、一眠り致して居るのぢや。」

「何、鼾かいて寝て居るとな。」

と、一同は又事の意外に呆然となる。

「大膽不敵やのう。」

と、奥方は云ふ。

「私どもは、その大膽を見倣ひませうか。」

「おほ、う、う、梅ヶ枝さん、鼾かいて眠ることなら、此方さんは一つち上手や。」

「千草さんも、負けては居さんすまい。」

老女は目に稜角立て、二人をはつたと睨み、

「其不敵な女子を起しやらぬか。」

言はれて喜内は、はつたと肩を叩く。

「これ上臈、起ぬか。善う寝て居る。さあもう館へ参つた。」

「おつと来た。此處はどこぢや。」

と、わめきながら、駕籠から躍り出たのは、女子でも若菜でもなく、御存じの、それ本衆。

御堂の御灯

驚いたのは奥方、老女、梅ヶ枝、千草を始め侍女一同。喜内以下の人々は唯あつけに取られる。

まさしく男子と見て取つたれば、老女は懐剣手に、奥方をかばふ。一同もやうく我に返つて、すは

と云はゞ、切つて伏せん身構へ。

「やあ美しい女子がたんとぬよる。これはいかい立派な小屋ぢや。馳走してくれるか、金もらへるか、

褒美くれるか。」

と、赤んべえの爛れた目をした、不器量千萬な、口あんぐり開いて、間の抜けた、薄汚い小男は、縁へ

躍り上らうとする。

「己れ無禮もの、控へ居らう。」

と、老女は、はつたと睨みつける。

「こりやばあさま、其やうな目つきして、おどしたとて、何で恐から。一體己をどうしてこゝへ連れて

来たのや。連れて来ておいて睨むと云ふのがあるか。お前よりは、その若い美しいのがよいぞよ。」

と、拔作の本衆、少しも驚かぬ。

「喜内殿、そりや一體何ものぢや。これが、其御臺所のお使者でござるか。」
と、老女は喜内に鋒先を向ける。

「さあそれは。初めから此ものが駕籠に居りましたか、それとも二度目に身替りとなりましたか、其邊はとんと心得ませんで。」

と、喜内は、面目なげに頭を掻く。穴でもあらば入りたいと思つて、見廻したが、生憎入る穴もなささうである。

「そこな男は何ものでござるのう。」

「さあそれは。」

と、喜内は、本衆を見返つて、

「汝は何ものぢや。」

「河原のものや。」

「河原の何ぢや。」

「非人や。」

「えい非人とな。あゝこりや汚はし。」

と、女どもは一同に身慄ひする。非人と聞いては、流石に手をかけた懐劍に對しても申譯なしと、老女も少からずへこたれる。

「奥様、もうあちらへ入らせられませう。」

と、奥方に申上げる。奥方は不機嫌の面色で退座する。引添うて一人二人の侍女も立退かんとするを、本衆目敏く見て、

「これ女子ども待たつしやれ。あちらへ行くならば、私も一所にいのうよ。」

と、駆け上らんとするを、喜内、其襟首つかんで、

「えゝ推参な。」

「あいたゝゝ。」

と、本衆は泣顔になる。

喜内は襟首放してつき飛ばしながら、

「汝の名は何と申す。」

「名などないよ。」

「名がない。それなら人が何と呼ぶ。」

「本衆とか、安本丹とか云や、己あ返事するよ。」

「あはムム、ム。」

「はムム、ム。」

流石に老女も侍女も喜内も、一同に笑ひを禁じ得ぬ。

「こりや途方もない愚かなものが舞ひ込みをつた。それにしても此上衣は確に上臈の召物。これ、汝は此上衣をどこから持つて参つた。」

と、喜内は其上衣を指す。

「はムム、ム。これかよ、こりや堤の下から拾つて来たんだよ。」

と、本衆は大にこく。流石に若菜に云ふなと口留めされてゐたのを忘れない。

「何堤の下で拾つたとな。はムア讀めた。駕籠から飛び下りた時に落したのであらう。或は其儘、雪に埋れて生死も知れずなつたるを、此れなる河原の非人が上衣だけ拾うたと見える。其上衣を目當にしてこれなる非人を駕籠に乗せ、此まで連れ参りたるは、こちらの不覺、いやもう重ねくの失敗にて、面目次第もござりませぬ。」と、喜内はとうく兜を脱いで、閉口頓首の體たらく。本衆は委細構はず、

「あゝ寒い、火に暖めてくんろよ、馳走はどうした、金はいつくれる、褒美はどうちや。」と、わめき立

てる。

「えゝ胡蠅い。御前の汚れぢや。早う其非人を叩き出さずや。」

と、老女は縁の上で次團太踏む。

「何、叩き出せとぬかしたな。叩き出して見ろ、火をつけて、此小屋を焼いてやらア。己の小屋も焼けた。此小屋は大きいや、つけたら面白いや。」と、手を叩く。

「何、火をつけると、不氣味な。喜内殿、此方の過ぢや。酒でも飲ませ、飯でも食べさせ、錢やつて表へ送り出しておくりやれ。此やうなものを相手にしては、どのやうな難儀に逢はうも知れぬ。あゝ寒、あつたら風邪を引いたさうな、はつくしよ。」と、くさめしながら、愚痴たらしく奥へ引き退る。

「えゝ非人、こちらへうせう。」

と、喜内は本衆引き立て、表の方へと出る。

此館で此喜劇の演ぜられてゐる間に、女の一念、凝りに凝つて、雪にも凍えず、路にも迷はず、若菜は河原から堤へさしかゝり、一さんに轉けつ、まろびつ、五條坂から雪を蹴つて、清水へと辿り着いた。

御堂の御灯は風に揺られて、明又滅。丁度若菜の今夜の運命のやうであつた。御堂の前は森閑として

人つ子一人の影もない。着たる笠脱ぎ棄て、着けたる蓑を投げ遣り、御堂の上に喘ぎく上つて、
 「南無大慈大悲の觀世音菩薩。願くはお主なる御臺様の本願を遂げさせ給へ。」
 と、念じ畢ると、張りつめた氣が弛んだか、其儘そこに居縮まつたまゝ氣が遠くなつた。
 人一人の影がないと思ひきや、内陣の方より黒い影がひらりと駆け寄つて、若菜の背からむすど抱いた。

廊下の巻

五里霧中

見たところでは、まだ三十路には間のありさうな若作り、面長な色白で、眼のきれの善い、上品ではあるが、愛嬌に乏しい御臺所富子の方は物案じ顔。

「紅梅や。」

と、呼ばはる聲もどこやらに、じれつたさうな氣味である。

「は。。」

と、そこに畏まつた侍女を、じろりと眺めて、

「まだ若菜の便りはないかいな。」

紅梅も淨かぬ顔。

「まだちつとも手懸りがござりませんさうで。」

「表の役人どもは、何して居やるぞへ。」

と、聲はけんを帯びて聞える。

「意氣地なしのう。」

と嘲つて、

「若菜が館を出たのは、あの大雪の降つた日の七つ下り、もう今日で三日になるぞへ。庭の雪は大方消え失せたのに、若菜の姿は皆目見え、其消息さへに聞えぬわい。」

此う語り來ると、御臺所は、愁然として、ほろりと、こぼれる涙を、そと袖でぬぐつて、

「可愛なものよのう。どこにどうして居るやら、無事息災にゐるか、若しやそれとも。」

「あれ臺様、何でそのやうなことが。」

と、紅梅もおろ／＼聲である。

「無事に居ると云やるか。」

「そりや無事に居りませう。」

「若菜が無事にゐるとは、汝どこからどうしてお聞きやつた。」

「さあそれは。」

「無事か、無事でないかは、汝知りやるまう。」

「仰せの通りにござりまする。」

と云つて、紅梅はよ／＼とそこに忍び泣きした。

御臺所はや／＼あつて、

「藤野をこれへと申せ。」

と仰せられる。紅梅は立上つて、退べり出ると、入り代つてそこへ伺候したのは、老女の藤野。

「召しましてござりまするか。」

「若菜の消息は知れぬかへ。」

「とんと知れませぬので、困じ果てゝ居りまする。」

「表役人からは何とか申し参らぬかのう。」

「手を換へ品を替へ、洛中洛外残るところなう探して居りますが、てんで有處が分りませぬ。臺様、

こりや唯事ではござりませぬぞ。」

と、老女藤野の眼は異様に輝いた。

「あの大雪の降つた日に伴した駕籠のものどもは如何致した。」

「取調べましたげにござりまする。途中で異様な大男に出逢ひ、理も非もなう或館まで連れ行かれまし

た、其途すがら、若菜がふいと姿を隠したと申します。」

「駕籠に乗つてゐたものが姿を隠したと申しやるか。異なことであるのう。」

御臺所の不審も尤もである。御臺所は猶言をつぎ、

「又その館と云ふのは誰人の館ぢや。」

「誰の館か、とんと分らぬと申します。又吹雪の折で、若菜が姿を隠したのが、どこであつたか、分らぬと申します。其館に着きますと、駕籠の戸は開いてゐて、主は藁抜けの殻と申します。」

「ふう。」

と、御臺所は柳眉を顰め、

「若葉は囚はれの身となるを恥辱に存じ、途にて、身を躍らしていくへか遁れたのであらう。年は若うあるが、流石は彼ぢや。ぢやが、そこから、何處へ参つたのであらうな、ええ心配ひな。」

と、又もや愁嘆の思入れ。藤野は默然として答へも申上げぬ。

「あの大雪ぢや、凍死んだのであらうか。凍え死んだとならば、骸の分らぬ道理はない。近頃洛中洛外には盗賊勾引が横行するげぢや。若しや其ものどもの手に落ちたのでは。」

御臺所は五里霧中に迷うて居られる。いや御臺所ばかりではない、若菜の姿は清水観音堂から雲隠れと

なつて、誰人も其行方を知らぬのである。

「若菜は利發ではござりますが、まだ若年にござります。臺様の大事の御使者には、役不足にござりまする。」

と、藤野の聲には、下げすんだやうな嘲の影が漂うてゐる。御臺所は不快に感ぜられた。

「何で役不足ぢや。」

と、きつとなられた。藤野は老功者、少しも慌てず、

「藤野のやうな老女でござりますれば、勾引もござりますまい。まつた、誰人かの館に連れ行かれまして、びくとも致しませぬ。」

「其代り、汝では雪の日の使者は出来ぬわ。」

と、御臺所は輕蔑したやうな笑ひやうをなされる。

「雪が降りますとも、槍が降りよすとも、どこへなとお使ひに参りまする。」

と、藤野は一向に動じて居ぬ。動ぜぬだけ、此女の若菜に對する同情は薄く見えた。

壁に耳

「藤野殿々々々。」

と、うしろより呼びかけるものがある。藤野は御臺所のお居間から、今しがた、己が局へ歸らうとする其廊下で呼びとめられたのである。

「誰だぞへ。」

と、老獺な眼をして振り向いた。對手をそれと推すると、急に笑顔、

「おう遊佐様でござりまするか、何か御用で。」

と、丁寧に會釋する。

「御臺所に仕へ申す若菜とやらが行方をくりましたと申すぢやないか、手懸りがあるかな。」

四十恰好の、分別顔した、遊佐七郎は近寄りさまに尋ねる。老女藤野は、ふんと鼻の先で高慢な笑を

して、

「密夫とでも出奔したのでござりませう。」

案外な返事で、遊佐は面喰つた。

「何ぢや、不義いたづらでもして身を隠したと申しやるか。」

「其やうな儀にでもござりませう。」

冷やかな藤野の言葉に、遊佐は氣を悪くしたか、

「まこと、其やうな儀ならば、局々を取締る、汝の落度と申すもの。先づ汝から詮議して見ねば叶はぬぞ。」

と、威丈高になる。ところが藤野には手答へがない。

「局々を取締る私の不始末と仰せられまするか、そりや違うて居ります。此藤野には其やうな力はござりませぬ。若菜は臺様が御生家からお連れになりました、御寵愛の女、平生からそれを鼻にかけて居りますれば、此藤野などを、何とも思うて居りませぬ。一にも若菜、二にも若菜、此度の御使者だと、」

と、言つて、急に我と我口を袖で掩ひ、

「御存じのない此方様に申したとて、益ないこと。まあよしに致しませう。」

と、何やら齒に衣着せたやうな言ひ振。遊佐は平生から、此藤野と云ふ老女が齒齦を出しての追従輕薄を快よからず思うてゐるものゝ、斯う云はれては、どうやら其先が聞いて見たい。

「一體其使者のお役目は何ぢや。」

「さあ、何でござりませう。お當てなされて御覽じませ。」

と、狸姫は、すぐと説明せずに、相手をじらさうとする。

「それが分るならば、汝には聞かぬわい。」

と、此方もさるもの、其手には乗らぬ。

「清水の観世音に日参にごさりまする。あの大雪の日は、三七二十一日の満願の日にごさりまする。」

「ふう、して見れば何か御臺所が御心願あつての代参ぢやな。」

「まあ、そのやうにごさりませう。」

「其御心願とは何ぢや。」

「さあそこでごさりまする。何と思召しまするか。」

と、藤野はにやりと笑ふ。此老姫のにやりは甚だ以て氣味が悪い。

「さあそれは。」

と、遊佐もつひ釣込まれる。

「何ぢやな。」

と、遊佐は藤野の顔を覗き込むやうに見る。

「分りませぬかいな。お前さまのやうな利發な方でも。」

と、老姫は翻弄氣味である。

「分るものか。分るほどなら、身共はもつと出世致して居るわ。」

「おほムムム。」

と、柄にもない可愛らしい笑をして、

「そんなら申しませうかいな、御産の祈りでござりまする。」

「何ぢやお産の祈りとな。將軍家の御舍弟義尋僧正が御跡目相續とならせらるゝは、もう内外に知れ渡つたことぢや。御臺が御産などあつては、却つて御家の騒動の基ぢや。それを御臺はお子が欲しいとな。」

「臺様は矢も楯もたまらぬやうに、お産をお願いひでござりまする。しかも男子を持ちたいとの御願ひでござりまする。」

「ふう。」

と、遊位は云つた限、しばしとかうの言葉がない。

やゝあつて、遊佐は小聲になり。

「藤野、それを汝どもはよいと思はつしやるか。」

「さあ如何でござりませう。」

「多分御臺附きの汝どもは、火に添へる薪で、御臺を燃きつけるのであらう。將軍家はそれ御承知か。」

「その邊のところは、よく存じませぬ。藤野はちと感服仕りませぬ。」

「さうあらう。さらばなぜに御臺をお諫め申さぬ。」

「遊佐様にもお似合ひなされませぬ。唯御願ばかりで、観音様がお聞きなされるやらお聞きなされぬやら、それも分らぬに、お諫め申すなどは、そりやあんまり早手廻しでござりまする。」

「と申して、御臺にそのやうな御心根のあるは善うない。」

遊佐は、やゝしばし考へてゐたが、

「それで其若菜とやらの逐電も略分つた。」

其儘すうと離れて、廊下を足早にあなたに去つた。あと見送つた藤野、

「あの遊佐と云ふ人は、どこやら底氣味の悪い人ぢや。味方が敵か、ちと分り難い。」

折から、横合の襖の中から、

「藤野殿、壁に耳ある世の中ぢやぞへ。」

と云ふものがある。

剽 輕 者

「おう誰かと思うたら、浮巢殿でござつたか。」

浮巢と云ふのは、三十にも近い、見たところから滑稽じみた女。

「藤野殿、若菜が満願の日取りを右京大夫様に密告したのは此方であらうがな。お隠しやるな、ちゃん

と、其やうにお顔に書いてあるぞへ。」

「誰も隠しも何も致さぬわい。まこと藤野がしたことぢや。」

「此方は右京大夫様の御家來衆の手から、此大奥に奉公しやつたと聞いてゐる。云はば獅子身中の蟲の

う。」

「何と云はつしやる。」

と、藤野はきつとなつた。答へによらば、掴みかゝらうとするやうな有様。浮巢はぶつと噴き出して、

「何もそのやうな恐い顔せぬでもよいわいな。お年甲斐もな。」

と、冷かに嘲り、

「私ちやとて、あの若菜が年の若いにも似ず、臺様のお氣に入つて、何かと一人でしてくさるは面白う

も思はぬ。大雪の降る日に、行方知れずとなつたのは、氣の毒なやうではあるが、又氣がすうとして、晴々しいやうに思ふ。まあ私は此方さんの味方であらうがな。」

「そんならさうと始めから何故云はつしやらぬ。可惜膽を冷したわ。」

「おほ、口ほどにも悪人ではござりませぬのう。」

「浮巢さんは口が悪い。なんで私が悪人であらう。」

「大した悪人ではないが、まあ悪人の仲間ではござりませう。」

此女にかけては藤野も少からず、持てあつかひ兼ねる。勝手次第なことを言つて、人を冷かしたり、茶化したりするが、元來滑稽であるから、相手はそれほどに感情を害さぬ。しかし藤野は平生快からず思つてゐるから、時々、局々の取締をつとめるを鼻にかけて、威嚇して見るが、此女には、威嚇が一向に手答へがせぬ。

將軍家の大奥に仕へる女どもの數多い中で、藤野は管領細川右京大夫勝元の執事三好からの肝煎であり年も老つてゐるから、羽振りが喜ぶ。殊に局々の總取締と云ふ格であるから、威權赫々のやうであるが、中々之に屈服せぬものが少からずある。中にも若年なれども若菜は御臺所第一の御寵愛であるから、老女藤野も一寸頭の上らぬ場合が中々にある。同じ若い仲間の紅梅も若菜とは最も親しい仲である

から、藤野の云ふことは、一向に利目がない。浮巢は此人達から云ふと別派であつたが、藤野を信用せぬ一人である。けれども底意地の悪い藤野を恐しがつたり、又追従して之に媚び諂らふ連中も、多い侍女の中には少からずあつた。

局々の女であるから、暗闘は常に絶えぬ。藤野は何とかして若菜を退けたいと、常日頃、蛇のやうな眼をして眺めてゐたのである。清水堂の日參が始まると、己れ日頃の仇をかへしくれようと、潜に此由を三好に密告したのである。

將軍家の御弟義尋僧正を御跡目に直さうとする有力なる主張者は管領細川勝元であつた。將軍家は隱居の下心があつたから、之を勝元にほのめかされると、勝元は一もなく二もなく、御跡目は義尋僧正こそ然るべしと啓した。將軍家も固より之に異議はないので、略々之に定まつてゐたのであつた。義尋僧正が還俗して將軍となつたならば、今の大奥は自づと勢力が落ちる。大奥のもどもが、之に慥らず思ふのは無理もない。唯其中で藤野のみは野心があつた。

義尋僧正を擁立するのは、管領細川であるから、自分は其縁故をたより、次の將軍家の大奥に入つて、威權を振つて見たい。彼が若菜を邪魔にし、御臺所昵懇のもどもと容れないのは、一つは斯う云ふ野心があつたからだ。大奥に奉公するものならば、御臺所が御産の祈願に同情せぬ筈はない。藤野が

同情せぬばかりか、寧ろ之を邪魔しようとして、密告したのは、此魂膽があつたからだ。

けれども若菜が途中から其姿を隠したのは、どうも藤野に合點がゆかぬ。合點のゆかぬのみか、ちと薄氣味の悪くないこともない。利發な若菜のことであるから、それを感じて藤野の仕業と、御臺所へ知らさないにも限らぬ。若しさうなると藤野の身の破滅である。若菜が世に在るならば草を分けても其在家を探し出し、御臺所の許に還らぬ前に殺害して、自分の安穩と、出世とを計らねばならぬ。藤野は其初めには若菜はさる館に囚はれてゐると思つて、我事成就と喜んだ。然るに案外にも途中で消え失せたと聞いては流石の古狸も少からず解釋に苦んだ。雪の爲に凍え死ぬか、悪者の爲に勾引されたらばよいが、誰かに救はれて、又此館に戻り來るとならば、一大事である。

のみならず、浮巢と云ふ女、馴輕で、毒口を遠慮會釋もなく叩くものゝ、其割に深い考のあるのではないが、どうやら、此方のことを氣取つてゐるやうにも見える。明けつ放しの女だから、平氣の平座で之を誰にも云はぬものでもない。否、満座の中でも臆面なく云ふに極まつてゐる。こりや困つたことであると、古狸の藤野も少からず面食ふ。

「浮巢殿、あとでゆるりと物語りがしたい。夜に入つたらば妾の局を尋ねてくりやれ、馳走して待つぞへ。」

と、腹に一物あることゝて、愛想よく云ふと、浮巢は、おほゝと高笑ひして、

「藤野殿が、計略を人に告げ口しなどの御馳走でござりまするか。其御馳走ならば、當り前のものでは、いやでござんすぞ。」

「何なりとせうぞへ。」

「あんまり當てにはなりませんまい。切れ離れの喜くもないと噂のある藤野殿のことぢや、まあ御馳走は此次にしてもらひませう。」

「これ／＼そのやうなこと云はずと、今夜是非に越してたもれ。」

「奥の御用の閑がありましたらば。」

と、浮巢は、會釋の眞似して、別れ行く。

「こりや安心がならぬわい。あいつも事に寄つたら。」

と、藤野はじつくり思ひ入れ。

東風の巻

雪解の水

60

「あゝ夢見をしたやうな。」

と、ぼんやりして、腑が抜けたやうに、河原を彼方へぶらり此方へぶらりと、徘徊ふものは擬ふ方もない、阿呆の本衆である。

「此間の夜、上臈の上衣つけて、無理やりに駕籠に乗せられたのは、はゝアあの邊であつたか知らん。それからかうと、どうあつたらうかな。」

と、腕組みしながら果敢ない記憶を辿る。

「おうそれ／＼あの立派な館や。叱られたり笑はれしたが、終には己が嫌ひな酒をば無理にすゝめてうんと馳走を食はせ、褒美の錢も數多くれたが、飲めない酒をつひ飲んだので、うつとり一寢入りした。眼が覺めると、どうぢや驚いたのは、何とも知れぬ薄暗い穴見たやうな中に一人ぼつちや。わつと泣くと、恐しい奴が来て、泣くな、二三日ちつとして居れとぬかしをつた。飯は食はせてくれるので、空腹

はなし、懐をかい探つて見ると、貰うた錢もある。つひ二日三日其穴のやうなところで寢起をしてゐたが、もう善い歸れとぬかしをつて、出て来たが、東西南北がてんと分らないや。己あ地獄へでも来たのか知らんと、心細うて、ぐるりとうしろを振り向いて見ると、何と嬉しいではないか、叡山が見えよる、東山が見えよる。こりや有難いこつちや、やはり京の中に居たのであつたと、やつて来ると、どうやら見覚えのある鴨川堤へ来た。こりや小屋へ歸れるぞと、河原へ下りて見ると、小屋がないや。おうさうや、小屋は焼けてしまつたのや。行くところがない、と思ふと心細いぞ。さあどうしたらよからう。ああ困つたことや。」と、獨語やきながら、今にも泣き出しさうな風情。今日は天氣も善し、東風が吹いて鴨川も雪解の水を増して、瀬にせせらぎの音が高い。

「あゝ斯うなると焼死んでしまつた丹波や若狭が戀しいや。己あ酒買ひにやられてもえい、一人では暮して行けぬわい。」

と、本衆頗る悄然氣味である。「あゝあこに新しい小屋がある。一休みさしてもらはうや。」と、とぼくと迎り着いて、

「今日は。伯父さん、大哥居るかへ。」と、中をのぞく。

「誰だ。」と、内からは大きな聲。

61

「誰と云ふほどのものでもないや。」

「やい本衆ぢやないか。」

「おつと来た。其本衆やが、お前は誰だへ。」

「誰だと。誰でもない、己だ、善く面を見る。」と、起き上つて来て、「此己が分らないか。」

「ひやア、こ、こりや丹波大哥の幽霊や。恐かない。」

「何幽霊でも何でもない。わりや善くも己達をひどい目に逢はせたのう。」

「御免々々。」

「もうちつとで、己達は黒焼になつしまふのだつた。」

「どうしてそれが助かつた。」

「高が小屋の火事だ、酔つてはゐたが夢中になつて飛出して見りや河原だ。一軒限の火事だから、助か
らあ。」

「それでも善く助かつたもんや。死んちまへば善かつたに。」

「此奴何と吐かす。」

「さう怒るない。若狭の野郎はどうした。」

「野郎とは酷いことを云ふ。火傷はしたが、助かつて、無事にゐらあ。そりやさうと、われと逃失せた
上藤はどうした。」

「さあどこへ行つたか、己あ知んねへ。」

「何ちや、わりや欺されたのか、安本丹め。」

「さあ善くは分んねへが、上藤め河原を一目散にあつらへ行き居つた。己あ土手の上で、捉へられて駕
籠にぶち乗せられた。大哥、お前駕籠に乗つたことがあるけへ。いゝ心地や。己あんまり快ゝ心地で、
つひうつとり寝てしまつた。」

「それからどうした。」

「何でもはア立派な館へ連れて行かれて馳走された。お前に食べさせたかつたぜ、褒美も。」

と、云ひかけたが、はつと阿呆ながらも感じた見え、

「貰ふところだつたが、つひ貰はなかつた。」とにやゝ笑ふ。

「其館とはどこだ。」

「さあそれがんと分んねへ。」

「それからどうした。」

「酒食はされて、どこかへ連れて行かれたもんと見えて、目が覺めると、薄暗い穴藏見たやうなところにゐたのや。そこに二三日居ると、もう歸れと、今日出されて來たのや。」

「何だかさつぱり分らないな。本衆、手前の懐は大そう服れてゐるな、そりや何だ。」

「あゝこれか、こりや上臈の上衣や。己が斯う被つて、土手の上を行くと、あゝ此にゐたと捕へられたのや。」

と、懐から、引摺り出して見せると、擬ふ方ない若菜の上衣。本衆は肌身離さず、懐へ忍ばせてゐたものと見える。

「おほん。」

と一つ咳拂ひして、小屋の裏手から戸口に廻つた者がある。

「許せ。」と、すつと入來たのは一人の強さうな侍であつた。

管領の館

「是はくお出でなされませ。」

と、丹波は不安の目を以て迎へる。本衆はあつけらかなと、その側にぼんやり行んでゐる。

「其上臈の上衣を見せよ。」

と、侍は本衆の手にする上衣を、と見かう見て、「むう。」と、一つ軽くうなづき、「こりやまさしく若菜の上衣である。」

「おうさうや。」と、本衆、けたゝましい聲を揚げて、

「若菜々々と、館では申し居つた。」

「何ぢや、其館とは。」

「立派な館や。」

「何處の館であるぞ。」

「とんと分んねーのや。庭には泉水があつた。大きな金網にいろ／＼の鳥が居つた。美しい女がたんとゐて、酌してくれた。伯父さん知んねーかへ。」

「泉水がある、大きな金網にいろ／＼の鳥を飼ふ。そりやまさしく管領細川殿の館であつたな。」と、侍は思はず微笑む。

「おうさうや／＼。馳走してくれた時に、汝のやうな下賤のものが管領様の御館で御酒蔵くなんて果報過ぎると一人の女が云ひくさると、一人の女が其袖を引いて、目顔でそれ云ふなど知らし居つた。あは

は、阿呆め、己ちやんと知つてゐらあ。」

「されば正しく其館は管領殿。こりや善い手がよりが出来たわい。して其若菜と云ふ上臈はどこへ参つた。」

「己に上衣を被せて、己の蓑と笠を被つて、清水様へ参ると云つたまゝ河原をとつと断けて往つた。それから先は己知らん。」

「むう、汝を替玉に致したのぢやな。」

「替玉とは何のこつちや。」

「これく本衆、御武家様に向つて、そのやうな言葉使ひ致すものぢやないぞ、丁寧に申せ。お武家様、こいつは人並外れて足らぬものにござりまする。御無禮の段はお許し下されませ。」と、丹波はそばから心配顔で取成しをする。

「何好いく、面白い。此ものが替玉となつたので、其若菜は勾引を遁れたのぢや。して其若菜と申するものは、如何して此ものとは悪意になつた。」

「そりや斯やうにござりまする。これなるものが酒買ひに参りました歸り途に、土手の下で氣絶して居た其上臈を此小屋まで、伴れて参つたのでござりまする。」

「若菜は氣絶してゐたと申すか。それを此處にて介抱したと申すか。そりや奇特のことぢや。」

「酒の酌を丹波や若狭が無理にさせよつた。」

「これく本衆何をやくたいもないこと申す。」
と、丹波は氣が氣でない

「善いく、それから如何致した。」

本衆に一伍一什を云はれては一大事と、丹波は

「私どもが酒に酔ひしれてる間に上臈はいづくへか逃げ失せましたのにござりまする。」

「あゝさうやない。」と、本衆は打消して、

「上臈はありや何でも、丹波や若狭を酒で酔ひ潰して逃げるつもりであつたに違ひないや。己に伴れて逃げてくんと云ひよつた。」

侍ははつたと丹波を睨みつけ、

「汝どもは、其かよわい上臈を手籠めにでも致さんとしたのであらう。太い奴ぢや。」

「否く、其やうなわけにてはござりませぬ。其やうな悪い考がござりますれば、何で酒で酔ひ潰れませう。」

「はゝゝゝ、其やうな逃口上が何にならう。ぢやが過ぎ去りし事を今更申すことはない。以後を慎み居らう。」

「へゝゝ。」

「それから如何致した。」

「此小屋を逃げ出さうとすると、酔ひ倒れてゐた丹波と若狭とが上臈を捉へようとしたのや。上臈がつき飛ばすと、弱いや、ひつくり返つて、それから火が小屋について小屋が丸焼、面白かつたぜ。」

「そりや小氣味善いことであつたのう。」

「やあこりやいかん、阿呆な本衆め、善ういろゝな事を記憶えて喋舌りくさる。」と、丹波は頭を抱へる。

「さらばこれなる小屋は新しくしつらつた物であるよな。」

「さやうにごさりまする。」と、丹波は恐るゝ云ふ。
「大略は相分つた。これなるものには、褒美をも取らせたい、又聞き糺したいこともあれば、某が我が館まで伴ひ参るであらう。又その丹波とかには某よりちと内密の相談がある。首尾善う事が参れば褒美は自づと手に入るであらう。」

「そりや有難いことにごさりまする。何なりと仰せつけ下されませ。」

「己にも半分分けて下されませ。」

と、ぬつと小屋の外から顔を出したのは若狭。

「ひやあ、若狭兄哥が来居つた。」

と、本衆はじろゝ其顔を見て、ぶつと噴き出し、

「汚い顔が火傷で、一倍と見苦しいや。頭の髪も半分ばかり焦げくさつた。こりや可笑しい。」
「何が可笑しい。阿呆め黙り居らう。」

と、若狭は忌々しげに、ぐつと睨めつける。

「さあ内輪喧嘩はやめに致せ。丹波と其若狭とやら、近う参れ、耳を借せ。」と、侍は何やら囁く、
「はあゝ、其管領様へ。」

「これ聲が高い、内密だぞ。」

「心得ました。命は危うござりませぬか。」

「そりや某がついて居る。安心致せ。」

「そんなら。」

「美事仕れ。」

本衆はつまらなさうな顔つき。

「己にはちつとも聞えぬーや。」

文の便り

花の御所に歸りついた遊佐七郎の弟遊佐八郎の姿を見ると、いそくと廊下の途中に出迎うた老女藤野、

「遊佐殿の弟御お歸りか。若菜の在家は分りましたかのう。」

「大概は心當りがついたに依つて、これから御臺所へまで其旨を申上げんと存するところ。御臺所にもきつい御待兼ねであらう。」

「それはくきついお待兼ねや。先程も遊佐はまだ歸らぬか、今日もまた若菜の安否は分らぬかのうとの仰せでござりました。して若菜はどこに居りました。」

「さあそこまでは分らぬが、さる館で勾引したとまで、確と相分つた。いやもう途方もないことぢや。」

「えゝさる館で勾引したとな。そりやどこでぢや。」

「御臺所へ申上ぐるまでは語ることはたりませぬ。」

「して駕籠昇きのもので居りましたか。若菜が乗つて参つた駕籠は、此御門前に捨て置いてあつたとは聞いたが、駕籠昇きはいづれへ参つたか知れぬとやら。其駕籠昇きの在家でも分りましたか。」

「委細のことは御臺所へ申上げての後ぢや。藤野殿、汝はなぜ其やうに根掘り葉掘りお聞きやる。」

と、遊佐は老女の顔をぢつと見詰める。此方もさるもの、さらぬ顔で、

「若菜が可憐いよつて。」

「あはゝゝゝ、あんまりさうでもござるまい。」

と、遊佐の口のほとりには嘲りの微笑が漂ふ。

「遊佐殿、そりやどうしてぢやぞへ。」

「言はぬが花ぢやらうて。」

と、遊佐は其儘行過ぎようとする。

「遊佐殿、妾にも勾引したところの心當りがある。其方が御調べやつたのと、同じであらうか、それとも。」

「そりや定めしびつたり合ふであらう。お前は善う知つてゝあらう。」

「何と云やる。そりやどうして。」

「お前は利發なお人、四相をさとるお方ぢやほどに、ちやんと承知してゝあらう。」

「おほゝゝ、何で妾が利發であらう、何で四相を悟ることが出来よう。あんまり口から出任せは云はぬものぢやぞへ。そりやさうと、勾引をしたと云ふ館だけ教へて給も。」

「そんならお前だけに内所で語らう。管領細川右京大夫殿の館ぢや。」と、云ひ捨てゝ大奥指して妾は消えた。

「あの遊佐の弟め、たうとう探り出し居つたと見える。こりや一大事が湧いた。ちやつと早う管領様の御手許まで此由お知らせ申さぬば、どのやうなことになるらうも知れぬ。執事の三好殿から頼まれて御臺様の御許に御奉公申すも、此やうな大事をお知らせ申すためである。女は女同志と、若菜の御取調べは管領様の奥方がおやり遊ばす筈であつたが、どうやら其若菜は途中から消え失せたとやら。若菜の安否が分らぬは、何より重畳であるが、管領様の館へ勾引したと云ふことが露顯致さば、奥方の御心痛は固より、管領様にも定めし御難儀であらう。一時も早う書状で御由をば。」

と、藤野は、慌てゝ我が局へと駆け込む。

管領細川右京大夫が困るよりか、管領の妻女が心痛するよりか、老女藤野が慌てるよりか、一層に困

じてゐるのは、遊佐八郎である。明さまに若菜を勾引かさうとしたのは、細川右京大夫であると、御臺所に申上ぐれば、花の御所を一人で背負つて立つ御臺所の遊鱗はどのやうなことを仕出かさうも知れぬ。相手は名にし負ふ威權のある勝元である。威權の争ひから、御臺所と勝元との脱合ひは珍しくもないが此やうなことから破裂したならば、或は天下の大亂とならうも知れぬ。宮中と府中との争ひは、天下萬民の惱みの基である。よしや次第に破裂しようとする傾きがあつたにしろ、出来るだけ彌縫して其傾を減じたい。破裂はいつでも出来る。一刻一刻と延ばして置いたならば、又どのやうな局面の展開があらうも知れぬ。若菜の勾引は、管領の所業としては極めて見事に類してゐるが、將軍家督については管領も並々ならぬ苦心をしてゐる。それについて御臺所が反對の程度をも知りたいとの心から仕出かした業であらう。但し奇怪なるは、老女藤野を大奥に住み込ませて、あることないことを探らせてゐる一條である。大奥を壓倒しようとして勝元の魂膽は、之でも大概想像がつく。あの人一倍利發な御臺所が之を御存じないのは、寧ろ不思議であるが、毒も用ひやうでは薬になる。八郎は一方に此藤野を利用して其裏を掻き、勝元を氣味悪がらせて、大奥の測り知るべからぬを思はせ、一方には御臺所が我儘氣儘の御振舞をも矯めて、此二大勢力の衝突を出来得るだけつとめて避けさせたい、と獨り思案に餘つてゐたのである。

であるから、御臺所にお目通りしても、若菜の勾引についてはあり體に申さず、却つて藤野にはそれと明さまに物語つて、其情を挫いた。細工は流々仕上げを御覽じませと、獨り心に點頭いて、御臺所の前を退べり出ると、

「浮巢殿々々。」と例のはしやいだ侍女を呼ぶ。

「藤野殿は局にゐるか、見て来てたもれ。」

「あい。」と、浮巢は急がしげに藤野の局を音づれたが、間もなく引返して、「藤野殿は局に居られまする。」

「何してござつた。」

「何やら文を書いておいでだつたが、妾の姿を見ると、ちやつとお隠しなされました。あの年でまさか艶書でもござりますまい。」と、浮巢は袖にて口元被ひながら笑ふ。

「何やら知れぬ。年は老つても、どこやらに艶氣がある。話する中にも厭に品を作る。油断はならぬて。」と、どつと笑ふ。

東風は此にもそよ／＼と吹く。けれども老女の書く文は春の便りではなかつた。

僧院の巻

義尋僧正

春は山寺に音づれて、書院の軒端に近き梅は、南枝漸く綻びて、半菰にさす鳥影も長閑かである。

火桶の前に打寛いで主と客とは物語つてゐる。主と云ふは、眉目美しい、上品な、僧衣を纏うた、まだ年若い人。之と對坐するは、四十路を越えた、思慮あり分別ありげな、どこやらに威嚴のある、身装の美しい武士であつた。

「さやうなわけにござりまする。將軍家にも是非にとの仰せ、此は門主も御分別なされて、御出山あらせられませ。」と、武士は促すやうに云ふ。門主と呼ばれた僧は莞爾と笑みて、

「浮世を離れた今の身が結句氣樂でよいわ。將軍家の家督をついで、此やうな亂れた世に苦勞致すは願はしうもない。」

と、斷じて聽き入れぬ風情。

「門主が否と仰せあると、御血筋が絶えると申すもの。御先祖に對しても御不孝でござりまする。此段

は勝元平に御出山を願ひまする。」と云ふ。さては此武士は當時羽振りのよい管領細川右京大夫勝元であつたよな。

「大夫。」と、門主は辭を改め、

「此義尋はまだ不安な思ひがござる。」

と、云つて、勝元の顔をしげくと見た。

「そりや何事にござりまする。」

「兄なる將軍家は、まだお年もさほど老つてはおいでなされず、又御臺は花盛りのお年ぢや、兒の出来ぬと云ふことはない。若しや其兒が出来た曉には、此義尋をどう致す。還俗した義尋は、又此淨土寺に歸ることもならぬ。」

と、義尋僧正は語りながらも不安の眉を擧めた。

「其ことにござりまするか。そりや上意がござりまする。若君御誕生あらば、襦袢の中から出家させ佛の御弟子とする。門主への御家督譲りは決して遠變致すまじいと御詞にござりまする。神佛に誓を致しても、間違ひは致さぬとの、達ての上意にござりまする。」

と、云ふ勝元の辭には底力が籠つてゐた。けれども義尋僧正の額に刻んだ不安の雲は、まだ容易に消え

失せぬ。

「唯今はさう仰せもあらう、誓ひもなされう、弓矢八幡も照覽あれとお言葉もあらう。ぢやがのう、兒が出来た折を考へても見い、そこは人情ぢや、弟より子が可愛い。兄上は其誓ひを果さうとなさるであらうが、あの御臺、私とは血縁もない赤の他人ぢや。子の可愛さに、將軍家に泣きつくは定である。平生より權威があつて、一人で室町御所を掻き廻してござる御臺のこと、何で將軍家の言ひ條を立たさせられうか。大夫、さうは思ひやらぬか。」

理の當然には、勝元も一寸行詰る。御臺所が故障あらうとは勝元も夙に推してゐる。それでそれとなく大奥のことを詮索してゐる。藤野と云ふ老女を隠密に入れ置いて、御臺所の御動作御心中を探らせてゐる。養子一件を將軍家が御臺所にほめかされると、御臺所の反對の熱は急に高まつた。神佛に願掛けても實子を得たいものと、先づ清水觀音に三七日の願、よし／＼さらば其裏を掻かうと、御臺所の代參若菜を満願の日に勾引さうとしたが、其若菜はどこへか雲隠れをした。このやうなわけであるから、勝元も御臺所の反對には手こずつた氣味。けれども一日を猶豫すれば、又どのやうな故障が出ようも知れぬ。機先を制して、御臺所に一泡吹かせてくれうと、將軍家と内談して、否應云はせず、義尋僧正に承諾させようとして、さてこそ今日の訪問となつたのである。

けれども、今明らさまに、御臺所反對の始末を義尋僧正に打明けてしまへば、一も二もなく僧正が頭を掉るは必定である。此は何事も知らぬ顔に済ますに若かすと、敏くも心中に定めて、

「そりや杞人の憂と申すものにござりまする。御臺様ぢやとて、今まで御子があらせられませぬ。もう夙に此ことはあきらめて居られます。よし若が御出来にならうとも、そりやもう覺悟して出家にせうと將軍の仰せには一議もござりませぬ。まして不肖なりとも此勝元、お身について居ります以上、何で門主に御不利なことを致しませう。」

斯う云つて、僧正の顔を仰いだが、僧正は俯向いたまふ、暫し返事がない。やゝあつて、

「許せ。予は厭ぢや。」

「そりや如何してでござりまする。」

「好んで、そのやうな難い處に入らうより、浮世を外に樹下石上に一生を送りたい。」

最後の返事は斯うであつた。此ぞと勝元も非常手段。

「門主。」と、呼びかけた聲は異様に響く。

「御不承とあらば、己むを得ませぬ。但し足利の御家は八代で絶えまするぞ。御先祖に對しての御不孝は御覺悟でござりませうのう。」と、屹となつた。

義尋僧正は思はず眼を腫る。

「大夫、予が不承と申さば、そのやうにならうかのう。」

「仰せまでもござりませぬ。」

「むう。」とばかり行き塞る。

「善い、さらば引受け申さう。」

「えい、お引受けなされますか。」

「餘儀ないことぢや。」

「お家の爲、上下一同のため有難い仕合せにござりまする。」

「予が一身は大夫、汝にしかと頼みまする。」

「そりや勿論のことござりまする。」

「御臺が何と故障を申す時があらうとも。」

「勝元一命にかけて、新將軍家の輔佐を仕りまする。」

「よしなに頼むぞよ。」

「心得ました。」

勝元はやつと重荷を下したと云ふ體たらく、莞爾と笑つて、「いかう骨が折れました。」

法師丸

「こりや法師丸、大夫に茶参らせぬか。」

と義尋僧正は次の間を顧みながら聲をかける。

「あい。」

と、答へしながら、天目を捧げて、そこへ現はれたのは、年の頃十三四ばかりの、目鼻立のそろつた可愛らしい、稚兒であつた。

「よい兒のう。」

と、勝元はしげ／＼と其稚兒を眺めながら、譽めそやす。稚兒は恭々しく辭儀して退り出ようとするを、義尋僧正は、

「待て暫し。」

と、呼び止めて、そこに坐らせる。稚兒は尋常に手をつかへて、門主の沙汰如何にと待ち受けてゐる。

「大夫、汝が云やる通り、まこと善い兒であらうかの。」

「如何にも美しい、利發げな兒にござりまする。」

「予が寵愛致すものちやが、大夫望みとあらば進ぜよう。」

と、義尋僧正は極めて眞面目である。

「はッ、下されまするか。」

「如何にも進ぜよう。」

「引出物にござりまするか。」

「見らるゝ通りの僧院、大夫に進げる引出物はござらぬ。せめては此兒をば、氣に入りたりとあらば引出物の代りと致さう。」

「そりや辱うござりまする。」

とは云つたものゝ、勝元の心にはちと會得し兼ねるところもある。異な引出物とは思ふが、これには何か仔細があらうと、唯口を緘んでゐる。

「大夫、此兒はさる由緒あるものちや。」

「はッ。」

と云ひながら、僧正の後の言葉如何にと待つ。

「こりやのう、赤松の末ぢやわ。」

「は、あ赤松氏の後裔にござりまするか。」

と勝元は思はず愕然と聲を放った。

驚いたも道理。赤松と云ふのは、播州白旗城に居城して、五州の太守、四職の随一であつたが、赤松満祐入道性具並に嫡子彦次郎教康と云へるもの、六代將軍義教に鬱憤を抱き、嘉吉元年六月二十四日、我が邸の庭にある泉水の鴨の子を上覧に入れ奉らんと、御成を申請して、鶴飼と云へる猿樂の最中に、厩より馬を放ち、其騒動に紛れて將軍家を討ち奉り、都を落ちて領國播州に下向し、白旗城に立籠つた。山名右衛門佐持豊討手の命を蒙つて播州に馳せ参じ、白旗城を攻め落して、満祐入道は天運盡きて自殺し、教康は没落した。其功に依りて、持豊は播州を拜領したが、此持豊は其後剃髮して入道宗全と稱した。勝元は其掣である。

將軍義教は不慮の横死を遂げさせられたから、嫡子義勝が將軍職を襲いだが、之は間もなく早世、其弟の義政が家督を相續したのが、今の將軍である。引出物として、勝元の前に出た稚兒は、満祐入道性具の弟伊豫守義雅の孫に當る。祖父義雅は白旗城で兄満祐と一緒に自殺を遂げた。此時九歳になつて

わた義雅の子を京都建仁寺の大昌院天隱和尚深く隠し育て、後に出家させて、之を性存坊勝岳と云ふ稚兒なる法師丸は此勝岳の子である。

山名宗全入道は赤松を滅して播州の領主となつたのであるから、赤松の後とあるものは、見當り次第に之を討ち取つて絶やさうとしてゐる。赤松の遺臣どもは、何がな功名立て、其恩賞として赤松の家を再興し、本領安堵を得たいものだ、日夜様々に苦心をしてゐる。現に赤松の遺臣石見太郎左衛門を初め赤松浪人どもは、吉野の山に分け入つて、南朝の御子孫に近づき奉り、神器を奪ひ取り、法師丸を世に出さうとつとめたのである。山名宗全入道は之を安からず思ひて、密々に、其法師丸を探してゐる。天隱和尚は法師丸の一身を氣遣ひ、義尋僧正に逐一其子細を述べて、庇うて下されと頼む。管領細川勝元は宗全入道と掣身の間柄ではあるが、権力の争ひから其間不和とも聞えて居れば、折もあらば僧正から、勝元に此兒を御托し下されたいと懇願に及んでゐたのである。さてこそ義尋僧正は將軍の家督相續を承諾するとともに、此兒を勝元へ托さうとするのであつた。

手短に僧正から勝元へ此兒の素性を物語り、

「赤松は故普廣院殿（將軍義教）の仇ではあれど、當の敵たる満祐入道は伏罪なし、其子孫も佛門に入れば、罪障は消滅致して居る。名家の後を絶やすも不便。まして此法師丸は見らるゝ通り、美しい上に

利發でもあり、膽力もある。赤松再興のことは汝の力次第でどうともなる。將軍家へ執成して此兒を世に出してくりやれ。」

と、しみくとの話。少年ながらも世にも稀なる美貌に勝元は愛着の念を起すと、舅の宗全入道の鼻明かせて、其威權を挫いてくれようと云ふ野心もむらくと起さる。

「善つく心得ました。これなる兒は某、力の及ぶかぎり面倒見て、赤松再興を取計ひ仕りませう。」

とお受けをする。聞き入る法師丸の喜びは云ふまでもない、義尋僧正も破顔微笑を禁じ得ぬ。

直訴

管領細川右京大夫勝元が淨土寺の義尋僧正に暇乞して玄關に出ようとする、門前が騒しい。

「汚らしい身装の汝どもが何で管領様にお目通り出来よう。とつと、失せ居らう。失せぬとならば、斬つて棄てるぞ。」

と、伴人は聲高に罵る。勝元は悠然として、沓脱に下りて奥に乗つた。

「御免候へ。」

と、つき従つてゐた法師丸は、ちよこくと門前に走り出ると、淨土寺の門を潜り入らうとする乞丐體のもの二人、そを入れまじと立ち塞がつてゐる勝元の伴人十數人。その中に分て背高い伴人の頭と見えるが、きつとなりて、乞丐を睨みつけ、

「汝等はいづくより参つた。又管領様に何の用ばしあつてお目通り致したいと申すか。お目通り致すには、それくの作法がある。又此處は御他出先、お目通り致したいとならば御館へ参れ。」

と、腰刀に手をかけて威丈高になつたが、乞丐どもは一向に恐るゝ氣色もなく、

「御館に参れば、おぬし等が四の五の吐かして、逢はせて下さらぬは知れたこと。御出先と知つたからお目通り願ふのぢや。」

「何ぢやお出先と知つて参申したと云ふか。太い奴ぢや。一體管領様に汝どもが何の用あつてお目通り申さうとするのぢや。まこと己むを得ぬ用ならば、取次申して遣はさう。但し此門に入らうとすれば一歩も中へは許さぬ。それでも達つて入らうと致さば、刀の錆となつて、それから入れ。」

と、嚇して見ても、乞丐は平氣の平左。

「へへへへへ。」

「あはへへへへ。」

と、厭な笑ひ様をして、

「此はお寺でござりまする。お寺もお寺、淨土寺でござりまする。淨土寺は、將軍様の弟御が門跡とならせて居るお寺でござりませぬ。其お寺の御門前を血で汚して、おぬし達は善いと思ひなされますか。管領様の家人にも似合はぬ人ぢや。」

と、一本やりこめる。理の當然に、相手ははたと窮し、

「え、喧しい。これ皆のもの擲つてしまへ。」

「心得ました。」

と、乞丐の中に、多勢はおつ取巻いて打擲しようとする。

「暫く〜。」

と、凜然たる聲が響く。振り向いて見ると、そこに突つ立ちたるは、可愛らしい稚兒姿の美少年、

「御門跡の御門前ではあり、又大夫殿の御歸り先を、何故に其やうに騒ぎをしやる。双方ともに静まり居らう。」

年は若い、聲にも容にも犯し難い所がある。伴人どもはちと呆氣にとられた様子。

「これなる乞丐のものが無禮を申しまするで、叱り居る所にござりまする。」

此少年を何人とも推し得ぬが、定めし門主の御側に侍る由緒ある稚兒であらうと思へば、言ふことも丁寧である。

「それなるものどもは何故あつて無禮を申し、斯くは御門前を騒がし居るぞ。」と、法師丸は乞丐のものに向つて云ふ。

「無禮も何も申しは致しませぬ。ちと内密の儀あつて、直に管領様にお目通り致さんと申すを、これなる人々が主の威光を笠に着て、理不盡にも打擲致さうとするのでござりまする。」と、乞丐は臆面もなく答へる。

「管領殿に拜顔致さうとしやるのか。然らばそれ〜物の順序を追うて、然るべく取次頼むが、法ぢや。」

「内密の儀にござればそれは叶ひませぬ。」

「内密の儀に致せ、一通り筋道を踏まねばならぬわ。汝共の名は何と申す。」

「はあ。」と答へながら、乞丐は互に顔と顔とを見合はせる。

「丹波と若狭と申します。」

「何ぢや、そりや汝どもの生國であらうがな。」と、伴人頭は嘴を挟む。

「生國が私どもの名ぢや。」

「あはゝゝゝゝ。」と、伴人一同はどつと笑ふ。

「名もなきものぢやな。」と、法師丸は微笑みながら、
「住居はいづくぢや。」

「河原でござりまする。」

「こりや河原の乞巧ぢや。」と、皆々は又手を拍て笑ひ囃す。

「えゝ喧ましい、笑はつしやるな。河原のもでも管領様でも同じ人間ぢや。同じ人間が同じ人間に逢はうとするのぢや。しかも其内密の用は、此方とらの用ではない、管領様のお身の上についての大事な御用ぢや。」

法師丸は聞き畢つて、

「よい、さらば私が取次いで遣はさう。」
と、其儘するくんと踵を旋らさうとする。後ろに聲あり、

「法師丸。年に似合ぬ利發な應對振、勝元感服を致した。其乞巧のものどもには予が直々に逢うて遣はさう。」と勝元は、奥の戸を開いて、悠然として現はれる。

「近う、汝どもが予に内密の用ありと申すは何ぢや。語れ、聞かう。」

文使の巻

雨後の月

威權飛ぶ鳥も落ちんする管領細川右京大夫勝元に乞巧風情が内密の儀を申上ぐると云ふのであるから
伴人一同は目を腫つて、これは如何にと云ふ様である。

「其内密の儀とは何ぢや。」

「これにござりまする。」

と、乞巧の一人が手にした包の中から取り出したのは、目も鮮やかな上臈の上衣。

「そりや何ぢや。」と、訝がる勝元よりも、驚いたのは、伴人頭。

「やあそりや若菜上臈の。」

「黙れ喜内、靜に。」と、勝元は制して、

「これなる女の上衣を何と致す。」

「管領様には親しく御覽にもなりますまいが、奥方は善う御存じの筈。何か御用もあらうかと存じて持

參致してござりまする。ぢやがお入用ないとならば、之から直に此足で花の御所へ持參仕り、御臺様に
差上げまするでござりませう。」

と、乞巧二人はさましたり顔。

これは驚いたことどもかな。天下の管領職細川右京大夫とも云はれる威權赫々たる出頭人を乞巧風情
が強請らうとするのである。細川の館で此やうなこと云つたところが取上げられぬは必定、無禮者奴が
と斬つて棄てられてしまふは受合ひであるが、出先ではあり、殊に淨土寺の門前で、此脅嚇に出逢つた
のだから、流石の勝元も思案にくれる。中にも腰打ち抜かさんばかりに驚いたのは伴人頭の喜内、彼は
若菜勾引の大先達であつたのである。

「其上衣を予に如何致せと申すのぢや。」

「御入用の品と存じ、持參致したのでござりますれば、價善う買うて下されませ。私ども兩人は河原
のもの一同の名代に此まで參上仕りました。一同のものは、様子如何にと、此あたりに隠れて居りま
する。若し御返事御廻引とあらば、一同はすらりと參るでござりませう。」

乞巧二人にさへ持てあぐんでゐるものを、大勢、汚ろしい、醜い、不具者や病人に出られてたまるも
のか。勝元はほとくあしらひ兼ねてゐる。やゝあつて、

「善い、買うて遣さう。ちやが價は何程ちや。固より予に入用のない品なれば高うては買はねぞ。入用ではないが、汝達を不便のものと存じ、買うて遣すのちや。構へて誤り取るな。」

と、恩を被せようとするのに、乞巧どもは承知せず。
「管領様が御不用とあらば、花の御所へ持参仕るまでのこと。御所では草を分けて尋ねてござる品でござりまする。善う買うて下されませう。殊に老女藤野殿が口添へで價はたんと出してくれるでござりませう。」

花の御所で草を分けて尋ねる品と云ふばかりか、殊に老女藤野の名を出すに至つては、勝元も思はずやと驚きの聲を揚げようとした。

「さらば一貫文に買うて遣はさう。」

「管領様、そりやお安うござりませうぜ。」

「え、足元をつけ込み居るな。さらば今五百文遣はさう。」

「管領様ともあらうお方がいたう小くお刻みなされます。大まけにまけて二貫文下されませ。」

「いたう高いが餘儀ない。されど出先きのことちや、其價は館にて遣はさう。」

「お館へ参りますれば、錢の代りに刀でござりませう。御許し下されませ。花の御所へ参りませう。」

と乞巧は中々以て勝元の手に乗らぬ。

「ちやと申して出先きで鳥目の持ち合せはない。」

「さらば其代りのものを下されませ。」

「其やうなものは持たぬ。」

「丹波、どうちや、管領様では取引きが難さうな。こりや一層一同と花の御所へ参らうか。」と、一人が一人を願みる。

「おうそれが善からう。あつたら時を空に過した。管領様御免下されませ。」と、乞巧は一つひよつくり首を下げるとともに、さつさと歸らうとする。

先程より乞巧の擬勢が強いので、十餘人の伴人、一言半句も出ず、手を束ねて傍觀と云ふ體たらく。今歸らうとしても引留めて善いか悪いかさへに分らぬ。喜内の如きは冷汗かいて、あとべに小さくなつてゐる。天下の管領職もどうしたものか絶體絶命の體たらく。

そこへ走り出でたる法師丸、

「乞巧待て。」と、鷹揚の一言。

「其二貫文は、門主様から取らせる。上臈の上衣は伴人頭の手にしかと渡せ。」

二貫文を地に投げつけて、
 「構へて此あたりを徘徊致すな。佛地ではあるが、どのやうな目に逢ふも知れぬぞ。」と、凛然たる聲。
 「あい、辱けなうござりまする。」
 と、二貫文を拾ふなり、先きの勢はどこへやら、跡ふり向きふり向き、一目散に何處ともなく逃げ失せる。

「これは門主にいかい御世話を相かけましたのう。」
 と、勝元は苦り切つて式代する。

「何のこれしきのことが。ちとばかりの鳥目が御役に立ちて、重疊との仰せにござりまする。」
 飛んでもないところへ、意外の奴が飛び出して、流石の智者も智恵が行き詰つて、管領職は大の味増をつける。法師丸は小粒であつたが、大男の喜内などの遠く及ぶところではない。奥の中の勝元も深い思案に暮れてはゐるが、法師丸のきびくした應對を考へると、不快の雲が破れて、雨後の月の鮮やかな心地がした。

遊 び 賃

管領細川勝元が淨土寺の義尋僧正を説得して、將軍家の家督相續を承諾させて歸館すると殆ど同時に
 頃合である。

花の御所の大奥では、老女藤野が管領の執事宛に、さら／＼と書を認め畢りて、あたりを見廻し、
 「まアこれでよいが、さて使の者は誰にせう。東次に致さうか。彼奴は慾が深うて、胡蠅うてならぬ、それとも平太か、どうやら彼奴めは變な目つきを致し、薄氣味悪う笑ひくさる。殊によらば、内密のこ

とを知つてゐやうも知れぬ。やはり東次に頼まう。」
 と、起ち上つて、お次のものから東次を呼ばせて、管領の館へこれ持て行けと命じた。

東次が局から表の間へ來かゝる出合頭に、ひよつくり逢つたのは、浮巢。

「これ東次、どこまで行きやる。」

「ちよつくらそこまで。」

「隠しやんすな、藤野殿の御使であらう。そんなら妾も頼みがある。一寸局まで寄つてたもれ。」

「いや滅相な、そのやうな悠長なことはなりません。藤野様が火急の御用ぢや、早う往け、駄賃はたんとやらうと仰せられましたから、お前様の御用は又歸つてから。」

と、東次は、一つ叩頭して去らうとする。

「はてさて氣急しい。妾も駄賃をたんと上げようほどに一寸寄つてくりやれ。」と、云はれると、そこは
慾深の東次のこと、首を一つひねつて一考へ考へて、

「早うして下さらば、頼まれないものでもござりませぬ。」
「早うするほどに、さあ局まで。」と、先に立つ。

遊佐八郎は藤野の使者を東次と知つて、何とかすかして使命を果たさせまいと、手ぐすね引いて表の
方に待つて居たが、東次は一向出て来るやうすもない。

「はて面妖な。さては謀られたか。」と、氣が氣でない。

浮巢は、藤野を管領よりの廻し者とは臆に悟つてゐる。であるから、此奴怪しい老女と、常日頃其
舉動に注意して、折々は鎌をかけて其本音を吐かさうとするが、そこは古狸藤野のことであるから、さ
ううつかりと十分に本音を吐かぬ。場合に依つては浮巢の氣を引いて見て、味方にせうとの考へもある
が、もう少し探りを入れての後と、中々に油断して居らぬ。浮巢の方では何とかして、藤野の秘密を探
らうと千々に心を砕く。あとで馳走をせうとの招待には應ぜず、局で藤野が書を認めて居り、その使に
は東次が選ばれたのであるから、此處で秘密の鍵を握つてやらうと、用もないに東次を己が局へと引き
入れたのである。

「藤野殿の御用とは、どこへ往きやるのぢや。」

「え、それはおうそれ／＼上立賣の、藤野様の伯女御のお宅まで参ります。」

此返答は浮巢に取つて案外である。けれどもふつと思ひ返し、こいつ東次め、偽をつきくさるのであ
らう、一つ脅してくれよう。

「ふ、偽云ひやるな、妾はちゃんと知つてをるぞへ。汝は知るまいが、其やうな使をしたことが、露
顯致さば、汝の首が飛ぶぞへ。」

「えツ、そりや何故でござりまする。」

「汝が行きやる處を何處と思ひやる。」

「へエ。」

「へエではない、汝は其使を何と心得やる。」

と、浮巢は柄にもなく大見得を張る。

「管領細川様の館へ参るものでござりまする。」

と、東次は恐縮する。浮巢は思つた通りと心で點頭いた。怪しの生體はもう分明と、

「御臺様と管領殿との御仲が善うないことは汝も知らう。大奥から其處へ使をすりや一大事と知りや

らぬか。汝も白痴のう。」と、一喝して、

「其使致すとならば、汝は覺悟致せ。」

藤野と浮巢とを比べると、藤野の方が上役、其上役の用を果たさうとするのを、浮巢がとやかく云ふべきではない。浮巢殿が妨げ致すと藤野に訴へれば、浮巢はどのやうな目に逢はうも知れぬが、成ほど聞いて見ると、大奥の女中から管領の館へ内密の使はちと變である。其使者を東次つとめたりとならば、或は浮巢の云ふやうに東次の首が飛ばうも知れず、と東次は少からず怖氣がつく。

「浮巢様、どう致しませうのう。こりや困つたことが出来た。」

「使をせぬばかりぢや。」

「藤野様に逢はせる顔がござりませぬ。」と、東次は頭を掻く。

「善いわ、斯うして置かう。其手紙を此へ置きや。妾が善いやうに返事を書かう程に汝は日の暮まで何方へなりと遊んで参れ。歸つたら、ちやつと妾が局に参つて、偽の返事を藤野殿に届けるがよいぞや。まあ日の暮れまで遊び賃遣はさう。」と、永樂錢一緡をそこへ投げ出す。

「これはく／＼辱うござりまする。さらば遊んで参りませう、どうかよろしうお頼み致しまする。東次の首が飛ばぬやう、浮巢様願ひまするぞ。」と、東次はびよこ／＼頭を下げて、人目を忍び、表の方へと

走り出た。

士 一 投

待ちあぐんでゐた遊佐八郎は、小門から走り出る東次の姿を見るより、それやつてはと、起ち上り、宙を飛んで其あとを追ふ。

斯くとも知らぬ東次は、春風に袂を吹かせながら、東の方へぶらり／＼と行く。今日は使にあらぬ身の、甚だ長閑である。

「こりやよい、全くよい。いつも斯うなうてはならぬ。今日の東次はいつもの東次ではないぞ。」

と、獨語きながら、物珍らしさうに右左を見廻して、悠々自得の趣がある。姑くあとべについて行先をつきとめようと、見えつ隠れつして行く遊佐八郎は甚だ手持無沙汰である。

「何ちやこりや怪體な。使に行くものがあれあのやうな歩行振を致すことがあらうか。まるで物見遊山にでも参るやうな。して見ると彼奴使ではないか知ら。一つ追ひついて尋ねて見よう。」

と、足早に其うしろに近づいて、東次の獨語くのを聞くと、同時に思はず落膽する。

「なるほどこりや使ではないぞ。これ／＼東次、どうしていつも斯うなうてはならぬぞへ。汝アこれか

らいづくへ参る。」

東次は叱驚して、

「おう、これは遊佐様、どちらへお出かけなされます。」

「身共よりか汝は何處へ参る。」

「へムムム、今日は春らしうござれば、東次めはこれより東山のあたりへ遊山に参らうと存するのでござりまする。」

これは又案外な返事かなと、遊佐は少からず面喰ひ、

「そりや氣樂千萬なことぢや。身共は汝がいくへか使にでも参るかと存じ居つた。」

「へムムム、今日は其様な阿呆けたことは、任りませぬ。」

と、東次は大得意である。藤野が東次を内密に其局に呼んだことは、遊佐、目敏く見てゐるから、これには何か仔細なくては叶はぬ、とにかく東次を道連れに致して、ゆる／＼聞き糺すであらう、とやうくに思ひ返り、

「東次、汝は先程藤野殿の局に参つたのう。」

「はッ、それ御承知でござりまするか。」

と、東次の顔色には、ちと不安の雲がかゝる。

「よう存じて居る。どのやうな用があつたぞ。」

「實は斯う云ふわけでござりまする。今日使に参れとのこととござりましたが、東次めは、遊山の約束がござりますれば、ふツと断り申したのでござりまする。」

「何、断つたと申すか。まこと遊山の約束あつてか。どうやらちと不審のう。」

「へムムム、其約束は偽にてござりまする。まことは、藤野様の使が嫌でござりまする。」

「そりやどうしてぢや。」

「まかり間違ひますると、東次の首が飛びまする。」

「ふう。」

と遊佐は驚いた。老女藤野が管領よりの忍びのものであるとは、此遊佐一人より知るものなしと思ひきや、小身者の雑色風情までが知り居らうとは、まことに意外千萬である。して見ると、自分が骨折つて大奥と管領との衝突を避けようとするのは、無益の業であつたるか、と思はず吐息を漏らす。やゝあつて、

「汝が断つて、藤野殿は承知致したか。」

「承知も不承知もござりませぬ。怒つて見たところが相手にはなりませぬ。」
と、東次、いゝ加減な出鱈目を吐く。

「然らば汝の外に誰ぞ使に参つたか。」

「さあ其邊のことは確と存じませぬ。長居は恐れと退かり出ましたのでござりまする。」

斯うなつてくると、遊佐は、狐にでもつまゝれたやうで、馬鹿らしくもあり、不安でもあり、五里霧中に彷徨ふやうで、判断に迷はざるを得ない。さるにても斯かる微祿の東次輩が、如何して藤野の曲事を悟つてゐるのであらう。それ糺してやらうと、思案に思案をつゞけてゐるうちに、いつしか、鴨川端へ出た。

「旦那様、お蔭さまで首尾善うつとめました。」

橋の袂から走り出た乞丐が遊佐と見て、近寄つた。驚いたのは東次、

「えゝ汚い、やあこりや恐しい顔してゐる乞丐ぢや。遊佐様、お前様は此やうな乞丐と御懇意か。」

遊佐は乞丐を見ると、若狭である。

「おう如何致した。」

「あの上衣が二貫文になりました。有難うござりまする。」

「細川殿に直訴致したるか。」

「直訴も直訴、旨く直訴を致しました。」

「そりや手柄ぢや。いづくで直訴致した。」

「浄土寺の門前でござりまする。管領様が寺をお出なされましますところで、首尾善う直訴致しました。」

管領様は二貫文出すのがいやさうでござりましたが、御門主様とやらの御稚兒が下されました。」

「何と、管領殿が浄土寺へ参られたとな、まさしくそりや門主を將軍家の御家督に御すゝめ申したのであらう。御臺様に對してこりや一大事が起つたのう。」

と遊佐は思はず、天を仰いで悵然とした。

所へ汗馬に鞭かれて、あとより飛ぶが如くに駈け來るものがある。

「遊佐殿、それにござりまするか。」

と、びたりと馬を止め、ひらりと下りて、

「將軍様より火急のお召にござりまする。」

「何御用が出来致したるとな。」

「東寺に土一揆が立籠つたげにござりまする。大和にある畠山右衛門佐義就殿の殘黨もどうやら之と氣

脈を通じて洛中洛外を騒がせんと風説にござりまする。御臺様御召使若菜とやらいふ女も其手に囚れて居るげにござりまする。討手の大將分には遊佐殿兄弟をとの御沙汰にござりまする。御所へ早う御出仕なされませ。」

降つて湧いたる、火急の御沙汰。取別け耳寄りなは若菜の在處。思案も手段も選ぶ違はない。

合戦の巻

東寺の塔

遊佐七郎と同苗八郎とは兄弟であるが、將軍家の跡目相續については、意見を異にしてゐる。七郎は管領細川右京大夫勝元が義尋僧正をば世繼ぎとせうとするに、至極同感であつた。八郎は御臺所の胸中を察して、今後五年十年を待つて御臺所の妊娠ない曉に、初めてお世繼ぎを定めるのが至當であると信じてゐた。のみならず八郎と若菜とは、相思の間柄であつた。表と裏のことであるから、度々心の中を打明けて語らふまでにはならなかつたものゝ、互に憎からず思ひなしてゐる。主思ひの若菜と御臺所方の八郎とが自づと人知れぬ戀中に陥つたのも強ち無理ではない。其戀しと思ふ若菜が行方不明となつたのには、八郎身も世もあらぬ心地がして、人一倍も二倍も其搜索に苦勞をしてゐる。河原の乞食を語らつて細川管領の面皮を缺かさせたのも、若菜の復讐が少からず手傳つてゐる。藤野の化の皮を剥がうとするのも、若菜に對する義理が混つてゐる。東寺に楯籠つた土一揆の中に若菜が囚はれてゐると云ふ報道は、八郎の勇氣を五層倍にも十層倍にも増し加へた。情の炎は更に薪を添へて、驀直に花の御所

指して立歸ることゝなつた。

けれども若菜が果してまこと土一揆の中に囚はれてゐるであらうか。此報道は誰が齎らし來たのであるか。考へて見ると疑ふべき餘地は少からずある。けれども八郎は前後の分別もない。若菜の消息を得たので、唯喜悅限りなはい。管領細川右京大夫に好意を持つてゐるので、常日頃此點に關しては、快くない兄七郎と諸共に、土一揆の征伐に向ふことは、やゝ物足らぬ感じもするが、今では、とかう云ふべき場合ではない。血氣に逸る八郎は、若菜助けたしとの一念より、小躍りしながら、それ鑑よ、曹よ太刀よ、弓矢よ、馬よ、と勇みに勇んでゐる。

兄七郎が住居せる館の門前へひらりと馬を乗りつけた弟八郎、

「兄者人、御用意はよいか。」

「おう、夙うから、汝を待ち居つた」と、玄關の式臺に立ち現はれた兄七郎、勇ましい八郎の騎馬姿を見て、

「土一揆とは云へ、畠山右衛門佐殿の加勢があるとか申す。ちと手剛うあらうのう。」

「何の。」と、八郎は無雜作に打消して、

「高の知れた愚民の集り、一蹴りに蹴散らかしてくれませう。」と、馬の鞍壺を叩きながら、言ふ聲音も

凜々しう。

「勇ましう。ぢやが敵をあまりに輕う見て、不覺を取るな。」

「兄者人、御臺の侍女若菜が土一揆の中に囚はれて居ると申すは、まことでござりまするか。」

「何のそのやうなことがあらう。考へても見い、土一揆が御臺の侍女を何とするぞ。」と、七郎はてんで相手にしない。八郎はこりやかう云ふ筈ではなかつたが、と其目算はがらりと外れる。

「確な報道と申しますぞ。」

「はゝゝゝ、よしや其侍女が土一揆の中に囚はれてゐたとて我等が知つたことではない。其若菜とやらは、御臺の益にも立たぬ願事を、清水に祈誓せうとて、罷り越したる其途中から逐電致したと申すのではないか。神や佛は非禮を受け給はぬ道理ぢや。若菜の雲隠れは觀世音が御臺を戒め給うての御所業でがなあらう。」

と、七郎は膠もなく云ひ放つ。管領細川勝元から將軍家へ御跡目に義尊僧正を推薦申したのを、適任と考へてゐる七郎のことであるから、御臺所の祈願などは、怪しからぬ御所業と心得てゐる。御臺所方で、若菜の身の上を案じてゐる八郎は此言葉を聞くと、むつとした。

「兄者人、そりやあんまりぢや。御臺の御心中をもお察し申さではかなはぬぞや。」

「餘りさうお察し申すなよ。天下大亂の基となるとは知らぬか。」と、七郎は木で鼻くづつたやうな挨拶をする。八郎は愈々腹を据ゑ兼ねて、

「管領があまり差出がましいことを致さば、それこそ天下大亂の基でござりませうぞ。」

「いやさうではない。そりや汝が若年で善う事を知らぬからぢや。また云うて聞かさう。今は合戦の場に参る途すがらぢや。とかうの論はやくたいもない。」と、七郎は率き寄せられた馬にひらりと跨がる。八郎も返す言葉はない。満々たる不平の氣と、若菜に對する懸念とを同じ鞍に乗せて、東山三十六峯よりそよ／＼と吹き來る春風に旗指物を靡かせながら兄弟思を異にして、馬蹄軽く、幾百の手勢を引具し、東寺を指して急いだ。

行く手の南の大空に寂然として高く立つてゐるのは、東寺の古塔である。弘法大師が眞言秘密の靈場も、今や修羅道の惡鬼羅刹を集め、劍の光は霜を帯んで、鎧の袖には秋雨凄々の響を傳へた。此にはまだ東風も吹かぬと見える。

一千貫文の代

土一揆の討手に遊佐兄弟を向はせたのは、御臺所の思召であつた。若菜が土一揆のうちに囚はれてゐ

ると言ふのは、まさしく注進があつたからである。其の實事か虚事かは、深く聞き糺す暇がない。御臺所は之を人里離れた谷間で足音を聞いたやうにお思ひなされた。そこで將軍家の御内人をとのことで、遊佐兄弟が早急のうちに選み出されたのである。

汗馬に鞭くれて、馳せ寄せたる遊佐兄弟は、遠矢にて散々に東寺を目蒐けて射つた。土一揆は靜まり返つて應戦せうともせぬ。

「こりや唯事ではない。定めし伏勢でもあらう。」と、七郎は先づ猶豫らつた。

「何の高が知れたる土一揆め、何で伏勢など致さう。伏勢あらば蹴散らして通らんばかり。」と、八郎は馬の鎧を一蹴り蹴つて、驀直に東寺の門近く、唯一騎駈けつける。主に事あらせては一大事である。従ふ面々は我れ後れじと其後を追ふ。

東寺の門をさつと開いて、其中より躍り出でたる一騎がある。それ討取れと、八郎の從士はひしめき合ふを、手もて制して、

「如何に寄手の大將に物申さう。」と云ふ。

八郎はきつとそちらに打向ひて、

「何と申す。」

「某どもは手荒いことを致すものにはござらぬ。某どもの申すところを、將軍家にて御聞き届け下さるとならば、事なう退散致すものでござる。」

「さらば尋常に願ひ出たらばよいではないか、何が故に兇器を執つて旗擧げ致したるぞ。」

「手緩いことにてはお聞き入れあるまいと存じ、心ならずも旗擧げ仕りました。」

「して願の趣とは何事ぢや。」

「河内和泉攝津の難儀なものどもに施米致したうござりますれば、一千貫下し置かるやう願ひまする。」

「何と申す。」と、八郎はやゝ呆氣に取られた様子、

「汝達は野武士強盗追剥押込のたぐひであらう。いやもう呆れ果て、物も言はれぬ。河内の畠山の殘黨と聞いたが、それほどの由緒あるものではない。汝達を相手に致すは弓矢の汚れ、刀の手前も恥づかしい。一千貫下し置かれたいなど、勝手の熱吹いたとて、誰がまこととして聞き入れるものがあらうぞ。直に退散致さばよし、さもなれば目に物見せてくれるぞ。」と、大音聲にて言ひ罵る。

敵騎はそれ聞いて、せゝら笑ひ、

「そのやうにえらさうなことをお言ひ召さるな。此方でも無價で其一千貫文を下し置かれたいとは申さぬ。一千貫下し置かれたらば、其代に差上ぐるものがござる。但し其代が御不用とあらば、此方で勝手

にどうとも致さう。」と、冷かに八郎の顔を見た。

八郎の胸ははつとばかりに躍る。さては若菜を陣中に隠まひ居ること虚言でない。一千貫文の代とは若菜の身に違ひない。一揆は若菜を餌に一千貫文を強請り取らうとするのであらう。であるが、今一つ試して見ようと、我と我を制して、

「何ぢや、一千貫文の代があるとな。其代とは何ぢや。盗人野武士が強請の代物なら、どうせ祿なものではあるまい。證文か、それとも。」

「いや其やうな口聞かぬものではござらぬ。目もあり口もあり、鼻もある立派な人間、しかも美しい女子でござる。」

あゝまことに若菜であつた。若菜の在處が知れたは嬉しいが、一千貫文の代價として敵の陣中にある以上、之を取戻すことは容易でない。但し敵も之を餌にするのであるから、其生命に危害を加へることはよもあるまい。しかし將軍家が若菜の身を一千貫でお買ひなさらうとは思はれぬ。よし御臺所がそれを可憐いものよと、思召したにしろ、將軍家が野武士風情に強請られたとあつては、義理にも其代價の出される筈がない。又此事が管領細川の耳に入つたなら最後、どのやうな手段で、若菜の生命を絶つて、口を掩ふやうに計られぬ。嗚嗚の際ではあつたが、八郎の胸の中には、様々の不安な思ひが往來

して、疾みには返へることを得せぬ。

「返答は如何でござるのう。」

と、敵騎はさもしたり顔。八郎は、
「むう。」とばかり行き塞つて、言句も出なす。

阿修羅王

困じ果てた八郎の背後から、

「これ弟如何致した。」との聲がかゝつた。さては七郎であるよな。

「兄上、敵が理不盡の申出を致しまする。」

「何ちやと申す。」

「一千貫文を上より申し請けたいとの儀にござりまする。」

「何ちや、やくたいもない。其やうな申條に耳假すものがあらうか。早う蹴散らして通るばかり、何で躊躇ひ致す。」

「其一千貫文の代償がありと申しまする。」

「代償とは何ちや。」

「女子と申しまする。」

「こりや怪態な。どのやうな女子ちや。」

「あの身を隠した若菜のやうにござりまする。」

「うふふふ。」と、七郎は嘲るやうに笑つて、

「其やうな噂もあつたが、さては正しくあの女子が囚れてゐるものと見える。何の唯の一人の女子ちや。しかも其の女子は御臺の非望を助けようと致した女子ちや。棄て置け。其のやうなたわけた申條には耳假すに及ばぬ、早う馬を乗り入れて、敵勢を皆殺に致せや。」と、言ふ聲音は凛として、四方に響いた。

「ちやと言つて、其女子を見殺しに致すは、ちと不便のう。」

と、八郎はまだ猶豫ふ。

「何の不便があらう。まつた代償に致さうとの所存ならば、何で其女子を殺すことがあらう。」と、七郎は振り返りさま 魔振うて、

「かゝれや、ものども。」と、烈しく下知する。矢は大空にうなりを生じ、敵の陣營目蒐けて、散々に射

かける。つゞいて乗り出す騎馬武者は、蕪直に砂煙を立て、颯とばかりに打かゝる。

東寺の門はびたりと閉ぢて、櫓の上からは降り注ぐやうに矢が飛び来る。寄手は之を物ともせず東寺の門前に旋風を起して、唯一打の下に門を破らうと競ひかゝつた。

敵勢は暫し鳴を静めてゐたが、千本通りの方に黒煙がすさまじく立ち上ると見る間に、火の手が半天を焦した。風につれて、渦巻く煙は東寺を包まうとする。其黒煙の間から疾風の如く立ち現はれた鐵騎は、馬の蹄に大地を踏み轟して、寄手の軍勢の横合から、面もふらず、斬つて入つた。

「さては敵に伏勢あつたるよな。」

と、七郎と八郎とは互に顔見合せたが、敵勢に取囲まれて見苦しい敗北しては、且つは將軍家の威望を軽くし、且つは一身一家の名折れとなるべきと、馬の首を立直し、八郎は、太刀を眞つ向に振りかざして、阿修羅王の如く敵勢の眞中へ割つて入つた。

伏勢出でたりと見るより、東寺の門を颯と開いて、五十騎百騎と繰り出して、七郎討たんとひしめきかゝつた。七郎は些とも疑議せず、水車の如く長刀を縦横無盡に振り廻して、近よる勢を水もたまらず斬つて落す。けれども兩軍次第々々に入り亂れて、七郎と八郎との間隔は遙か遠くに隔たつた。

其うちに日は暮れかゝつたが、空には、炎上の焰がまだ赤く映えてゐる。大童になつて、敵の數騎を

斬つて落した八郎は、馬さへに射られ、歩行となつて、伏勢を追ひ退けたが、疲れに疲れて、暫し築地の蔭に憩うてゐた。

「兄上は如何なされたであらう。おうあれに見ゆるは、敵の一騎。」と、八郎は走り寄りざま、腰のあたりを丁と斬れば、馬上の主はたまらず眞つ逆さまに落馬する。ひらりと躍り上つて馬の鐙を蹴り、兄の行方は何處とそこかしこを走せ廻つた。

味方の軍勢とかけ離れて、八郎は唯一人となつたのである。遙か彼方に當りて、太刀打つ音、矢叫びの聲が聞えてゐたが、日のとつぷりと暮れ行く儘に、それも次第に聞えずなつた。味方の勝敗は如何に、それさへも更に分らぬ。するとそこへ三々五々隊伍を亂して東寺の方へ行くのは敵勢であらう。八郎はきつと思案して、

「若菜が敵の陣營にありとすれば、紛れ入つて、其消息を取糺してくれよう。あは善くば救ひ出して連れて歸らう。虎穴に入らずんば虎兒は得られぬ道理ぢや。おうさうぢや。」と、早くも心に定め、鐙につけたる印を取つてかなぐり棄て、敵騎の跡を慕うて、大膽にも敵の陣營に乗り込まんとした。

敵は散々に戦つたものと見えて、いづれも疲れ切つた様子である。しかも勝利の退軍ではなくて、敗軍の體たらくである。けれども味方の追ひ迫るものないのを見ると、日の暮れるとともに、七郎以下も

戰場を引き拂つたことと思はれる。八郎も疲れ切つた様で、敵騎のうしろに従つて行く。東寺の陣營は引きついでいて軍兵の戰場から歸つて來るので上を下へと混雜してゐる。鎧の袖は引きちぎれて、血潮の朱に染まつて、それ湯よ水よ糧よと云ふ聲が引き切れなしに聞える。「夜討もあらうほどに、門々の用心怠るな。」

と、呼ばはるものがある。

八郎は大童になつて、半面を薄汚く泥と血とで塗つてゐたから、誰とも、それと知るよしが無い。陣中の混雜に紛れて若菜の在所を探らうと、右へ左へ、本堂へ庫裡へと、忍び忍んで伺つてゐたが、若菜の居るやうなところは一向に皆目分らぬ。氣も急ぐ、心も忙しない。誰かにそれと尋ねて見ようかとも思つたが、若しや此身を怪しまれたならば、それこそ一身の破滅。まよよ、暫く様子を窺つて、敵人の口から其消息を聞かうと、猶もあちこちと隈なく尋ねてゐる。

「まんまと強請り損ねた。」と、大きな聲が耳の近くに聞えた。愕然として振り返つて見ると、幔幕の中に人の氣配がする。どうやら此土一揆の大將分らしい。

「さればさ、一先づ河内へ退陣を致さうか。」と、之と應對するものがある。

「都近くぢや。將軍の威勢は衰へたと申せ、山名細川などは手勢も多い。うつかつり引く路を喰ひ

止められても致いたらば一大事でござる。」

「化物も善い潮時に消えて失せねば、飛でもない耻掻申すわ。」

「夥多の財貨をも掠め取つた上は、退散も苦しくない。河内の嶽山城に參つて、又暫し畠山殿の手に附かうかのう。」

「嶽山だの、金胎寺だのは、我等に取りてよい隠家であるわ。」

「嶽山に參らば、畠山殿が善う待遇なすは定ぢや。殊にそれ清水で引捕らへた御臺の侍女のう。」

「おう今度強請の種に使うたあの女子。」

立聞きしてゐた八郎は、我にもあらずぎよつとして、其儘そこに石像の如く立ちすくむ。聞き漏らさじと、耳を引き立てゐるとは知らず、

「あの女子は御臺のお氣に入りで、機密を存じてゐるげぢやほどに、ちよつと種に致いたが、まんまと失敗つた。ぢやが、其女子め、東寺には居らで、嶽山に居るとは、芥川の袈裟六、お手前もお知りやるまゝ。」

「どこかに隠し置いたとは聞いたが、嶽山とはそりや知らなんだ。如何して嶽山へはお置きやつた。」
「此蓮田兵衛はちと胸に思案なあつて、嶽山へと預け置いた。」

八郎は又愕然として、殆ど息をも吐けぬ思ひ。土一揆の大將は誰であるか、いづれは名もない野武士であらうと思つたが、今名乗るを聞くと、蓮田兵衛である。兵衛と云ふは、近畿切つての名うての剛のもので、土一揆の大將としては誰知らぬものがない。社寺に亂入し、富豪を狼籍して飽くことなく、利慾と榮華とを食ひ、色を漁り、非道を旨とし、人を殺すことは草を薙ぐよりも容易と考へてゐる稀代の曲者である。芥川の袈裟六と云ふは、さして名の知れたものでもないが、兵衛の名には、武家大名どもも怖氣づいてゐる。若菜が此曲者の手中に入つてゐるとは、何たる因果なことであらうと、八郎はつくづく案に暮れた。

「頭領、一體あの女子はどうして、手に入れたのぢや。又お主はあれを種にして、どのやうな狂言せうとするのぢや。又あのやうな大事な人質を、畠山風情に何故お預けやつた。」と、袈裟六は曇みかけて尋ねた。之は袈裟六よりも、八郎が聞きたい大切な問題である。思はず八郎は片唾を呑んだ。

「ふふふふ。」と兵衛は應揚に、したり顔に笑つて、「語らうか、聞け。かうぢや。」

人 質

清水の觀音堂の御前に最後の満願の祈願を籠めると同時に、今まで張りつめた氣が弛んで、若菜は、其儘そこで息が絶えた。丁度此時、社寺を伺つて歩いてゐた蓮田兵衛は、手下兩三人と、降りしきる吹雪を御堂の横手に避けてゐたが、御堂の御前に人ありと見て、つと駆け出し、むづと抱き起した。

「女子ぢや、繊弱い女子ぢや。息が絶えたやうぢやが、まだ温味がある。それ物ども水もて來い。」

音羽の瀧の水を汲み取つて顔に吹きつける、口に入れる。若菜はうつとりと目を覺ます。

「ほう美しい女子ぢや。それ擔いで、大谷まで參れ。」

と、手下の者に擔がせて、大谷まで直走り。とある小屋の爐ばたで、温めて、さまざまに介抱したから、若菜もやうやうに正氣がついて、

「どなたかは存せねど、辱うござりまする。」と、禮するを、

「何のそのやうな禮がいらう。某ははしたないものにはあれど、將軍家に仕へ申すものなれば、其やうな辭儀には及ばぬ。して和御前はどのやうなお人ぢや。」と、口から出まかせの猶撫聲に、若菜は、將軍家の御内人と聞いて、安心し、

「御臺様に仕へ申す侍女にござりまする。」

「此のやうな雪の夜にどうして清水へはござつた。見れば一人身の、伴をもつれず、駕籠にも乗らず怪しげな蓑笠に草鞋穿き、こりや一體どうしてござる。御所へも送り届けよう、包ます隠さず物語りやれ。」と、そこは奸智に長けた曲者のことであれば、言巧みに根掘り葉掘りして尋ねるから、若菜も、つひ御臺様の代参のことから、途中の違變を言短かに物語る。聞きわた兵衛は、獨りで胸で合點し、

「そりや飛んでもない目にお逢ひなされた。どのやうな御祈願かは存ぜねど、途中の曲者は其満願を妨げ致さんとの所存でござらう、思ひ當ることはござらぬか。」と、若菜の顔をのぞき込むやうにして云ふ。

若菜は、思案に餘つて、

「ちとばかりは心當りもござりますれど。」

「そりやさうなうてはならぬ。唯の勾引ではない。御臺所の御心願と申すは、てつきり御跡目のこととござらうな。」

と、兵衛に星をさゝれて、若菜は言ひ淀むを、兵衛は流盼に見て、微笑み、

「和御前が隠しやつても、世間は善う知り居るぞへ。某如きは御内人にござれば、わけて善う知りぬ

いて居るぞ。さすれば、妨げ致さんとしたのも、こりや正しく御跡目のことにたづさはつて居るもの、仕事ぢや、某の胸には、ちやんと善う分つて居る。ちやがのう。」と、兵衛は言葉を改め、

「和御前が御所に無事に歸りやつても、和御前の身の上は危い。勾引の一條露顯すれば、一大事といづれは御所の内外に手配して、和御前歸ると見たらば、命を取らうと致すでござらう。こりやうつかり歸れませぬぞ。」と威嚇すやうに云ふ。斯う云はれると、如何さま若菜の一身は險香千萬である。氣文ではあるが、まだ年若な女。さつと顔の色を變へるを見て、兵衛はさもさうすと言つたやうな顔つき、

「某にしかとよい思案がある。萬事は某に任せられよ。悪うは取計はぬ。」と、獨りで呑み込んで、

「今宵は此家でゆつくりと申したいが、今にもあれ、敵人が草を分けて詮議せぬにも限らぬ。それよりは、これから輿で某の知る邊に送つて隠まうて進ぜう。一日二日経つうちに某御所に参り、路次を警めて、迎をよこすであらう。」

「御志は辱うござりますれど、御使を果した趣を御臺様に申上げねばなりません。」

「それが果されようか、果されぬかは受合はれぬ。敵人の手に捕はれるか、殺されては一大事ぢや。」と、若菜の否むを一切取り上げず、獨りで勝手に取極めて、有無をも云はせず其夜若菜を輿の中に入れて河内の畠山城へと送つたのである。

若菜もこれを土一揆の大將、色と慾との二筋道にかけてゐる曲者とは露知らなんだ。送られた畠山城には畠山右衛門佐義就が居城してゐる。義就は將軍家の御勘氣を蒙つて洛中を出奔したから、將軍は一族畠山尾張守政長に命じ大名小名を催して、義就追討の命を下した。義就の手勢だけで此追討の軍勢を防ぐことはならぬ。そこで野武士浪人を驅り集めて防禦に日も足らぬ有様である。慾にかけては人後に落ちぬ蓬田兵衛は、義就からの好餌に一も二もなく同意して、今では無二の味方である。

蓬田兵衛は若菜の美色を見て、我が慰みものにしようと、大谷の小屋まで連れ來たのであるが、御臺所の使者なりと聞いて、急に思案を慾にかへた。御所へ賣りつけるか、さもなくば満願の坊げしたのは、定めし管領細川右京大夫であらうなれば、細川に賣るか、いづれか一つに賣つて莫大の黄金に代へよう。二つとも叶はずとも、畠山に御臺所の侍女なりと知らすれば、何かな傳手を求めて、御勘氣の詫せうとする畠山のこと、恩賞あるは必定。先づ／＼畠山の城に預け置いて、徐に我が計畫に取りかゝらうと嘯嗟の間に思案して、一先づ嶽山城へと送つたのである。

若菜は又もや曲者の手に落ちて、黄金と代はるべき代物となつたのである。身に恙はないが、奇しい運命は其一身の周圍を環り廻つてゐる。

八郎は敵の陣中に忍び入つて、蓬田兵衛が誇り氣に語る此一伍一什を聞いたのである。今は一刻も猶

豫がならぬ。早く此陣中を遁れ出て、河内の嶽山城に入つて、若菜を救はねばならぬ。殊に嶽山の合戦はもう近くに迫まつてゐる。城の運命とともに、若菜の運命もまた迫まつてゐる。勇士遊佐八郎は懸に依りて、又一段と勇氣が加はる。

暗の中に聲ありて、

「誰ぢや。そこに佇むは。」と、險しく言ふものがある。八郎は思はずぎよつとあとすさつた。

籠居の巻

塔上の一睡

頭上に再び聲ありて、

「大將の居所近く忍ぶ己れは何ものだ。」

と、つか／＼と近寄りさま、無手と八郎の鎧の袖を捉へた。

「己れだよ。」と、八郎は平氣を装うて、答へる。

「己れとは誰だ。」

「うゝ、生駒の權太。」

と、早速に口から出任せに名乗ると、

「何ちや、生駒の權太。聞かぬ名だ。さあ此方へ来て面見せい。」と、八郎の鎧の袖を引摺りながら、火

影の方へ連れ行かうとする。八郎は拳を固めて、早速の當身に、

「あッ。」と、其儘敵はそこへ悶絶する。大將蓮田兵衛の陣の幕がきり／＼と上に引き絞られて、

「聲高に申し居つたは何ものぢや。怪しものか、曲者さうな。」と、やがて呼子の笛が嘯と鳴つた。

一聲、二聲、三聲と、次第に笛の音が長く響いた。すると陣中の騒ぎは一層に加はつて、人は右往左

往に走る。要所要所は固められて、曲者遁すなど、ひしめき渡つた。

八郎は暫く火影を選び、明るいところ／＼と人波の中へ紛れ入つて、何食はぬ顔してゐたが、やがて

人員の點檢が始まるらしいので、こりや此うしては居られぬわいと、彼方の門此方の出入口をと、尋

ぬ歩いたが、手厳しく張番されて、蟻の這ひ出る隙間もない。儘よと、五重の塔の下に立寄つて、ぐい

と押すと、戸は難なく開いた。中から、しつかと貫抜指して、暗い中を手さぐりで、するり／＼と階段

を上つて、たうとう五層の上に出た。

高欄に凭つて、遙に下界を見下すと、篝火の影はところどころほのかに地上を照らして、其間を往き

來ふ人々は蟻のやうに小さい。春の夜のことよとて、一面に薄い絹のやうに包まれて、月はほんのりと朧

に霞んでゐる。河攝の山々は夢よりも淡く、こんもりと茂つた黒い森や林の中には燈火がちらりちらり

隠見してゐる。春とは云へど、夜風はどこともなく冷に髪を吹く。

八郎はうつとりと四方の景色を眺めてゐたが、やがて晝間の疲れで其儘そこへ前後も知らず假寐した、

満身の露氣重く、ふと驚かされて目を覺ますと、夜はもう明けたらしく、東山の方はほんのりと白い。

下はと覗いて見ると、篝火は燃えきつて、あとに残る灰も白く、陣中はひっそりとして、いづれもまだ寐てゐるらしい。此間に遁れ出ねば、又と遁れ得る時はあるまい。しかし事無く、此處を遁れ出ること出来ようか、それも疑はしい。けれども一刻も猶豫はならぬ。嶽山にある若菜の身も氣づかしく、一揆の平定の出来ぬも何となく氣がかりである。一先づ此を遁れ出て、兄七郎に廻り合ふなり、嶽山に赴くなり、遁れた上での分別と、五重の塔を下へと降つた。

塔の上では夜が明けてゐたが、降りて見ると、夜はまだ暗い。昨夜の騒ぎに引換へて、今はひっそりとしてゐる。裏門の方へと辿つて往くと、此處の番兵と覺しいものが二人、いづれも白川夜船、前後不覺で眠つてゐる。

「起きろ。」と、一喝して、頭を蹴ると、驚いて、目をこすりながら、

「どうもはや、はい何ともすみませぬ。つひ疲勞しましたので思はずも熟睡致しました。」と、味方の上役と思つたか、頻りに辭義して言ひわけをする。

「むう、裏門を開ける。」

「はい。」と、答へて、大戸を開ける。此儘に逃げようとならば、わけなく逃げられるのであつたが、それでは興が薄い。我も一方の討手の大將でありながら、敵陣に忍び入りて、見す見す一指を染めず立

去るも不甲斐なさ千萬、何か致して敵陣を騒がしてくれん、あはよくば一揆の大將蓮田兵衛の首でも取つて歸りたいものと、むら／＼と功名心が湧いて來た。火をつけて敵營を亂すも一つの方便ではあるが、此處は弘法大師が基を開いた佛地である。劫火に斯る靈場を燒くのは、罪のほども恐しい。さあどうしてくれよう、おうさうちやと、胸に思案して、油斷する番兵兩人を取つて投げ倒し、有合ふ荒繩でぐるぐる／＼高手小手に縛しめ、

「此方へ來よ。」と、引き立て、裏門外の銀杏の樹にしつかと結びつける。

「靜に致せ、騒ぐと一命を絶つぞ。」と、睨みつければ、

「何の騒ぎを致しませう。靜かに致しまするほどに命だけはお助け下されませ。」と申す。

「神妙にそこに控へて居れ。」

と、捨臺詞して取つて返し、蓮田兵衛の在處をば探し求めたが、更に手懸りが無い。さうかうするうちに見顯されては一大事と、厩に入つて、繋いであつた三十餘頭の馬を解き放つ。そのうちの駿馬と思しいのにひらりと跨り、青竹打ち振りて三十餘りの馬を容赦なくぐり立てると、馬は高く嘶いて大地を踏み轟かし、右へ左へと走せ狂つた。

俄に馬の荒れ狂ふので、陣中の敵人どもは、がばとばかり起き上り、

「すは、討手の夜討と亂入よ。」

と、おびえ恐れて、狼狽へ廻り、あちらこちら同士討が始まる。固より烏合の衆であるから浮足立つて、それ遁げると、さんさんの體たらく。

八郎は此様を見て、愉快で堪らず、鐘樓にかけ上つて、早鐘を掲ぐ、陣太鼓を亂打する、法螺貝を吹く、かかれ〜と馬上で號令する。

もう善い引潮と、馬に一鞭中て、裏門より畦傳ひに遠のいて、一揆の陣中如何にと見ると、裏門から雪崩を打つて逃げ出すもの引きも切らず、

「こりや面白うなつた。まさしく一揆は瓦解と見える。さらば某も此處を引き拂つて、嶽山へと向はう。」

と、竹田街道を眞一文字に南へと直走り。

忘れぬ夢

畠山右衛門佐義就と云ふのは、前の管領畠山入道徳本の妾腹の子である。かねて徳本入道は實子のないため、舎弟右馬助持富の子、政長を養ひて、家督としたが、其後義就が生れたから、何卒して之を

相續人に立てんと思ひ、政長を憎んで出て行けがしの待遇をする。政長之を意にも止めず、孝行怠りなく、家來の者を愛撫して、専ら武勇の嗜があつた。管領細川勝元は政長を最厚してゐたが、享徳三年徳本は政長を放逐し、剩へ追討の御教書を申受けて、憚るところもなく義就を家督に定めた。政長は己むなく勝元を頼りて蟄伏する。畠山の家人どもは、義就の荒々しい振舞に快からず、我も〜と政長につき従つて、再び此人を戴かんものと訴訟する。やがて將軍家より政長を家督すべき由沙汰ありて義就も同じく出仕してゐたが、固より水火のやうな間柄であつたから、とかくに折合はぬ。政長は一たび將軍家の御勘氣を蒙りて、都を出奔し、義就は上意を受けて討手に向つたが、やがて和睦を取り結んで、兩人ともに在京して奉公を勤めた。しかし三年ほど過ぎて後、此度は義就が御勘氣を受けて河内へと罷り下つた。此時館を焼き拂つて退轉すべしと申すものがあつたが、義就つや〜合點せず、

「面々の申すこと尤も至極に聞えるが、館に放火致さば、公儀を輕んじ野心あるに似て、宜しからぬ。其上政長も他人ではない。館は畠山のもので、唯政長と義就とが入り替るばかりである。又よしや館を焼いたとて、敵の弱味にはならぬ。館は其儘棄て置け。」

と、一同を制して、河内の國へと罷り下る。討手の用心あつて然るべしとのことで、家の子郎黨の老いたるは、いづれも小具足を着け、若きは漏胃を被、東洞院を下りて竹田河原に出る。河内に居住する家

人どもは、我もくと淀の大橋へ御迎へにと参る。此處で大勢となりて、石清水八幡の實前にて義就馬より下り、八幡大菩薩を拜みて武運長久を祈り、それより洞ヶ峠にさしかゝる。都の空はと戀しく振りさけ見ると、一天澄み渡つて、日は七つ下り、連山波濤の如く、東に比叡、西には愛宕、東寺の古塔は幻のやうに空に浮んで、清水の塔八坂の塔は、牽微の間に隠見する。京洛の大路小路を縦横に縫ふ家々は屋を列ね棟を並べて、盆景の如く眸の裡に入る。義就はしばし馬を山の頂に立て、思はず暗然として其儘そこに佇んだ。

「あゝ思へば夢のやうなものだ。榮枯盛衰地を替へて、昨日までは、都の風月を賞でゝゐた我も、今日は流離の身の上、いつの時に又歸洛が出来ようぞ。なつかしい都、戀しい都に、今は別れを告げねばならぬ。心のない馬の足すらも、何となくはかどらぬ心地が致す。義就は罪なくして配所の月を見ねばならぬか。秋は寂しいものであるが、今年の秋は又一しほに寂しむ。」

と、獨語して去り兼ねてゐる。習々たる秋風は馬の鬣を吹いて、折から一片二片木の葉がちらちらと鬣を掠めて散つた。其の木の葉の行方を見つめながら、

「秋風につれて、枝を離れた木の葉は、さても義就の身の上に善う似合うてゐる。行人の足に踏みつけられて、空しく土の裡に埋もれるか、谷川の水に流れていづくの岸に漂ひつくか、よもや舊の枝に返る

ことはあるまい。」と、ひたすら嗟嘆を禁じ得ない。

秋の日脚は短い。夕日の光は華に、帯のやうに巡り行く淀川の水に溶けて流れる。宇治・木幡・羽東師のあたりは、木々も薄く黄ばんで、其間に隠れつ見えつするは、宇治の流れであらう。大山崎・水無瀬・長岡は山を背負つて、もう薄暗い影が漂うてゐる。

「殿、お急ぎ遊ばされませ。日もはや暮れまするほどに。」

と、家人に急ぎ立てられ、

「おう如向にもさうぢや。名残りは盡きねど、はて是非に及ばぬ」と、義就はやをら馬を立て直した。

「斯うもあらうか、

うかりける都に何の情ありて

忘れぬ夢の残る面影

いざ参らう。」

此夜は眞木の城に泊り、翌る日河内の若江の城に入つた。閏九月九日、畠山尾張守政長は義就追討の下知を受けて京を出發し、立田に着陣し、大和勢を催して若江の城を一氣に攻め落さうと競ひかゝつたが、大和を初め近國の兵どもも施行に従ひながら、着到に

つかず、とかくに延引に及ぶ。義就之を聞いて、さらば此方より逆寄に押寄すべしと、十月九日の夜、若江の城を立出でて立田に向つた。

夜も更け渡つて、萬籟寂寞たる折しも、其寂寞の境を打破つて、平群谷の早鐘が殷々と山々谷々に鳴り響いた。すはこそ夜討よと立田の軍勢は騒ぎ立てたが、尾張守政長は少しも驚かず、明神の實前に祈念して、軍勢を在右に鶴の翼の如く引き備へて、眞一文字に敵勢の中へわつて入り、此を先途と戦ひたるに、さしもの義就の猛勢も手痛く破られ、眩股腹心と頼む家人郎黨ども數多を失ひたるばかりか、若江の城を持ち耐へ得ず、河内畠山の城へと立籠り、しきりに野武士どもを驅り集めて、政長との對陣に忙がしい。

其の驅り集められた野武士の大將に蓮田兵衛があつた。蓮田は近郷遠國に隠れもない名を知られた猛男のものであつたから、義就も此を二なきものに思ふ。一日、兵衛は義就に打向ひ、

「此やうな偏土に引籠りて敵勢を待受けるやうでは、唯に退くのみで、進むを知らぬ拙い兵法でござる。時折は洛中洛外を脅して、敵の背を撃つのが妙策でござらう。」と申した。

「如何さまもあらうなれど、某に其様な餘裕はない。」と、義就の云ふを打消し、

「洛中洛外を脅かすことは、斯く申す兵衛が確と引受けます。」と申して、野武士強盜の輩を引連れて

都へと打向つた。斯うした兵衛の胸には一物があつた。名は畠山義就の味方であるが、固より強慾非道の盗人であるから、まことは洛中洛外の寺々館々を劫掠しようと云ふ考へであつた。義就も二なきものとは思ふものゝ、流石に不安心の點もあつたから、我が股肱の郎黨中村左近をそれとなく其一行の中に加へた。蓮田兵衛は同勢を目立ぬやう三々五々都へ上せ、己も引續いて洛中洛外を逍遙ふうち、ゆくりなく若菜を清水の觀音堂で手に入れたのである。しかし中村左近の手前もあつて、御臺所の侍女を脅迫することもならず、色を利慾にかへて、さらば畠山殿の手許に藏し置き、歸參の叶ふ一手段にもなされよと、惜くはあつたが、一つは中村左近を遠ざける方便にもならうと内心に思案し、左近に護らせて、畠山の城へと送り届けたのである。けれど轉んでも唯は起きぬ兵衛のことであるから、若菜を我が陣屋の中にあると見せかけて、大膽にも將軍家を強請らうと企てたのであつた。

思案

若菜は奇しい運命に囚れたのである。戀しいなつかしい都の空を後に、野越え、山越え、里越え、森越えて、聞きも知らぬ南河内の嶽山と云ふ山深く、古木生ひ茂つた城の中へ送られた。

畠山右衛門佐義就は、中村左近より事しかくと聞くとひとしく、

「御臺の侍女と申すか。しかも御臺より祈願の仰せを承つて、三七日清水へ参籠致した、御臺が杖とも柱とも頼ませられる侍女と申すか。出来した兵衛、こりや義就に取りて、善い奇貨ぢや。其女子を途中で奪ひ取らうと致したるは、いづれ義尋僧正を御跡目に戴かうとする、御臺とは仲の善うないもの、所業に相違はない。智慮ある細川右京大夫としては浅慮のやうではあるが、此人か、其家人の所業どしか思はれぬ。此女子が我手に入りたる上からは、いつか御臺の許に送り還し、我が身の歸參を企まう。舅婿ではあるが、山名と細川とは権力の角突き合ひを致し居るこそ究竟である。山名と結び、御臺に取り入らば、尾張守政長を追拂ふことは苦もないこと。細川右京に立越えて、權勢が我手に入るは遠くもあるまい。こりや天より降つて來た幸運であるわ。」

と、獨り悦に入つてゐる。若菜こそ善い迷惑である。蓮田兵衛は若菜を餌に利慾を釣らうとしてゐる。畠山右衛門佐は若菜を媒鳥に權勢を恢復しようとしてゐる。けれども、いづれにしても若菜の身の上は安さうに思はれる。當然いつか無事に花の御所に歸り得べき筈である。

春とは云へど、此處はまだ寒い。金剛山の峰は燈つて、朝な夕なに吹き下す風は肌冷かに、箕の水は、ともすれば凍らうとする。其の館の一間に囚れとなつてゐる若菜は、行末のこと、御臺所のことのみ胸に往來して、氣が結ばれるばかりである。

「まるで夢のやうな。満願の雪の夕に鴨川土手から飛び下りて河原の乞食小屋に助けられ、そこから逃げ出して、夢中に清水の觀音様に詣でたと思ふ間もなく、怪しの者に捕はれ、我が身の安泰を計つてやらうと、三日二晩駕籠に揺られ、此やうな山里の館にあづけられた。聞けば此處は河内の嶽山の城と云つて、長野將監とやらの持城。その將監を頼りに畠山右衛門佐殿が居られるげな。追つつけ畠山殿の歸參が叶うて、目度う都へ歸られる折には、我が身をも伴うて花の御所に送り届けよう、それまでは何事も穩便に此館に隠れるよとのことぢや。何が何やらさつぱり分らぬ。畠山殿の歸參が叶ふか、叶はぬかさへ知れぬ。此處の人々が善い人やら性惡な人やらそれも分らぬ。いつ花の御所に歸れるやら又いつまでも歸られぬやら、それさへもたと知れぬ。なまじ此やうな所に、果敢ないことを便りに忍び居らうよりは、そつと人目を忍んで此を脱け出で、京へ歸るが上分別やらも知れぬ。ぢやが此頃はいづかたも騒がしい世の中。右衛門佐殿と尾張守殿とは絶えず合戦の様子、昨日もどうやら右衛門佐殿は軍に出られた様子ぢや、此やうな騒がしい世の中であれば、路次のほども心許ない。なまじ野武士強盜の手になど囚れたらば、又どのやうな憂目を見ようも知れぬば、いつそ此儘此處にゐて、自然の成行に任せようか。語らばう人もなし、相談する相手もない。」と、若菜は若い胸の中で、とつおいつ思案に暮れてゐるけれど、其悶え苦しむ胸の裡にも一點の光明が輝いた。これせめてもの慰安である。

「遊佐様、八郎様はどうして居られるであらう。定めし我が身の上を心配ひして、さまざまに思案してお出でなされるであらう。優しいお方ぢや、男らしいお方ぢや、好いたらしいお方とは思つてゐたもの、奥仕へする此身と、表の御奉公なされる遊佐様とは語らふ折もない。此方が好いたらしいと思へば彼方でも憎からず思うて居られた様子。穂に出てははしたないと、我と我身を責めたこともあつたが、おう忘れもせぬ、去年の秋、御臺所のお伴申して、西山の紅葉見の折、一寸ばかりであつたが、人目ない所で、ふと遊佐様から思の丈をお語りなされ、我が身も打明けてお話し申した。唯それきりではあつたが、我が身で許した戀人、遊佐様からも此身が戀人、互の心の誠は通じて居る。やがては御臺様にお願ひ申し、上様の御許しを得て、晴れて夫婦とならうと思つてゐた、其甲斐もなく、我身は此やうに儘ならぬ囚れ同様の身の上、我が身の在處さへ遊佐様は御存じあるまい。兩人の願ひが叶ふ折があるか、ないかさへも今では分らぬ。」

斯う思ふと折角の光、明がふつつりと消えて、暗い影が深ふけれど、若菜は思ひ返して、

「天道様があるからには、やがては誠が通ずる時節もあらう。おうお逢ひ申して、しみんと今日此頃の苦しいせつない物語りがして見たい。」と、自分で自分を慰めると、前途に又あかあかと光、明が照る思ひがした。

せめてもの慰みと、空想に耽つてゐる途端に、

「若菜殿、お内にか。」と、襖の外から音訪ふものがあつて、若菜は夢の世界から現世へ引戻された。

降つて湧いた難儀

ぬつと入つて来たのは、城主長野將監の舎弟孫二郎と云ふものである。背は低く横肥りの色黒な醜男、唯力の飽くまで強く、物を物とも思はぬ不敵な所業は、一城のものに舌を巻かせてゐる。

若菜は其顔を見ると、蟲唾の湧くを覺えた。河内の山家育ちのぶしつけものであるから、今までに京生れの鴨川磨きの女と云ふものを見たことがない。しかも京女の中でも優れて美色の若菜を一目垣間見てから、もうたわいもない。若菜の係りは拙者一人で仕ると、誰に頼まれもせぬに、まめくしい甲斐々々しい忠義振りには、唯若菜の歡心を得ようとするためであつた。

昨日兄の將監は、右衛門佐に從つて、若江へと向つて、一城の留守は孫二郎がつとめてゐる。尤も右衛門佐義就は兄の將監を止めて、孫二郎を伴ひ行かうとしたのであつたが、胸に一物ある孫二郎は虚病を使つて、まんまと隨行を逃れた。右衛門佐將監の留守を窺つてゐた孫二郎は、時こそ來れと、昨夜若菜を音訪はうとしたのであつたが、思ひがけない邪魔が入つたので、待ち兼ねて今日音づれたのである。

おう嫌な奴が来たなと思ふと、若菜の気色は變る。こちらは委細構はず、濁聲高く、
 「のう若菜殿、もう春ぢや、お見やれ、柳の枝も青う芽を出いた、梅の花も咲いた。人の心もどうやら
 浮き立つ時節となつたに、垂れ籠めてゐては、身體に善うない。どうぢや今日は此孫二郎が案内せうほ
 どに、東條から觀心寺あたりへ漫歩きしたらえうぢやないか。」
 若菜はつんと横を向いて、

「其お志は辱けないが、氣分が勝れませぬ、お許し下され。」

「何ぢや氣分が勝れぬと、おう如何にも顔の色が善うない。大事な身ぢやほどに大切にしやれ。ぢやが
 のう病は氣から起る。其許は京が戀しいのぢややろ。それでよく致いて、我身で病を起さつしやる
 のであらう。笑止なことぢや。しかし其許は京へ歸れるとお思ひやるか。」と、此男異なことを云ふ。

「そりや京へ歸れぬで何としませう。」

「さあそこぢやて。右衛門佐殿の歸參は叶ふであらうか、どうぢや。其許が其歸參を當に致さば、大間
 違ひにはならぬかのう。」と、孫二郎は冷かな笑を其大きな口のもとに漂はせてゐる。若菜とて其歸參が
 叶ふやら叶はぬやら、固より分らぬ。ではあるが、素知らぬ顔で、

「御歸參は叶ふであらう。妾からも御臺様に善う申しませうほどに。」

「あはゝゝゝ。」と、孫二郎は大笑ひして、

「尾張守が承知せぬわ。右衛門佐殿が尾張守に打勝たばいさ知らず、それもどうやら、覺束なささうな。
 右衛門佐殿の歸參が叶はぬとあらば、其許の歸洛も叶はぬ。もう歸洛などは思ひ止つた方がよ。」

「いやなことぢや。」

「どうぢや、それより河内に居て、一城の主の内方となつては。」

「おういや。」と、若菜は身振りひして見せる。孫二郎はほれほれと、其横顔を眺めてゐたが、獨りで合點
 し、

「まこと歸洛致したいかのう。」

「そりや言はいでも知れた、無論のこと。」

「よし、そんなら右衛門佐殿に頼まうよりか、此孫二郎が致してくれよう。」

此男、形勢の非なるを見て、咄嗟の間に方略を變へたものと見える。

「お前にそのやうなことが出来るかいな。」

「出来るともく、大出来。此孫二郎が一つうんと承知致さば、きつとやつて見せる。まいて其許の頼
 みならば水でも火でも厭やせぬ。」

「おう頼もしいお方のう。」

と、嘲るやうに、若菜は莞爾する。其莞爾が此男に取りては千金の價ひがある。固より智恵にかけては浅い方の男であるから、嘲りの笑いと眞實の喜びとの區別などが分らう筈はない。

「頼みにしたがよいわ。」

「頼みませうか。」

例の若菜の氣象であるから、此う云ふ際には落付き拂つて冷かし氣味に探りを入れる。

「よし引受ける。ちやがのう、魚心あれば水心あり、落花情あれば流水も意があるとか申す。其許此ことがお分りやるか。」

若菜は可笑さをこらへて。

「むづかしいことお云やるのう。妾には善う分らぬ。」

「京生れの其許ちや、まして御臺に仕へ居る其許ちやほどに物の文などは善う讀まう、此位のことがお分りやらぬことはない。ちやが斯うだ、其許が此方を頼みと致さうとならば、此方の頼みも其許が聞いてくれねばならぬ。つまりは其許が某の云ふことをお聞きやらば、某もしかと其許の頼みを仕果さうと云ふのぢや。」

と、孫二郎は膝押し進めながら眞面目である。若菜は降つて湧いて來た難儀を心に感ぜぬではない。しかし今少し素知らぬ顔で探つてやらうと、座を正し、

「まあそれよりか妾からお前に尋ねたいことがある。それはお前は如何にして妾を都へ送つてくりやるか。」

「そりや斯うだ、蓮田兵衛と云ふ、それ〱其許が清水でお逢ひやつたあの男ありや野武士の頭ぢや。今のほどは都にゐて土一揆を起して居るが、某彼を援けんと右衛門佐殿や兄將監に申して、此城を出立つのである。右衛門佐殿や兄の歸城せぬ前に其許を盗み取つて、さる所に隠し、某出立の折、其許を伴うて都へ参れば、苦もなく都へ歸れるは定ぢや。どうぢや、妙策でがなあらう。」と、孫二郎はしたり顔である。

若菜は此でふと思案が浮んだ、如何さま右衛門佐の歸参も當にならぬ。その當にならぬ歸参を當にして、いつまで夢のやうな歸洛を考へるよりは、此孫二郎に欺かれたやうに見せかけ、此奴を欺して歸洛を計らうか。ちやが待てよ、まこと彼は都へ此身を連れて行くであらうか。連れ行くと欺いて、此身を其思ひ通りに致さうとするのではないか。こりやうつかり頼んで、取返しのかね破目に陥つては一大事と、彼の胸は又さまざまに思ひ亂れて暫し躊躇つた。

鬼薊の巻

墓

142

「あゝこれちやつと言はんせぬかいな。」

眼の釣り上つた、青白い、神経質とは一目に知られる女の指走つた聲が響く。

「何云うてゐるのぢや。何もありませんがな。」と口には云へど、どきまぎしてゐるのは、彼の孫二郎である。

「いゝえ。」と、女は打消して、

「お前は隠してゐさんす。あの京から来た女子を戀ひ慕うて昨夜は崑山様やら將監殿やらのお留守を幸ひに、あの女子のゐる處へ行かうとしておいでなされた。妾はとうから其様子をちやんと知つてゐるから、邪魔入れて往かせなんだ。定めしお前は往きたうてくゝ氣も魂も添うてはゐやへなんだであらう。笑止や、えゝ氣味や。すると今日はどうぢや、妾が鎮守様へお参りした留守を善い潮にして、女子の所へおじやつたぢやないか。どのやうな話をしてゐさんした。さあ包まず隠さず妾に話したがよい。話さ

ぬとならば 妾にも覺悟がある。聞かぬうちは、お前を此處から離しやせぬぞへ。」と、女の權幕は恐しく、うつかりすれば、掴みかゝらん風情である。

孫二郎もこれには困じ果てた體たらく、

「そないに云やるな。留守をあづかる此方ぢやほどに囚れてゐる女子の様子を見るのは役目ぢや。」

「へん、留守をつけねらふが役目ぢやものかいな。さあ女子と何語らうてゐたのや。」

「何も語らうてはゐぬ。」と、男の聲も、胡蠅がりてや突慳呑となる。

「さあ、お前は妾を善うも欺いた。妾は將監殿の妾者であるぞへ。それをお前が兄上死うなられた時、にはきつと夫婦になるぞと云うた其言葉に、つひほだされて、將監殿に悪いとは知りながら、斯うした仲となつた。妾はお前の言葉を忘れやせぬに、お前はもう忘れ切つて、妾をふり棄て、他し女子を可愛がらうとの所存。善うもまた其やうな悪性なことが出来るぞへ。欺されたが口惜しい。」と、女は涙交りに、血相變へて云ふ。孫二郎は慌て、

「これく其やうな内所事は其やうに高聲に云はぬものぢや、人が聞いたら大事だぞへ。」と、聲を潜めると、女は、

「いゝえ。云ふともく。言はいで何とせう。」と、猶も高聲に云ひ募らうとする。孫二郎は手を合せて、

143

「あやまつた〜、此方が悪かつた。勘辨してたもれ。」と、ひたすらにあやまる。此男平生強いが自慢で、人を人とも思はぬ不敵の剛のものではあるが、此女にかけると、青菜に鹽で、頭の上らぬこと夥しい。女はさもしたり顔。

「どうせお前のことぢや、あの女子にいやらしいこと言うてたに定つてゐる。あのやうな女子はもうふつりと思ひ切つたがよいわ。やはり將監殿の目を忍んで、此妾と逢引して、世間の女子は妾より外にないと思つてゐたがよいわ。」と、此女、頗る得手勝手のことをほざいてゐたが、男はそれを云ひ返すことも得ならぬ。

「尤も〜。其通り心得ようぞ。」と、表向ばかりの氣安めではあらうが、ひどく氣の好いものである。「孫さん。」と、女は言を改めて、

「一體あの女子がお前に靡くと思ひやるか。」

「そりや分らぬ。」と、之には孫二郎も少からぬ情氣氣味。

「ふ〜ん。」と、女は又口の先で嘲つて、

「とても駄目であらう。お前には荷が勝ち過ぎてゐる。」と、女は自分の男を眼下に見くびる。して見ると丁度妾が相當してゐる、と云ふことになるのだが、それまでは此女も氣がつかぬものと見える。

「ありや京の御所奉公してゐる女子ぢや。何で山の中にあるお前のやうな慕見たいな男に添はうぞ。考へても見るがえいわ。」と、女は愈々調子に乗る。慕とは随分思ひ切つて言つたものである。男は苦笑ひして、

「こりや手厳しい。」と、閉口するばかり、此慕先生、手も足も出ないのである。

「は〜〜。」と、女は得意に笑つて、

「慕でも、妾にはえ〜男や、可愛い男や。」と、一方の血路を開いてくれる。

「さあ、もうあの女子のことはふつりと思ひ切つたがえいわ。そこで孫さん、相談やが、とてもお前の思ふ通りにはならぬ女子、又あの女子がゐるほどにお前が妾に薄情しやる。あのやうな女子が嶽山に來居つたは、天魔の所業であらう。どうやお前の刀であの憎らしい女子を二つに切つて谷川へでも屍骸を棄て〜は。」

と、女は恐しい相談を持ちかける。戀の敵とつけわらはれたのは、若菜に取つて意外千萬、迷惑此上なしの災難である。

流石の孫二郎も之には反對を表せざるを得ない。

「そりやならぬ。いらぬ殺生や。ことに鳥山殿が後日の爲にと大事にして居られる客分ぢや。それを殺

してなるものか。」と、言はせも果てず、

「其やうな大事の客分になぜお前は戀などしやる。崑山様には大事の客分であらうが、妾達に取つて悪魔ぢや。逃けたと云つて置けば、それですむ。お前はぞつこん戀してゐやるほどに、其やうな手荒なことが出来ぬであらう。」と、云ひながら、しげじげと男の顔を見て、ぶつと噴き出し、

「何ぢや、其やうに途方に暮れた顔わいな。」と、又しても輕蔑んだが、やゝあつて、

「うゝ。」と、獨りで合點して、

「如何にもお前には手荒いことも出来まい。さらば斯うせう。お前が欺いて、あの女子を城から落させたがよいわ。ぢやがお前が送ることはならぬぞへ。妾から誰ぞ附人をやらう。又お前は女子につべこべと用の外の色話など云ふことはならぬぞへ。妾が立聞するぞへ。」と、女は曇みかけて、命令的に云ひ渡す。

孫二郎は思はず心の中で、につこりと笑つた。

此女を京へ連れ歸ると欺して城から出さうとしたのは、孫二郎の方略であつた。唯恐しかつたは、此妹妬深い女の眼であつたが、今は公然と此女から命ぜられたのである。城から逃がしてしまへば、それ

から先はどうともなる。旨いことになつたわいと、孫二郎は幸福の到来を自ら祝福したのであつた。

胃 虫

孫二郎に別れて、我が部屋へと取つて還した將監の妾——嫉妬で、淫婦であつた——蕪は、野武士上の平内と云ふものを呼び寄せた。

「蕪さま何の御用でござりまするのう。」

「おう平内か、善う参つた。近うござれ。」

「はつ。」と、のつそりそこへ畏まる。

「其やうに窮屈にせいで、打寛いだがいわ。」

「辱けなうござります。」

「汝は野武士をしてゐたにも似て、義理堅やのう。」

「はゝア、元は元、今は今でござります。」

「さうかいのう。」と、女は莞爾として、

「汝はあのお城の中にある京の女子を知りやるか。」

「知つて居ります。蓮田殿が清水で捕へたと云ふ御所の女子でござりませう。えい女子でござりますのう。」

「汝にもえい女子と見えるかい。」

「そりや見えませとも、此邊にはあのやうな女子は居りませぬ。お城に咲いた花でござります。碌でもない女子ばかり居るお城の中で。」と、云ひかけて、平内慌てゝ我と我が口を押へる。

女の顔はけんを帯びて来た。風雲の氣がさつと顔のほとりに漲つた。女は無言、平内の面を射る眼光は電のやうである。やゝあつて、

「さうや、お城の中は碌でもない女子ばかり。あの女子はそのうちに咲いた一本の花や。如何にも其通り。」と、云ふ聲はやゝ震へてゐる。

平内は元來圖太い男であるから、薊などを何とも思はぬ。孫二郎のやうに畏縮するわけもないが、又畏縮する性質でもない。

「はゝア、お氣に觸りましたかのう。けれど私はまことを云ふのでござります。追従やおべつかは私とんと嫌ひや。お氣に觸つたら、又あとで参りませう。御免下されませ。」と、其儘起ち上つて、すんく立ち歸らうとする。これには流石の薊も面喰つた。急に機嫌を直して、

「汝は正直ものや、一刻ものや。何妾が怒らうぞ。用がある、聞いてたもれ。」と、云はれて平内は又無手とそこへ坐る。

「早う御用を仰せられませい。」

「まア其やうに急ぎやるな。」と、女は泰然として、

「あの女子は顔に似氣ない大膽な女子や。」

「又あの女子のことでござりますか。もう其話はよしてくだされ、又お前様が顔の色をお變へなされますると、私は起ち上らねばなりませぬ。」と、平内は一向に乘氣にならぬ。どうも孫二郎に對するとは様子が違つて、薊の方が少しさぐりの體たらく。

「汝に用があるとは、あの女子にかゝはつてのことぢや。」

「其やうな御用ならお断り申します。」と、平内は膠もない挨拶。えゝ面倒と思つたか、薊は手文庫の中から小粒銀を五ツ六ツ取り出して懐紙の上に乗せ、

「酒の代ぢや。」

平内は流盼にそれを見て、

「其やうなお心遣ひはおよしなされませ。將監殿の内方が亡くなられて後は、此城で羽振りのよいお前

様、其お前様の御用なら聞かねばならぬ私達でござる。酒の代など下さる前に御用をちやつとお聞かせ下されい。」

「それでも汝はあの女子にかゝはつてのことは、いやちやと申すではないか。」

「お前様が嫌な顔なされるが厭でござります。」

「もう嫌な顔はせぬほどに聞いてくりやれ。」

「聞きませう、あの女子が何としましてござります。」

「あの女子は大膽な、將監殿の弟孫二郎殿と何やら打語らうて、怪しい間柄ちやと申すわ。」

と、云はれて、平内はぶつと噴き出し、

「何で其やうなことがありませう。あの美しい京女が胃虫見たやうな孫二郎連れと怪しいことがありませう。そのやうな噂するものは白痴でござりませう。」

菊の色男孫二郎はさんぐである。現在の情婦からは慕と罵られ、野武士上りからは胃虫と嘲られる。菊は自分で慕と罵倒したものの、胃虫と嘲られては、いゝ氣持がせぬ。又實の所、京女の若菜が孫二郎風情に靡かぬことは、自分も公言したのであるが、平内の目も流石に高い。いや平内ばかりでない。萬人が萬人、誰が此やうな噂をするものがあらうか。又噂があつたにしろ、信ずるものはない。して見

ると平内の目が高いのではなくて、孫二郎には其やうな資格が絶無と云ふことになる。情婦の身としては安心なやうなもの、決して名譽とは云はれぬ。

先程より平内には少からず手こずつてゐたが、又無下に退けられては、菊の取りつく島がない。海山千年の化生の女もこれには持て餘さざるを得なかつた。

「それでも縁は異なるものと申す。又蓼喰ふ虫の何とやら申すやないか。」

と、菊はしきりに立證せうとつとめる。

「如何にもう。世の中は廣いもので、孫二郎連れでも、何やら異なる噂を申すものがござります。尤も京女にかゝはつてのことではござりませぬが。」と、じろりと菊の顔を見た。菊は思はず冷水一斗を背からかけられたやうに覺えて、顔をそむけた。

思ひく

菊の部屋を立出でたる平内の厚い唇のあたりには冷笑の影が動いてゐた。

「ふん。」と、さも輕蔑した様子を見せて、

「何だ淺はかな女の猿智慧。此己にあの京の女を殺せと云ひつけくさつた。自分めが現在の主の弟と

不義徒らして置きながら、嫉妬を起して、京の女を目の敵に致しくさる。此平内をこんな白痴けた者と思つて居るのか。あのやうな女郎の云ひつけを何で聞かうぞ。ちやがあの孫二郎の奴が京の女を欺いて城から遁すであるか。逃いたら面白。此平内は殺さずに勾引かいて遁げるまでちや。こりや善いとを聞いた。孫二郎は腕に覚えのある大力のもので、此平内が手にはちと負へかねるが、どうせ彼奴は筋に睨まれてゐるから、自分で京の女の伴しては参るまい。いづれは腹心の奴原であらう。其やうな奴原なら此平内が殺すばかり。あはゝゝ面白うなつたわい。」と、獨り悦に入つて、ほく／＼と何方へともなく立去つた。

平内の出で行くあとから、そつと覗つてゐた薙は、何やら気がかりなと云ふ思ひ入れ。

「さあ、こりや心配ひな。あの平内に頼うでは見たものゝ、敵やら味方やら分り悪うなつた。怒に目のない奴ちやに依つて怒で釣らうと思つたが、どうやら裏でも掻きさうな。あゝ悪い奴に頼うで、可憐な工夫をふいに致したやうな。どうせう、孫二郎殿に相談せねばならぬが、あの孫二郎殿は京の女に戀してござれば、これもまことのことは打明けられぬ。はてさて困つたことになつたわい。」

流石に悪智恵のある女だけに、平内を少からず不安心に思つた。しかしふと女は思ひかへして、何、京の女が城の中からゐなくなれば、それで善いと合點すると、思はず、につと凄しい笑を浮べた。

そこへ案内もなく入つて來たのは、例の孫二郎である。薙は目敏く見て、

「孫さん、様子はみんな聞いてゐたよ。」と、いゝ加減なことを云ふ。

「さやうでござつたか。そんなら云ふほどのこともござるまい。」

「それでもまア云つて見やれ。」

「京に送つてやる、城を逃げねば京へ歸ることは出来ぬと、斯う言つたのでござる。尤も此前にも此様なことを。」と、云ひかけて、ふと気がついて、

「何、斯うや。前から云はう／＼と思つてゐたと物語つたが、女はどうやら此方を信じて居らぬ。」

「そりやさうである。」

「まアお待ちやれ。もう輕蔑んだり、嘲つたりすることは御免なされ。此方は眞剣でござるぞ。」

「それからどうしやつた。」

「此方善い智恵を絞つて、旨いことを申した。」

「何とな。」

「此城にある家の子の中で年老つた實直のものを附人にして進ぜようと申した。」

「ふう、そりやさうなうては叶はぬ。」

「いろ／＼に説いたら、女もやうやく納得して、今夜潜に城を忍び出ると、しかと約束致いた。」

「見送らうござらうのう。」

「もう冷かしはお許しめされ。此方の役はこれですんだと申すもの。さらば又あとで参らうぞ。」

「まアお待やれ。」

「ちと用ばしござる。」と、孫二郎はするりと其處を脱け出で、踵をも見ずに、急ぎ足にて己が居間へと逃げるがやうに往く。居間に入ると、

「彌六く。」と、高聲に呼ばれば、年老いたる郎黨が、

「あつ。」と、答へて出て来る。其耳のあたりに口をつけて、囁けば、彌六は合點し、

「富田林のあすこへとな、善うござりまする、合點致しました。追ッつけお前様がお出でなされて、京へお伴なされまするか、よろしうござりまする。必ず誰にも申すなど、それも合點。それで此私もある女子衆と暫し富田林に居りますか。これはちと迷惑でござれど、お前様の云ひつけなれば、それも是非に及びませぬ。」と、孫二郎の命令を畏まつて、年老つた郎黨は居間から外へと出た。

速く此様子を見てゐた平内、

「は、ア、あの老爺に伴云ひつけたと見える。あの老爺ならわけないことぢや。活すも殺すも此方の自

由。よりによつてあの老爺に善うも沙汰致いたものぢや。これと言ふのも、あの孫二郎めが定めし胸に思案あつてのことぢや。さあ此方も逐電の用意なとして置かうぞ。」と、我と我身で獨りうなづいて、時刻の來るを待つてゐる。

寄手の勢

此やうな計略があらうとは固より知らず、災難が手を伸して居らうとも知らずに、若菜は孫二郎のことを信とせず、唯京へ歸らうと、一圖に若い胸の中で覺悟して、今宵此城を抜け出ること同意したのである。

孫二郎が我を欺くならば、我も亦其計略の裏を掻いてやらう。高の知れたる田舎武士、大した智恵も無さうな。とにかくに城を逃れ出たらば、又詮すべきことこそあれと、度々の艱難で、若菜の度胸も据つて來た。

五つの鐘を合圖にそつと居間を脱け出れば、寄手の方へ駕籠を廻し置くとのこと。とにかく城主の弟の指圖であるから人目を忍ぶとは云ひ條、公けに通れられると云ふもの。可笑しいこともあればあるもの、其先は運だめしと、不安の裡にも若菜は微笑を禁じ得なんだ。

つと起つて、窓を開けると、木立のこんもりした間から大手の門が見える。夕日は華やかに照つて窓際に近い彼岸櫻はほんのりと赤い。そよと吹いて来る風もどこやらに春めいて、暖である。

「あゝ春だ。御所のお庭のお庭の咲いたであらうに、何故に我が身の上には春が到来せぬであらう。」と、若菜は思はずほろりとした。

嗚呼若菜、其名には春の氣分がゆつたりとしてゐるが、其身には霜が降り、雪が積らうとしてゐる。若菜は春の野に青々と生えたのではなくして、雪の下になほ埋もれてゐるのであつた。

悵然として暮れ行く空を眺めてゐると、大手の門へ一騎、大童になつて馳け来たものがある。どうやら戦場からでも戻つて来たやうな。大手の門が開いて、其武者が駆け込むと、やゝしばらくあつて、城中は何やら騒がしくなつた。

間もなく、二騎三騎五騎十騎と駆け来るものがある。いづれも遠目で善うは分らぬが、鎧の袖もちぎれて、血汐に染まつてゐるらしい。中には大手の門を潜ると、ぱつたり地に倒れるものもある。城中の騒ぎはいよゝゝ激しくなる。

城中の太鼓が響々と鳴る。あちこちに人の走る音罵る聲が聞えた。此うなると、うつとりと見入つてゐた若菜も我に返つて息をもつかず大手の方を見つめた。次第に人馬の駆け来るのが引きも切らぬ。其

さまが尋常でない、勝軍ではなうて敗軍らしい。

やがて女子供の泣き叫ぶ聲が手に取るが如く聞えた。

「こりやまさしく敗軍さうな。」と、若菜は思はず吐息をついた。

すると、そこへ若菜に侍いてゐた少女が駆け来て来た。

「大事が出来よりしました。」

言ふ聲もおろ／＼してゐる。若菜は素知らぬ顔で、

「大事とな。どのやうな大事であるぞへ。」

「味方が大敗に敗けたと申します。畠山様はさん／＼になつて今お戻りなされました。此城の主將様は深手を負はれて、やつとお着きなされました。そればかりではござりませぬ。敵があとを追ひかけて参るとのことに、もう籠城の用意とり／＼にござりまする。」と、息切らしながらに云ふ。

やがて遠くの方では法螺貝の音が響く、陣太鼓の音が山山谷谷に反響する。如何さま敗軍のあとを追うて、寄手の勢が近づいたと見えた。此うなると敗軍も他人事ではない、若菜の身の上にも降つて湧いたる新しい災難である。

敗軍の右衛門佐、將監が善く此城を持ちこたへ得るか、どうかは大きな疑問である。よし 持ち耐へ

得るにしても、これからは籠城の苦しみに逢はねばならぬ。其上日夜矢叫びの音阿鼻叫喚の聲を聞かぬばならぬ。花の御所に侍いて花鳥風月より知らぬ女子の身としては、驚天動地の大事件である。まして籠城とならば此城を逃ようとしたところが、逃げられることはならぬ。さても大事が出来たよな。

孫二郎ももう若菜どころの騒ぎではない。兄の將監が傷いた上は、孫二郎代つて一城の兵士を指揮せぬばならぬ。薊に對して頭の上らぬ孫二郎も、一變して一城の勇將となり、甲斐甲斐しく味方の勢を要所々に配つて、防禦に忙しい。

薊とてももう若菜など顧みる暇はない。傷いた將監の介抱に、表面ながらも女どもの指圖に忙しく落付いてなどは居られない。平内も彌六も駆り集められて、持場々々を固めて居る。此城の中で爲すことのない閑人ありとすれば、それは唯若菜一人である。

見渡すと、夕暮れの空が彩つた紫色の山々の木の間に寄手の旗差物が翻騰としてゐる。関の聲が木魂に響いて物凄く聞える。はや合戦は始まつたらしい。戰場から引き返した、打ち漏らされた城の兵士はもう疲れ切つてゐる。残りの城中の人々は數も少ない。

鎧を肩に投げかけ、大太刀引抜いて、城門から外に乗り出たのは、確に孫二郎である。汗馬に泡を吹かせて花々しく合戦し、いくつかの首提て、さつと引揚げる。それ打取つて恩賞に與れや人々と、寄手

の兵どもは競ひかゝつて追ひすがるを、孫二郎は素早く城門をさつと閉ざして、遠矢に射て應戦する。春の日はだん／＼に暮れ行く。城外の山々では篝火をあちこちと盛に燃く。城中の大廣間では、畠山右衛門佐義就を初めとして、孫二郎以下の面々が談合してゐると云ふことである。どうやら此城の運命は刻々に迫つて来るやうに覺える。若菜も我が身の運命がそれに依つて定まるのではないかと思はず吐息をついた。

づるい奴は平内である。城中に引籠つて城に殉するなどは氣の利かぬ話、それよりも京の女を引さらへて逃ぐるに若かず、幸ひ擲手の方へはまだ寄手の勢が廻り居らぬ。此ひまにと、人目を忍んで、そと若菜の居間へと音づれた。

「汝は何ものぢや。」と、若菜は具足つけた平内をきつと見た。

「某めは平内と申す名もない奴にござります。孫二郎殿の仰せで、お身様のお伴申せと今日云ひつかりましてござりまするが、御覽なざるゝ通り、敵の勢が寄せまして、合戦になりました。もう籠城にござりまするが、此城とても長うは持ちつゞけませぬ、いづれは落城にござりませう。其折通れうとて通るゝことは難うござりますれば、今のうちにお伴申して京へ參らうと存じます。」と、此奴素敏く彌六の役を身に引受けたのである。

そりや渡りに船と、若菜は、

「おうさうであつたか。そりや御苦勞のう。ぢやが寄手の勢が取圍んでゐるのに、通れることが出来ようか。」

「此城の案内は某善う存じて居ります。幸ひ某は搦手の番をつとめて居りますれば、お身様をお落し申すでござりませう。ちとばかりは木の根岩角をお踏みなされねばなりませぬが、富田林の方へ間道がござりますれば、今のうちに通ることはさほど難うもござりませぬ。唯一刻も早うお仕度なされませ。」と、まめしく申す。

よし敵兵に捕へられたとて、畠山尾張守の勢と聞けば、却つて京へ歸る便とならうやらも知れず。なまじ孫二郎の配下のもとに付き纏はれて、飛んでもない憂目を見ようよりも、或は其方がよいやらも知れず。所詮此城にゐては災難に遭うであらう、ちつとも早う遁れ出よう、と若菜は、

「心得た。さらば頼うだぞよ。」と、甲斐々々しく身仕度する。

夜に入つても関の聲は折々聞えて、城中城外の形勢は物物しい。

山路の巻

断末魔

孫二郎が大重になつて、三面六臂、獅子奮迅の勢ひの大立廻りも、浮足立つた味方の勢を盛返すことを得ず、一の木戸はは破れて、二の木戸も危うなつた、畠山右衛門佐義就は、傷ついた長野將監の枕邊近くへ立寄り、

「將監、此城の運命も、もう極つたとは見えた。一先づ金胎寺に落居致し、後日、此處も若江も取戻さうではないか。汝も手痛い傷負うてはゐやるが、乗物になと乗り、忍んで金胎寺へ参るがよい。」と慨然たる面色で物語ると、將監は苦しい息の下から、

「某は此やうな手傷負うて居りますれば、金胎寺へ罷り越すことは、容易でござりませぬ。此城とともに某の命も終りませう、君には一先づ金胎寺にお越しなされ、やがて目出たう御運をお開きなされませ。あの孫二郎め、某の亡き後には、君に御奉公申し、天晴れの忠節を勵むやう申つけますのでござりませう。」と云ふ言葉も絶えくである。

折しも二の木戸が破れたりと思しく、関の聲がわつとばかりに雷の落つるが如く響いた。もはや城の落つるに間もない。うかく致さば、城と運命を俱にせねばならぬ。此間にちつとも早く搦手から粗路傳ひに金胎寺に落ち行かねば、遁るゝ路はない、と右衛門佐は、眼をしばだたき、

「將監、名残りは惜いが、さらばぢや。」

「あれあのやうに関の聲が聞えます。一刻も早う此城をお脱けなされませ。」

「むう、加何にも忍びぬ所ぢやが、是非に及ばぬ。」と、右衛門佐は横はる將監に一禮して、外の方へと退り出る。

「薊々」と、將監は聲を限りに愛妾薊の名を呼んだが、薊の影は夙うの先から此室内には見えぬ。

見えぬも道理、薊はあるほどの寶を身につけて、逐電の用意に忙しい。唯女の足下の心元なげなると女と侮りて野武士などに脅かされうとの懸念がある。頼むは孫二郎、ともかくも其人に誘はれ助けられ城を出でうと待ち構へてゐるが、孫二郎の姿は皆目見えぬ。若しや亂軍の間に、討死でもしたのでなからうか。玉の緒の絶えなんとしてゐる將監を棄て置くは、破れ草鞋を脱ぎ棄てるよりも容易であるが孫二郎の生死は、孫二郎其人に取りてよりか、薊自身に取りて大切な問題であつた。

「孫さんはどうしやつたであらう。おう夥しい関の聲ぢや、敵もはや間近う寄せ來たと見えるに、孫

さんの姿が見えぬ。これそのあたりへ參つて孫さんの容子を見ておぢや。」と、侍女に云ひつけて、外の方へと出しやる。

所へ血刀提けて大重に髪振り亂した孫二郎がひよつこり顔を現はす。

「おう薊、此にか。」

「あゝこれ孫さん。」

「兄上はどうぢや。」

「もう息をお引取りや。」

「はてさて是非に及ばぬ。さらば逃げう、參れ。但し此城を敵に此儘渡すことはならぬ、火を放けて參らうぞ。」

と、孫二郎は薊の手を引き、城の搦手へと出る。

「汝は暫し此に待つてゐやれ。」と、云ひ置きながら、篝火の中から、太さうな松薪引き抜き、振擧げて城中へ取つて返し、あちこちへ火を移して、又搦手の方へと立ち戻る。

「さあ薊參らう。」

「孫さん、もうこれからは天下暗れての夫婦やな。」

「如何にもはや心がかりはござらぬ。」

「してこれからは何方へ。」

「金胎寺とも思ふが、それよりは龍泉寺へ参らう。」

城の櫓の窓々からは黒煙を噴く、炎を吐く、急ちにして、城は一面の火の柱。暗路を照らす燈火となつて、落人には便がよい。

「あゝ城が焼け落ちるわ。」

それでも孫二郎は感慨の面色にて振り返る。

「おう怖しい炎ぢや、夥しい火の粉ぢや。結句焼け行くので懸念がなうて、心が清々しうあるわ。」と
薊は憂い笑を口のほとりに漂はせた。けれど今焼け落ちる城は將監の墓場である。魔のやうな女は、涙を其墓場に潑がすに、却つて冷な笑を以て、悲しい斷末魔を見送つてゐる。

凄じい物音がして、ぱつと夥しく炎が立上つた。梁が落ちたと覺しい。冷やかに此體を眺めてゐた薊は、おびえるやうに、

「あれ將監様が。」と、聲を振絞つて、思はず握つてゐた孫二郎の手を放した。孫二郎もぎよつとして、

「何、兄上が、どこどこに。」と、炎の間をためつすかしつして見たが、固より將監の姿も、又それらし

いものも目に入らぬ。

「どこどこにゐやると申すか。」と、孫二郎は薊の顔を見て、はつとばかりに驚いた。炎に映えて、晝よりも明るいから、薊の顔は、判然と孫二郎の目にうつつた。其顔色は土氣色で、此世の人とは思はれぬまでに青い。立ちも得ならで、倒れるやうに、孫二郎の肩に凭りかゝつた。

「これ薊、如何致した。」と、孫二郎は忙しく問ふ。

「うゝゝゝ。」と、ばかりで、薊の首はうなだれる。同時にぱつたり、そこへ倒れて、起きも上らぬ。

城の方に當つて夥しい関の聲が聞える。落ち行く城兵を追ひ撃ちせうと、敵勢は手を分けて、競ひ出たらしい。

「さあ、薊、立てと申すに。うかゝ此に長居しては、敵勢に捕はれて憂目を見るであらう。まつた野武士どもに追ひ刺ぎせられうも知れぬ。氣を確に持つて、龍泉寺まで落ち延び致さう。」と、孫二郎は薊の耳に口あてゝ叫んだが、薊は氣絶したのか、返辭もない。肩にかけてなりとも、孫二郎は抱き起さうとしたが、薊はぐにやりとして、起きさうにしたのが、又倒れる。孫二郎は手を放して、冷かに眺め、

「嫉妬の深い、悪性な此女子に一生つき纏はるれば、どのやうな難儀な目に逢ふやらも知れぬ。又兄の

寵者と斯うした中と誣はれるも、世間の口端が胡蝶い。此女子の氣絶はこりや天の御加護ぢや。丁度よい潮時ぢや、棄て置いてあの京の御所の女子を探し出さう。おうさうぢや。」と、薊の體を草叢の中へ押し轉かして、あとをも見ずに孫二郎は山路を直走り。

長 驅

東寺の敵營から逃れ出た遊佐八郎は、馬に鞭打つて鳥羽街道を河内へと向つた。

夜の闇はやう／＼に明け離れて、紺碧の雲なき大空には曉鳥が二羽三羽翔けて行く。ところ／＼の賤が伏屋からは朝餉の烟が立迷うて見える。馬の蹄に道芝の露を踏んで、城南の離宮、鳥羽の懸塚を左に見て、淀へとかゝる。淀川の流は藍を溶して、比良比叡、月ヶ瀬笠置の山々の雪解の水に水嵩も増してゐる。鳩ヶ峯の翠微は目の前に迫つて、橋本の渡には舟待つ人の顔も朗かであつた。

河内の若江近くに往くと、行き來ふ人の足も忙しい。

「此頃のやうに斯う合戦ばかりあつては、落付いて世稼ぎもならぬ。いや途方もない世の中であるのう。」

「田畑は荒される。時によると、村里は焼かれる。血腥い風は吹く、流れ矢は飛んで来る。生命も危うう。」

あるわ。」

と、語る聲さへ、あちこちに聞える。

とある道傍の茶店の前でひらりと馬を降り下ると、合戦場から來た武者と見たか、老嫗は慌てゝ逃げ入らうとする。竈に蹴つまづく、茶碗をひっくり返す、床几を倒す。

「あゝこれ嫗、騒ぎやるな、某は恐いものではない。咽喉が乾く、茶など、湯など吞ませてくりやれ。」

と、八郎は手で口で制する。

「はい／＼／＼。」と、老嫗の聲はまだ震へて、舌の根も合はない。

「こりや飛んだ氣の毒致いたのう。心置きないものぢやほどに、氣を安めてくりやれ。」と、八郎は、どつかと、その床几に腰をかける。

途端に、

「おう辛度や。」と、云ひながら、此あたりのものらしい男がつと一足入りかゝつて、八郎の姿を見、

「えッ。」と、おびえたやうに後退りして、逃出さうとする。

「あゝこれ、怖しうはない。」

「へえ。」と、云つたきり眼をばちくりさせてゐる。

「ちと物が聞きたい。此あたりに合戦でもあつたのかのう。」と、云はれて、男は、

「此方は合戦に出たお人ぢやないかのう。」と、やゝ安心の體たらく。

「如何にも京から参つたものぢや。將軍家に仕へ申すものぢや。」と、八郎は落付き拂つて云ふ。斯う云はれて、老嫗もやつと氣を落ちつけたらしい。

「されば合戦をお知りやらぬか。」と、男は向ひ側の床几に腰を下しながら尋ぬる。

「一向に存ぜぬ。」

「兩島山が昨日から激しい合戦でござつた。」

「して其勝負は。」

「右衛門佐殿が尾張守殿を攻めにおさつたが、美事敗北して嶽山へと退陣。それ追うて尾張守殿が直攻に攻められました。」

「おう何と、嶽山へ尾張守殿が押し寄せたとな。」

「さやうにござりまする。右衛門佐殿は散々の敗北、尾張守殿の勢は勝ち誇つて、嶽山金胎寺龍泉寺

落してくれうと、追ひ撃にござりまする。途中にて右衛門佐殿が喰ひ止めればよし、喰ひ止めること叶はぬとならば、今日中には嶽山は取圍まれるでござりませう。」

「さらば今は追撃の途すがらぢやな。」

「如何にもさやうにござりまする。」

「右衛門佐殿も剛男の大将。嶽山まで敵勢に脅されることはあるまい。」と、云へば、男は頭を打掉り、

「右衛門佐殿の勢はいかい疲れでござる。又人数も少く、尾張守殿の勢を防ぐことは得なり申すまい。

尾張守殿の勢は洪水のやうでござるが、右衛門佐殿は軟弱い堤ぢや。嶽山勢も少いと申す。一溜りもな

う攻め落されるでござらう。」

「何と嶽山は一溜りもなく攻め落されるとな。」思はず八郎は心の中で斯う叫んだ。其嶽山には若菜が囚はれの身となつてゐる。嶽山陥落すとならば、若菜の運命も亦危い。

「むう。」と、云つたきり、つかくと表へ走り出し、其儘ひらりと馬に飛び乗ると、跡をも見ずに、砂を蹴つて嶽山城へと指した。驚いたのは、茶店の床几に腰かけてゐた男と老嫗とである。

「ひやー、やつぱりありや島山勢さうな。」

女の聲

170

遊佐八郎が直走りに走つて、嶽山近くへ来たときは、もう日が暮れかゝつてゐた。行く手には関の聲が聞え、矢叫びの音がして、尾張守の勢ははや嶽山城に迫つてゐる。

八郎は氣が氣でない。嶽山城が陥らぬ先に城中へ忍び入り、若菜を救ひ出さうと、あせりにあせつたが、尾張守の勢で道が塞つてゐるので、此儘に城に入ることは難い。搦手の方に廻つて、城内への通路を探らうと、山の背後へ出たときには、三の木戸は既に破れたのである。疲れ切つた馬を籠に乗り放ち、粗路を傳ひ傳ひて、搦手に近よるとたんに、城の方で火の手がぱつと上る。あたりは一面に炎の海と化した。あゝ遅かつた。嶽山は落城したのである。

「やあ落ちた。若菜は。」と、八郎は狂氣の如く木の根巖角にすがつて、搦手へ出ようともがく。搦手から三々五々に落ち行く城兵の姿は影繪の如く映つる。若しや其中に若菜はあらぬか、無いにしても其消息ぐらゐは知るものもあらう、と喘ぎ喘ぎ、やうやく搦手へ通ずる山道へと出た。

城中は今や修羅の巷と化してゐる。阿鼻叫喚の聲は勝鬔とともに凄しく聞えた。八郎は唯茫然としてそれを眺めてゐる。もう斯うなつては所詮若菜の安否の分るものではない。城中に躍り入つて隈なく探

さうか。勝ち誇つたる尾張守の手勢に見つけられるれば、どのやうな難儀に逢はうも知れぬ。さりとて此あたりを徘徊したところで、若菜の消息が知れるかどうか。八郎は殆ど手段を失つて、悵然としてゐる。今曉以來の疲れが失望とともに一度に身を襲うて來たので、思はずそこへどつかと坐つた。

城の焼け落ちる響は物凄くあつた。火の粉は吹雪の如く舞つてくる。炎は千道萬道となつて半天を焦してゐる。

「あゝ若菜も不運だが、某も不運だ。あゝもう一日、いや半日、いやさ一時早かつたら、何とか救ふことも出来たであらうに。」

と、八郎は遺憾やる方なく、背を決いて、炎と烟とに包まれた城を睨んでゐる。

ふと呻く聲が耳に入つた。八郎は耳を立てた。微かではあるが、確に女の聲である。八郎はぎよつとした。起ち上つて、その方へつかくと二足三足進む。見ると草叢の中に倒れてゐるものがある。炎にすかして見ると、色美しい衣を纏うてゐる。おう女子ぢや。思はず驅け寄つて、

「誰ぢや。」と、聲をかけたが、答へはない。八郎は抱き起して、耳に大音聲。

「確かり致せ。」

振り亂した髪が青白い頬にかゝつて、誰と見定むる由もない。唯蘭麝の香がぱつと馨る。女は身體を

171

藻掻いて、八郎の手をしつかと握つた。

「孫さん。」

「何と申す、そのやうなものではない。」

「誰でござる。」と、女は目を微に開いた。

「さう云ふ汝は。」

「長野將監の寵妾、蘭でござる。」

八郎はがつかりして、握られた手を放つと、女の體は滑つて地上に轉ぶ。

「これ手荒なことをしやるな。」と、女は善めるやうに、邪慳な聲を放つた。八郎はふと案じた。長野將監と云へば、嶽山の城主である。其寵者ならば若菜の消息も知つてゐよう。

「これ女子、汝は若菜と云ふ女の居處をお知りやるか。」と、覗くやうに尋ねる。

「若菜、どのやうな女子や。」

「京から此城に參つてゐた若い女子ぢや。」

「御臺所に仕へたと云ふ女子かのう。」

「おうさう、その女子ぢやが、汝ア其行方をお知りやらぬか。」

若菜々々、如何にもあの女子の名であつたが、其女子は薊に取りて仇敵のやうな女子である。薊の額筋はびりりと動いた。八郎は固よりそれと知る由もない。けれども奸智に長けた薊は早速に思案した。孫二郎はどこへ往つたか、氣絶した此身を棄てどこへか往つた。夜露が咽喉に入つて蘇生つたものゝ手足は疲れて歩くさへに難い。まして険しい山路を女子の一人身で龍泉寺まで行くのは一方ならぬ困難である。幸ひ此男は如何なるものとも分らぬが、京から來た、あの小面憎く思ふ女子を尋ねる人である。こりや此男を欺して龍泉寺まで我身を無事に送らせよう。

「おうあの御臺所にお仕へ申したお人ならば、妾が朝夕世話してゐた。今宵も伴だちて城を遁れたのであるが、どう紛れたのやら、妾は一人後れた所へ、思ひがけなく敵人に追はれて、逃げるはずみに轉じて此仕未、其お人の往きやつた先は妾が善う知つて居る。案内して進ぜよう。」と、まことしやかに云ふ。八郎は満面に笑を湛へ、

「こりや善い處で善い人に出逢ふた。ぢやが其女子は無事に先方へ行つくであらうかのう。」と、其れでもまだ懸念に堪へぬ。

「無事とも無事とも、きつと無事にお着きやるぞへ。妾の伴人が連れ立つてあるほどに路次は懸念がな

「唯悪い鬨引いたは妾で、もう少しで生死も知れぬところであつた。」
 「そりや氣の毒な。さらば某がなり代つて、汝を先方へ送るであらう。」
 「おほ、う、う、若菜殿の身代りやのう。」と、薊は心にもない笑をしながら、人知れず舌をペロリと出す。

討手の大將

思ひがけない横手からの伏勢の爲に兄弟離れくとなつて弟八郎の行方が分らぬ。遊佐七郎は懸念に堪へぬ。ともかくも苦戦懸闘して伏勢を破つて、軍勢を立て直したものの、日は暮れる、八郎は戻つて来ぬ。あちこちに物見の兵を出して、様子を探らせたが、皆目知れぬ。知れぬとならば討死したであらうか。せめては其亡き骸なりと取收めようと、夜とともに探し廻つたが、それさへに見えぬ。さらば敵の擒とでもなつたらうか。いや、御内人の中でも大力剛膽で知られて、兄七郎さへも二目も三目も置く弟が士一揆風情に擒とならうなどとは思はれぬ。けれど若菜の安否をいたく氣にする弟のことであれば、どのやうな危険を犯したやらも知れぬ。將軍家の相續問題で意見は異にするもの、根が兄思ひ弟思ひの兄弟であるから、七郎は心甚だ安からぬ。

不安の中に夜は明け離れた。遊佐七郎からは昨日の戦況を事細に將軍家に申上げ、八郎の安否不明の趣をも申送り、今日のうちには必ず士一揆を平げるでござりませうと啓した。

八郎の行衛不明の知らせは將軍家よりも御臺所をいたく驚かせた。さらば急に加勢をと花の御所では上を下へと騒ぐ所へ、管領職を畠山政長に譲つて、今では前管領の細川右京大夫勝元が出仕に及んだ。

「東寺の士一揆は畠山右衛門佐とも氣脈を通するやりに取沙汰仕る。まつた勝元の閑糺しましたる所では近頃畿内地方を荒し廻る蓮田兵衛が其首領の由にござりまする。さすれば御内人の勢位で追ひ御けんことは容易にござりませぬ。よい大將を選び、數多の勢を添へるならでは撃ち平げんこと難うござりませう。」と、面を正して申す。

「如何にももう。」と、將軍は首肯かれて、

「さらば誰をば大將と致さう。」とのお尋ね。勝元はえへんと一つ咳きして、

「それについて言上な。仕りたいことがござりまする。赤松の後裔に法師丸と申す、年はまだ若うござりまするが、才智拔群の少年がござりまする。赤松の遺臣どもは、何がな手柄を致して主家を取り立てたいと日夜肝膽を碎いて居りますれば、幸ひ法師丸を討手の大將に御命じ下さらば、赤松の臣下どもが手を碎いて働く事は必定にござりまする。此度の大將は此法師丸に仰せ下されませうやう、勝元偏に願

ひ奉る。」

と、憚る色なく言上する。

居合せた人々は顔を見合せて、これは如何にと云つた面色である。赤松の子孫と云へば猶御勘氣の身の上である。それを前管領は討手の大将にと申すのであるから、事は甚だ異様に聞える。將軍も黙然として、まだ返へをなさらぬ。勝元は言を改め、

「赤松は御勘氣の身の上にはござりますれど、近來世の中も騒がしい時節にござりますれば、天晴れの功名手柄を立てた曉には、御勘氣御赦免と云ふ君が寛仁の御徳を御示しに相成らば、赤松の主従は天にも登る喜悅にござりませう。君の爲には忠臣を加へ、天下國家の爲には、よい大将を得ると申すものさらば特別の御沙汰下されますれば、勝元も有難い仕合せにござりまする。」と、云ふ勝元の言葉には動かすべからざる道理がある。

「其法師丸とやらはいづこにあるか。」と、將軍の仰せをも待たず、

「唯今召連れて参りました。末座にて拜調を得れば、彼が面目は之に過ぎませぬ。」

「はつ、辱けなうござりまする。」と勝元は御前を引き下つて、やがて法師丸を召連れ、遙か末座に平伏

させた。

「おうそれなるが赤松法師丸か、面を上げい。」

との御沙汰に、法師丸は面を上げる。眉目麗しい紅顔の美少年、將軍はしばし見つめて居られる。並居る人々も、其美しさに打たれて、肅然とする。やがて、

「よい稚兒のう。」と、將軍は莞爾として仰せがある。

「何卒土一揆討手の御恩命を下し賜はるやう願ひまする。」と、勝元は追ひかけての言上。

「よい、天晴れの功名手柄を致せ。」との有難い御恩命に、法師丸ははつと平伏し、

「辱けなうござりまする。必ず功名を立てまするでござりませう。」と、申す。勝元は法師丸の方を向いて、

「上様の御恩は洪大にてあるぞ。赤松氏浮沈の岐れる所ちや、手柄致して先祖以來の御勘氣御赦免となり、赤松氏の再興を致せよ。」と、嚴かに言ふ。法師丸は再拜して、此處を退り、手勢引具して東寺へと向つた。

「勝元、美しい稚兒のう。」と、將軍は微笑まれてゐる。

「あれで又一とほりならぬ利發にござりまする。」

「汝はよい物を探し出したのう。」

「何とぞ御目をかけ下さるやう、ひたすらお頼み申上ります。」

勝元は好い機に義尋僧正の頼みを果したのである。

赤松法師丸が東寺土一揆の討手の大將に選ばれたと云ふ報は、館の内外を驚かした。取り別け驚きと怒りと一所に心頭に發したのは、勝元の身にあたる山名宗全入道である。赤松の子孫とし云へば草を分け探し出して、根絶えししようとしてゐる恐しい入道である。法師丸なるものが世にありと聞いて、手を替へ品を替へて探し求めてゐたが、僧院に潜んでゐたこととて更に手がかりがなかつた。それが、突然と婿の細川勝元の推舉で世に現れて、赤松氏再興の運を開かうとするのであるから、さあ怒つたの怒らないのと云つて、殆ど言語に絶する憤激。驅け寄せて討つてくれようとまで猛り立つたが、將軍家から命を受けて土一揆を討たうとする大將。まして其背後には細川前管領と云ふ勢力がついてゐる。なまじ手出ししたらば、どのやうな難儀が湧いて来るやらも知れぬ。もう此うなつたら、頼む所は御臺所より外にない。幸ひ御臺所は相續問題から、勝元とは犬と猿との間。よし／＼此宗全は御臺所と一つになり、勝元を追ひ退けて、赤松をつぶしてくれようと宗全はやつと思ひ返した。

刺客の巻

男女の争

薊を途中で置き去りにした孫二郎は、龍泉寺へ辿りついたが、城の防禦や、敵勢の喰ひ止めなどより、氣にかゝるは、若菜の行方である。家の子郎黨を金胎寺若くは富田林へ叱るやうに急しく遣して様子を見せにやつたが、其消息は未だに分らぬ。孫二郎は氣が氣でない。ところへ夜更になつて一人の女が尋ねて来たとの知らせ、孫二郎は少からず面喰つて、さあ誰だか見當がつかぬ。

「何、女子と申すか。其女子は唯一人か。」

「いや、誰やら見知らぬ男が一人付き添うて居ります。」と、取次の者は答へる。

「ふむ、年若の女子か。」

「面を隠して居りまするので、そこは善う分りませぬど、聲音はどうやら若げにござりまする。」

若しやそれが若菜ではないか。嶽山の城を逃げ出したとして行手には敵勢が立ち塞つてゐるから、所詮は金胎寺か此城に來ねばならぬ。金胎寺には畠山右衛門佐が通れてゐるから、翌日より又合戦の場と

なるは必定。龍泉寺は嶽山の南麓にあるたゞ申譯だけの出城で、長野將監の配下に屬すれば、長野の臣下が附添うてゐる若菜の此城に来るは有り勝のことである。孫二郎は思はずぞくくする。

「其女子を此へ通せと申せ。」

夕刻よりの合戦に疲れて、もう寝ようとしてゐた孫二郎は急に衣紋をかい繕ふ、居住ひを正す。嶽山の城が亡せたとして、若菜が我が手に入れば、此上ない喜と、獨りほくそ笑んでゐる。

途端に襖ががらりと明くと、轉ぶが如く躍り込んで、孫二郎にしがみついたのは、行倒れとなつて生死も知れぬ薊であつた。

「えゝこゝな不實者奴が、善うもく山の中へ置き去りにしよつたな。」と、孫二郎の胸倉取つて武者振りつく。孫二郎は驚いたの、驚かないの、面喰つて言葉さへも出ぬ。

「許せ、放せ〜。」

「何の放さうかい。此の人でなしの剛つくばりめが、おめく此城に善う居よるのう。」

取次の男は燈下にそれを城主將監の寵者と知つて、手の出しやうもなく、唯呆氣に取られて見て居る。

更に驚いたのは、薊を扶けて來た遊佐八郎である。何が何やらさつぱり分らぬ。

「これ案内のお人、あの女子は嶽山の城主の妾にごさるか。」

と、小聲になつて尋ねる。

「此方はどこのお方ぢや、御存じないか。此私もあの女子と知らで案内したが、ありや正しく城主長野將監殿の寵者で、名は薊と仰せられる。」

「してあの男は。」

「ありや將監殿の御舎弟孫二郎殿でござる。」

「其の孫二郎とやらが、あの女子を如何致したと申して、あのやうな騒ぎを致すのでござる。」

「多分山中に置き去りにしたのでござらう。」

「如何にも〜、某が山中に行倒れ致してゐたのを助け連れて参つたのぢや。して見ると彼が置き去りにしたと見える。」

「それは御奇特でござる。ぢやが大きな聲では申されねど、あの女子は善うない女子で、城内では誰一人悪口致さぬものはござらぬ。殊にあの女子め、恩ある將監殿の目を忍び、孫二郎殿と不義を致しとの噂もちらほらござる。」

「そりや不埒千萬な女子であるのう。して此城中には京より若い女子が参つては居らぬか。」

「居ませぬ。」

「噂には聞きやらぬか。」

「嶽山に京の將軍家の御内に仕へ申した女子が居るとやら聞いては居るが、此城へは参らぬ。」

「さてはあの女子に欺られたか。」

「あの女子なら口から出任せの虚言申すことは上手でござる。」

八郎と案内者とのひそ／＼話などは一向耳にも入らず、中では薙が容赦なく孫二郎に掴みかゝつて「さあ此妾を棄て置いて、汝はあの京の女子を探してゐるのであらう。此情なしめが。」と、殆ど夢中の姿である。

「何の、某が其やうな不實をせう。今も今とて迎の者を山中へ遣したところである。」と、孫二郎の辯解は頗る苦しむ。

かゝる鄙しい、田舎の不義徒らを何とも思はで働く女子に欺かれて、此城まで連れられたかと思ふと八郎は急に怒氣が心中に湧く。つか／＼と進みより、薙の襟髪つかんで、

「これ女子、京より参つた女子は何處に居る。」

「えゝ知らぬ、その女子の様子を聞きたくば此不實男に聞くがよい。」と、手もつけられぬ挨拶。

孫二郎は此時八郎の姿を見て、不思議の面色。

「汝は何者ぢや、此城内に案内もなく何で参つた。」

「案内されて参つたに何の不思議があらう。其女子に聞いて見よ、委細を知らう。」

「これ薙、此見知らぬ人は何者ぢや。」

「お前の好きな京の女子を探しに來たお人ぢや。」

「其女子は此城には居らぬ。」

「其女子め山中にて助け得させたところ、まさしく此城にゐると申したるぞ。」

八郎に云はれて孫二郎はやつと我に返り、

「そりや此女子の虚言でござる。夕刻より若菜殿の行方は皆目分らぬ。」

「まことか。」

「何で虚言申さう。」

「悪い女子め。」と八郎は薙をはつたと蹴つた。

勇士來

「これ手荒な事を致すな。」と、孫二郎は薊を庇うて起ち上つた。

「汝は何者ぢや、名を名乗れ。」と、威丈高になる。

「我が名を名乗るより、其女子を助け得させた恩人なる某に何で禮申さぬ。其女子は汝とは深い由縁のある者であらう。」と、八郎に一喝されて、孫二郎は言句に塞つた。此女子の助けられたことは孫二郎に取つて、實は迷惑千萬である。あの儘に死んでしまへところ祈つたるに、わざ／＼助けて此城まで送りくれたのは、情に似て情でないと思つた。

「但し名を聞きたいとあらば名乗つて聞かさう。」と、八郎は上座の方へ歩み寄つて、

「將軍家の御内人遊佐八郎長秀とは其のことぢや。」

驚いたのは孫二郎、薊も急に小さくなる。遊佐一門は名ある大族、現に河内の守護代遊佐河内守長直も其一族であるが、將軍家の御内人として勇名隠れもない遊佐七郎、同苗八郎の兩人がある。其名は遠近に聞えて、孫二郎も、薊も將監から夙に傳へ聞いてゐたのである。折も悪しく間も悪い時に、此勇士の來臨を得たのは、此上ない不面目であつた。

孫二郎は頭を掻きながら、

「これは／＼勇士の御光來とも存ぜず、失禮な仕りました。さて／＼此度御光來の所因は如何やうな儀

で。」と、云ふをも待たず、八郎は、

「言ふにや及ぶ、御臺所の侍女若菜を引取りに参つたのぢや。」と、きつぱり云ふ。

「其儀でござりまするか。夕刻合戦の間際に行方不明と相なりたりと、先程申上げたるは虚言にござりまする。何を隠しませう。某がさる心利きたる者を伴と致し、都へと送り歸し申しました。」と、孫二郎はさもしたり顔に得々と述べる。

「それはまことか。」

「まことまこと、正眞偽りなしの誠にござりまする。今宵は富田林あたりに一夜を明して、翌日か遅くも明後日は都へ御連れ立ち致すことにござりませう。」

どうやら若菜の不在は事實であるらしい。よし都へ送り還さぬにしても、此あたりにぬことは必定である。あゝ又徒勞であつたかと、八郎は若菜と我身との不運をかこたすにはゐられない。

けれども若菜不在とあらば、此城に長くとも無用と、起ち上り、

「其薊とやらは、しかと届け得させた。さらばこれにて退參致す。」と、出で行かんとするに、孫二郎も薊も周章で、

「御待ち下されへ、之なる薊再生の恩の御禮も申さず、何とも御詫の致しやうもござらぬ。此夜深けに

不知案内の山路をお歩きなされるは御不便でござりませう。むさくるしいところではござれど、今宵一夜は此にてお明しなされませ。」と切に云ふ。此やうな汚はしい所に泊るも面白うはないが、今晩以来の疲勞で、體は綿の如くなつてゐる。なまじ兩島山が鎧を削つてゐる此ほとりを徘徊して、捕へられては一大事と、八郎は言はれるまゝに一夜を此城に明すことに決心した。

「さらば世話になりませうか。」

「それは辱けなうござりまする。此やうな合戦の最中で、何のおもてなしのしやうもござりませぬど、ゆるりと御休み下されませ。」と、孫二郎と菊とは、打つてかはつた待遇をする。八郎は別間にゆるりと手足を伸し、前後も知らず寝入つたのである。

孫二郎と菊との争ひも、八郎に名乗られたので、はつたりと止んだ。雨風が止んで月が出たやうに、陽だけでは又もとのたわいもない姦夫姦婦に立戻つてゐる。

「あの八郎め、どうやら我等の間を曉つてゐるげぢや。」と、孫二郎は呟く。

「御臺所の侍女が居よると欺いて、此城まで連れ來たので、彼奴め、いかい腹立しげぢや。かやうな人と知つたらば、途中で甘く訛かすのであつたが、殘惜いこと致いた。」と、菊は再生の恩を忘れて、口惜し氣である。けれど孫二郎には菊の知らぬ懸念がある。八郎に若菜を連れ戻られては一大事である。若

菜の行方は分らぬが、明日にもあれ、富田林からあのあたりを探したらば、よも知れぬ事はあるまい。しかし八郎と云ふ者を相手に廻しては我が事の妨げである。又後日若菜をそと奪つたと云ふこと露顯に及ば、身の破滅は知れてゐる。八郎が此城に迷ひ來たは、身に取りて迷惑ではあるが、又我身の禍を未然に防ぐ便りもある。おうさうぢや、八郎を無事に還しては一大事であると、沈黙の間に孫二郎は人知れず此やうな悪事を考へてゐる。

また孫二郎が心の歸りは菊の再生である。菊と不義の快樂を貪つてはわたものゝ、嫉妬深い、邪念の多い、蛇のやうな此女には少からず弱つてゐた。あの儘に女が山中に絶息したと信じた孫二郎は、一切の羈絆から脱けたやうに心安きを覺えたのであつたが、又つき纏はれる身となつたので、それには閉口せざるを得ない。殊に若菜と云ふ前途の光明を蔽ふ、これは陰影であつた。八郎を片付けるならば菊をも一緒に片付けたい。若菜の爲めの妨害は八郎も同様である。唯内と外との相違である。

菊は又菊で、心中に不快を感じてゐる。孫二郎の不實は山中での置き去りで分明である。如何に辯解したとて、彼が我身に秋風の立つたのはこれにて知れる。此やうな男と一緒にゐたらば、いつ我身に危難が加はるやら知れぬ。なまじ此城に逃れ來たのは、自ら好んで禍の渦流に投じたと云ふものと漸くに悟りが開けたらしい。開けると、元來が奸智に長けた女のことゝて、敏くも心に案ずる所があつた。